義平頂藤トス

レ圭ル、義朝ハッテ曰ク「怯夫竟ニ乃公ノ事ヲ敗ル」ト、子義平ヲシテ、之ヲ怖カシム、義平奮戰、自ラ重盛ヲ追フテ、紫震殿ノ庭ヲ匝ル、然レトモ衆竟ニ潰散ス、義朝乃チ關東ニ赴カント欲シ、美濃ヲ經テ尾張ニ至リ、其ノ舊臣長田忠致ニ殺サル、義平モ亦捕ヘラレテ六條磧ニ斬ラレ、信賴モ亦誅ニ伏シ、事漸ク平グ、是ニ於テ平氏獨リ盛ナリ

義朝敗リ

抑モ此ノ役ヤ、天皇若クバ上皇ノ御志ヨリ出デシニハ非ズ、一怯夫信賴ノ發頭ニテ、義朝兵ヲ擧ケシニ起ル、故ニ其ノ爭ヒヤ實ニ源平二氏ノ爭ヒ也、而ノ天皇及ヒ上皇ハ之ヲ奈何トモシ玉フ能ハズ、院廳政治モ是ニ至テ衰ヘタリトイフベシ、紀綱廢弛、政權武門ニ歸スルモ豈怪ムニ足ランヤ

源平二氏ノ爭

第六章

平氏ノ專權

平氏勃興

貞盛天慶ノ亂ニ將門ヲ誅滅シテヨリ、平氏世々將臣ニ任セラレテ、叛賊ヲ征伐ス、清盛ノ父忠盛ニ至リ、鳥羽法皇ノ寵ヲ得、累進シテ刑部卿ニ任ジ、昇殿ヲ許サル、平氏之ヨリ勃興ス、清盛保元ノ亂ニ功アリ、次テ平治ノ亂ニ義朝等亡ビシヨリ、源氏分散シテ其ノ勢力大ニ衰ヘ、平氏獨リ盛ナリ、清盛功ヲ以テ竟ニ從一位太政大臣ニ任セラレ、兼テ兵馬ノ實權ヲ掌握ス、又藤原氏ノ故智ヲ襲フテ其ノ女ヲ高倉天皇ニ納レテ中宮トシ、其ノ子重盛、宗盛等、各々大臣大將トナリ、一族六十余人、皆高位顯爵ヲ受ケ、其ノ領スル所ノ采邑天下ニ半ス、是ニ於テ人皆平族ニアラサルモノハ人間ニ非ストイフニ至レリ

平氏藤原氏故智ヲ襲フ

清盛ハ放恣豪慢ニシテ極メテ武斷ナル剛將ナリ、故ニ驕暴自恣至ラサル所ナク、第ヲ六波羅ニ起シ、多ク女子ヲ漁シ（甚シキハ故仇ノ妾ヲ納ルヽニ至ル）奢侈ヲ

極ノ、威福ヲ弄シ、自ラ官爵ヲ叙任シ、天皇朝官ヲ見ルヿ木偶ノ如シ、道路目ヲ側ツ、後白河髫シテ淨海ト號シ、尙ホ政權ヲ執リテ强傲益甚シ、後白河法皇之ヲ疾ミ玉ヘドモ奈何トモシ玉フヿ能ハズ藤原成親、源行綱、僧俊寛等、平氏ノ專横ヲ惡ミ、鹿谷ニ會シテ密カニ之ヲ亡サンヿヲ謀ル、法皇マタ其謀ニ與カヲセ玉フ、事竟ニ發覺ス、清盛大ニ怒リ、法皇ヲ幽囚シ奉ラント欲ス、重盛泣テ之ヲ諫ム、乃チ成親ヲ殺シ、俊寛等ヲ鬼界ケ嶋ニ流ス、既ニシテ重盛薨ス、重盛溫厚ニシテ沈毅、中外心ヲ屬スルモノ多シ、父ノ驕横日ニ甚シキヲ見テ、屢々之ヲ切諫ス、故ニ清盛ノ狂暴タメニ少シク息ム、重盛薨ズルニ至テ清盛マタ憚カル所ナシ、竟ニ兵數千ヲ率ヒテ京師ニ入リ、關白基房以下三十九人ノ官職ヲ奪ヒテ之ヲ流シ、法皇ヲ鳥羽殿ニ幽シ奉ル、殿ノ防衛甚ダ嚴ニシテ、膳御ヲ進メ奉ルヿ止タ朝夕ニ度ノミ、人呼テ牢御所トイフ、斯ノ如キ暴慢不敬ノヿハ、藤原氏ト雖モマタ爲リヽル所ニシテ、清盛獨リ之ヲ爲セリ、次デ高倉天皇ヲシテ御位ヲ

安德天皇

安德天皇ニ傳ヘシメ奉ツル、天皇ハ清盛ノ女ノ生ミ奉ツル所ニシテ時ニ御年甫メテ三歲ナリ

源氏既ニ衰フルト雖モ、源頼政獨リ宿將ヲ以テ京師ニ在リ、常ニ清盛ノ專横ヲ憤フル、法皇幽閉セラレ玉フニ及ヒ、法皇ノ皇子以仁王ニ勸メ奉リ、諸國ノ源氏ヲ促シテ平氏ヲ亡サンヿヲ謀ル、治承二年頼政竟ニ王ヲ奉シテ兵ヲ擧ゲ、平氏ノ軍ト宇治橋ニ戰フ、利アラズ、一族皆之ニ死ス、王モ亦流矢ニ中リテ薨シ玉フ、然レトモ諸國ノ源氏多ク王ノ令旨ヲ奉シ、

源頼朝

頼朝義仲等相次デ起ル、頼朝ハ義朝ノ第三子ナリ、始メ平氏ニ捕ハレシト雖モ、清盛ノ繼母池禪尼ノ救護ニヨリテ死セサルヲ得、伊豆ノ蛭ケ子島ニ流リル、是ニ至リ北條時政等ト謀テ兵ヲ擧ク、初メ頼義義家等功ヲ東邊ニ立テシヨリ、關東ノ武士其ノ恩威ニ服シ、世々源氏ヲ忘レズ、故ニ八州ノ將士多ク來テ頼朝ニ屬ス、頼朝竟ニ東國ヲ平定シ、居ヲ鎌倉ニ定メテ之ニ據リ、徐カニ上國ノ形勢ヲ窺フ、之ヨリ先キ清盛熱病ニ罹ル、

清盛卒シ宗盛ヲ

頼朝起リト聞キテ大ニ怒リ、其ノ子弟ニ遺言シテ卒ス、子宗盛繼ク、暗弱愚昧ニシテ、知盛等ノ如キ智勇ノ將アリト雖ヒ用フルヿ能ハス、維盛ヲ將トシテ頼朝ヲ討タシム、維盛十數萬ノ兵ニ將トシテ進テ東國ニ下リ、富士川ヲ挾ンテ源氏ノ陣ト相對ス、一夜鴻雁驚キ起ツ、平軍之ヲ聞キテ敵襲ヒ來リト爲シ、將卒皆潰走ス、頼朝ノ軍益々振フ、然レドモ歸リテ鎌倉ニ居ル、蓋シ義仲ヲシテ平氏ヲ討タシメ、己レ其變ヲ待テ大ニ起ラント欲スルカ

源義仲

義仲ハ義賢ノ遺子ニシテ、頼朝ノ從弟タリ、木曾ノ山中ニ生長ス、兵ヲ信濃ニ起シ、轉シテ越後ニ入リ、北越地方ヲ併ス、兵勢甚ダ盛ナリ、宗盛之ヲ聞キテ大ニ驚キ、諸將ヲ遣ハシテ之ヲ討タシム、義仲平軍ヲ礪波山ニ邀ヘ擊テ大ニ之ヲ敗リ、北ルヲ逐フテ長驅シ、進ンテ叡山ニ登リテ延曆寺ニ據ル、法皇夜潛カニ義仲ノ陣ニ幸シ玉フ、平氏ノ一門震慄ス、宗盛京師ニ止マルヿ能ハス、竟ニ安德天皇及ビ三種ノ神器ヲ奉シテ讃岐ニ逃ル

平氏讃岐ニ逃ル

第七章

平氏亡ヒ、源氏起ル

平氏ノ讃岐ニ逃ルヽヤ、行宮ヲ屋島ニ造ル、南海ノ士多ク來リ屬ス、義仲法皇ヲ奉ジテ京師ニ入ル、法皇大ニ義仲ノ功ヲ賞サセ玉ヒ、平氏ノ一族百八十人ノ官爵ヲ削リ、其ノ領地ヲ沒收セシメ玉フ、然レドモ當時京師ニ天皇ナシ、因テ後鳥羽天皇ヲシテ御位ニ即カセ奉ツル、古來天皇ノ登祚必ヲス三種ノ神器ヲ傳ヘサセ玉フ、之ヲ歷代ノ典例トス、然レドモ當時神器屋島ニ在リ、後鳥羽天皇ハ之ヲ傳ヘサセ玉ハズ、是レ古來曾テ其ノ例アラサリシ所ナリ

後鳥羽天皇卽位

義仲ノ京師ニ在ルヤ、剛愎驕恣至ラザル所ナク、且ツ其ノ軍糧食ニ乏シ、故ニ兵士出テヽ市中ノ財物ヲ掠奪シ、婦女ヲ凌辱ス、京人大ニ之レニ苦ム、法皇マタ義仲ヲ厭ハセ玉ヒ、頼朝ヲ召シテ京師ヲ守衛セシムル御心アリ、義仲之ヲ聞キテ大ニ怒リ、天皇及ビ法皇ヲ幽閉シ奉リ、且ツ法皇ニ

平氏亡ヒ源氏起ル

遍テ頼朝ヲ討ズルノ院宣ヲ請フ、時ニ義仲ノ兵平軍ト戰フテ敗ル、義仲

頼朝、義仲ヲ

ヲト和シ、共ニ頼朝ヲ亡ボサント欲ス、宗盛之ニ與ミセズ、頼朝遙カニ之ヲ聞キ、弟範頼義經ヲシテ大軍ヲ率ヒテ義仲ヲ討タシム、義經始メ九郎

源義

ト稱ス、鞍馬山ニ生長シ、後陸奥ニ下ル、劍技ニ熟シ、兵法ニ通ズ、精悍敏捷ニシテ戰ヲ善クス、義仲之ヲ宇治川ニ防グ、東軍ノ士佐々木高綱等流ヲ亂テ進ム、義仲ノ軍支フルヿ能ハズ、義經急ニ京師ニ入ル、義仲逃レテ越

義仲戰死

前ニ歸ラント欲シ、路ニ流矢ニ中テ死ス、時ニ年三十一、其ノ臣屬等皆滅ボサル

生田森ノ戰

平氏義仲ノ死スルヲ聞キ、進ンデ攝津ニ渡リ、城ヲ築キテ之ニ據ル、生田森ヲ以テ東門トシ、一ノ谷ヲ以テ西門トス、南ハ海ニ瀕シ、北ハ山ヲ負ヒ險崖絶壁、要害甚ダ堅シ、山陽南海ノ諸兵來リ屬シ、兵勢マタ振フ、範頼義

鵯越ノ戰

經京師ニ在リ、兵數萬ヲ率ヒテ來リ攻ム、義經間道ヲ廻リテ鵯越ニ出テ、險ヲ下リテ急ニ平軍ノ營ヲ衝キ、火ヲ放チ、吶喊シテ戰フ、平軍不意ニ驚キ、倉皇狼狽シテ度ヲ失ス、熊谷直實、梶原景季等マタ生田、一ノ谷ニ進ミ、勇戰奮鬪ス、平軍守ルヿ能ハズ、マタ舟ニ乘リテ屋島ニ逃ル、範頼進ンデ山陽道ヲ討ツ、義經颶ニ乘ジテ屋島ヲ襲ヒ、短兵急ニ接ス、平軍マタ敗レ、竟ニ安德天皇ヲ奉ジテ西海ニ泛ビ、檀ノ浦ニ泊ス、時ニ範頼赤間ケ關ニ至ル、義經舟七百餘艘ヲ以テ平軍ヲ追擊ス、平將田口成良源氏ニ降ル、義經乃チ急ニ攻メテ大ニ捷ツ、平氏ノ勇將多ク之ニ死シ、宗盛父子擒ニセラル、清盛ノ妻二位尼自カラ安德天皇ヲ抱キ奉リ、神璽寶劍ヲ挾ンテ海ニ投ズ、時ニ天皇御年八歳、或ハ曰ク「此ノ時知盛ノ謀ヲ以テ、天皇逃レテ筑前ニ幸シ、下フ又曰ク「檀ノ浦ノ戰ニ海ニ投ゼルハ容貌天皇ニ似タルヒトノミ、天皇ハ潛カニ隱岐ニ逃レ玉ヘリ」ト、今ニ至ルマテ隱岐筑前ニ天皇及ビ平氏ノ遺跡アリトイフ

平氏ノ巧將卿

天皇ノ御行

宗盛後チ鎌倉ニ引致セラレテ斬殺セラル、一族ノ生存スルモノ大抵誅殺セラレ、平氏盡ク滅ブ、是ニ於テ頼朝竟ニ天下ノ實權ヲ掌握ス

第八章

平氏ノ諸將

平安ノ朝、文弱淫靡ニ陷ルニ當リ、武人地方ニアリテ漸ク强大ヲ致シ、一日事アレハ、機ニ乘シテ直チニ其ノ積成ノ力ヲ伸ベ、皇室ヲ蔑如シ、藤原氏ヲ、嚇ス、蓋シ皇室及ヒ藤原氏ハ止ダ空位虛爵ヲ有スルノミ、之ヲ奈何トモスルヽ能ハサリシナリ、平清盛ノ如キ即チ能ク機ニ乘シ、運ニ會セルヒトノナラスヤ

清盛ハ忠盛ノ子ナリ、其ノ先ハ桓武天皇ヨリ出ツ天皇ノ皇子葛原親王始メテ平姓ヲ賜フ、親王ノ子ヲ高見王トイヒ、高見王、高望王ヲ生ミ、高望王、國香ヲ生ミ、國香、貞盛ヲ生ム、貞盛才武善ク射ル、曾テ藤原秀鄕ト共ニ平將門ヲ亡ボス、是ヨリ平氏ノ名、武人ニ重ンゼラル、貞盛以下維衡、正度、正衡、正盛等、子孫相傳ヘテ忠盛ニ至ル、忠盛白河法皇ニ寵セラレテ其ノ宮女ヲ賜ハル、清盛ハ其ノ生ム所ナリ、清盛怜悧ニシテ容貌頗ル美ナリ、

大治四年從五位下ニ叙セラレ、左兵衛佐ニ任ゼラレ、後累遷シテ安藝守ニ任セラル、熊野ニ詣ル片、伊勢安濃津ヲ過ク、鱸魚アリ、跳テ舟中ニ入ル、家人皆吉祥トナシ、武王白魚ノ瑞ニ比ス、保元ノ亂起ルヤ、始メ法皇亂起ルヲ豫知シ玉ヒ、源義朝以下十人ノ姓名ヲ書シテ守備ニ具ヘサセ玉フ、清盛預カラズ、然レトモ美福門院其ノ驅族タルヲ知リテ之ヲ召ス、清盛殊功アリ、平治ノ亂ニ義朝兵ヲ回シテ清盛ヲ六波羅ノ第ニ攻ム、清盛急ニ甲ヲ載ク、誤テ倒ニス、左右之ヲイフ、清盛詭リ答テ曰ク「至尊玆ニ在リ、我レ之ニ背スルヲ好マズ」ト、討テ義朝ノ軍ヲ退ケ、竟ニ禁內ニ入リテ名簿ヲ收ム、

亂平ノヽヤ、清盛壽ク義朝ノ諸子ヲ殺シ、獨リ常磐（清盛納レテ妾トナス）ノ子乙若、牛若等ヲ宥ス、爾後清盛大政ヲ自カラシ、仁安二年竟ニ從一位ニ陞リ、太政大臣ニ任ゼラル、翌年病アリ、剃髮シテ淨海ト號ス、驕奢至ラサル所ナシ、承安二年其ノ女德子（建禮門院）ヲ進メテ高倉天皇ノ皇后トス、清盛ノ子重盛

清盛ハ稀世ノ傑傑智ナリ

重盛

宗盛共ニ左右近衛大將トナル、平氏ノ一門朝廷ニ蔓延シ、跋扈横梁ヲ極ム、養和元年清盛病ンデ薨ス、年六十四

清盛ハ一驕將ノミ、武略人ニ過ルニアラズ、機智群ヲ超ユルニアラズ、而シテ一世ニ横梁セルヿ斯ノ如キハ何ゾヤ、時勢然ラシムルノミ、朝廷藤原氏ト共ニ衰弱シテ、何事モ爲スヿ能ハズ、諸國ノ武人マタ未ダ統一スル所ナカリシカ故ノミ、清盛ハ眞ニ稀世ノ僥倖子ナル哉

清盛ノ子ヲ重盛トス、沈毅温厚、父ニ比スレハ少シク材幹アリ、中外皆望ヲ屬ス、始メ平治ノ亂作ルヤ、清盛進退據ヲ失シ、決スルヿ能ハズ、重盛日ク、身ハ武臣タリ、天子逆徒ニ迫ラレ玉フヲ聞キテ、安ンゾ亟カニ國難ニ極カリランヤト、衆皆之ニ從フ、適々義朝ノ子義平、兵三千ヲ率ヒテ安倍野ニ陣ス、清盛衆寡敵セサルヲ恐レ、先ヅ四國ニ渡リ、兵ヲ徵シ、而シテ後戰ハントス、重盛曰ク、事若シ稽緩セバ、賊必ラズ詔命ヲ矯メテ我ヲ討タン、悔ユトモ及バスト、清盛意竟ニ決ス、平氏ノ興ル實ハ重盛參畫ノ功多キニ居ル、成親等ノ平氏ヲ亡サントト謀ルヤ、清盛怒リテ法皇ヲ幽セントト欲シ、大ニ子弟臣寮ヲ召ス、皆ナ甲シテ清盛ノ第ニ集マル、重盛後レテ至ル、宗盛其ノ烏帽直垂ナルヲ見テ、袖ヲ引キテ曰ク、大事アリテ公ヲ召ス、父君已ニ甲ス、公獨リ緩服センヤ、重盛叱シテ曰ク、是レ何ノ言ゾヤ、近衛大將ハ兵權ノ歸スル所、吾叨リニ此ノ職ヲ辱クス、若シ賊虜アラバ、則チ吾レ先ヅ兵ヲ執リテ諸軍ヲ召集セン、今ノ所謂大事トハ何ゾヤ、止ダ一家ノ私事ニ非ズヤト、衆皆聳動ス、清盛心ニ慙チテ服ヲ改ムルニ遑アラズ、甲カニ起テ素絹ヲ着シ、以テ自ラ掩フ、襟開キ甲露ハル、乃チ手ヲ以テ襟ヲ鞲ス、重盛入テ之ヲ切諫ス、仍テ泣テ曰ク、假令大人強ヒテ闕ニ向フモ、重盛ハ則チ朝恩ニ浴スルヿ深シ、入テ禁中ヲ護セサルヲ得ス、平素撫スル所ノ士、亦必ラズ重盛ノ爲メニ死ヲ効サン、義ニ義朝父ニ抗シ、竟ニ大逆不道ニ陷ル、今我レ亦免レサル歟、嗚呼孝ナラント欲スレハ忠ナラント欲スレハ孝ナラス、重盛進退正ニ谷マル、死スルニ如カス、大

人師ゲハ先ヅ重盛ノ首ヲ刎テ、而シテ後ニ其ノ志ヲ行フベシ」ト、涙言トシテ北ニ下ル、滿坐感泣ス、清盛色沮ミ、起テ內ニ入ル、重盛出テヽ將士ニ告テ曰ク「父ニ隨テ闕ニ向フ者ハ、重盛ノ首ノ隕ルヲ俟テ」ト、直チニ小松ノ第ニ歸ル、心猶ホ安ンゼス、夜急ニ令ヲ出シテ曰ク「大事アリ、速カニ來レ」衆爭フテ之ニ赴ク、集ルモノ二萬人、清盛ノ邸中復タ一人ナシ、清盛茫然トシテ出ン所ヲ知ラス、念珠ヲ手ニシテ佛名ヲ誦スルノミ、重盛出テヽ將士ヲ勞シ、謝シテ之ヲ罷メ去ル、法皇之ヲ聞召シテ感泣セサセ玉フトイフ、清盛跋扈日ニ甚シ、重盛常ニ憂懼ス、一日子維盛ニ刀ヲ與フ、維盛以爲ラク、傳家ノ寶刀小烏ナラント、之ヲ視レハ無文刀ナリ、維盛色ヲ失フ、重盛涙ヲ灑キテ曰ク「是レ大臣ノ葬時ニ佩ル所、家君百歲ノ後、我將サニ之ヲ佩ントス、然レ𪜈今思フ所アリテ以テ汝ニ與フ」ト、維盛仰キ見ルヿ能ハズ、既ニシテ重盛病ヲ以テ薨ズ、年四十二、時人哀悼ス

重盛ハ平族中ニ在テ鐵中ノ錚々、庸中ノ佼々タル者ナリ、然レ𪜈佛ヲ信ジ、細心謹行ニ過ギ、却テ長策ヲ畫シテ時事ヲ救フヿ能ハズ、終ニ憂悶シテ死ス、其ノ志悲ムベシ

宗盛、維盛、知盛、敦

重盛ノ弟宗盛怯懦ニシテ暗庸殆ンド全ク兄ニ異レリ、重盛ノ子維盛マタ庸弱ニシテ婦人ノ如シ、軍ヲ率ヒテ源氏ヲ討ズルヤ、夜鴨聲ヲ聞キテ、敵兵襲ヒ來リト爲シ、恐惶シテ京師ニ逃ケ歸ルニ至ル、但ダ宗盛ノ弟知盛、勇ニシテ喀アリ、清盛ノ甥教經、驍勇ナリ、知盛屢々策ヲ立ルト雖𪜈、宗盛僅ニ一能ハズ、此ノ二人ヲ除ケハ、他ハ悉ク婦女一般ノ柔弱男子、固トヨリ論ズルニ足ルモノナシ

夫レ平氏ノ勇武、源氏ニ及バザルヿ遠ク、而シテ其ノ功ヲ立テ恩ヲ施シテ士心ヲ收攬スルヿ亦源氏ニ及バサル也、止ダ幸運ニ乘シテ一時ニ顯揚ス、然レ𪜈風ニ京師文弱ノ風ニ浸染シ、歌舞管絃ニ耽リ、一族大抵藤原氏一流ノ人物トナレリ、故ニ北陬ノ俊傑一呼スレハ、倉皇京師ヲ捨テヽ走リ、東國ノ健兒楯ヲ拍テ來レバ、一門據所ヲ失シテ海上ニ漂泊シ、終ニ

水庫ノ薄トナル、是レ皆必至ノ勢ヒノミ、嗚呼平氏ノ突如トシテ榮ヘシハ、突如トシテ亡ル所以ナル哉

第六篇

中古史(下)

第壹章

政治(其ノ一)官制

大化ノ新政以來、官制ニ大變更ヲ生ジ、大寶養老ノ律令定マルニ及ヒテ、其ノ制大ニ備ハレリ、即チ官吏ヲ分テ內官、外官トシ、京師ニアルモノヲ內官トイヒ、地方ニアルモノヲ外官トイフ、內外官マタ文武ノ兩官ニ分ツ、內官ノ中神祇官、大政官、八省(中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮內ノ八省)彈正臺、左右京職、攝津職ヲ文官トシ、衞門府、左右衞士府、左右衞府、左右馬寮ヲ武官トシ、外官ノ中、太宰府吏ヲ文武兼官トシ、國守、郡領ヲ文官トシ、軍國ノ吏卒ヲ武官トス

內官ハ

文ハ

武ハ

文武兼ハ

神祇官ハ

太政官ハ

神祇官ハ伯之ヲ領シ、專ラ祭祀神事ヲ掌ル、太政官ハ三大臣ヲ以テ組織

セヲレ、八省諸司ノ上ニ位シテ政治ノ大綱ヲ綜理ス、其ノ管屬ノ表左ノ如シ

- 左大臣
- 太政官 太政大臣
- 右大臣
- 大納言 — 中納言 — 少納言 — 外記 — 史生
- 左弁官
  - 左大史
  - 中務省 一職、六寮、三司
  - 式部省 二寮、
  - 治部省 二寮、二司
  - 民部省 二寮
- 右辨官
  - 右大史
  - 兵部省 五司
  - 刑部省 二司
  - 大藏省 五司
  - 宮内省 一職、四寮、十三司

中務省

中務省ハ八省中、最モ重要ノ官ニシテ、意見ヲ上奏シ、勅文ヲ審署シ、詔命ヲ履奏シ、及ヒ文武勅奏授ノ辭任考課ヲ掌リ、兼テ天皇ニ侍從警衛スルヿヲモ掌リ、帶劍スルヿヲモ得（大臣ハ特命アルニ非サレハ劍ヲ帶セス）即チ其ノ實權ハ太政官ヲ拘制スルニ足ル也、又式部省ハ文官全体、兵部省ハ武官全体ノ考課選叙ヲ調査シテ、中務省ノ用ニ供フ

地方官

地方官ハ國司、郡領ノ二ニ分ツ、國司ハ守介掾目ノ總稱ニシテ、下ニ史生アリ、地方ノ政務ヲ掌ル、其ノ任期始メハ六年ニシテ、爾後長短一ナラザリシカ、承和（仁明天皇御代）以後ハ四年ト定マリタリ、郡司ハ大領、少領、主政、主帳ヲイフ、祭政ノ郡務ヲ主ル、土着終身ノ任ニシテ、罪アルニ非サレハ遷代スルヿナシ、其ノ職員左ノ如シ

- 地方官國司
  - 大國—守一、介一（大少一）、掾一（大少一）、典（大少一）
  - 上國—守一、介一、掾一、目一
  - 中國—守一、掾一、目一
  - 下國—守一、目一
- 郡司
  - 大郡—領（大少一）一、主政三、主張三
  - 上郡—領（大少一）一、主政三、主張二
  - 中郡—領（大少一）一、主政一、主張一
  - 下郡—領（大少一）一、主張一
  - 小郡—領一、主張一

爵　大寶令ノ出ルヤ、冠位ノ區別マタ大ニ定レリ、卽チ親王ハ一品ヨリ四品マテ、諸王諸臣ハ正一位ヨリ小初位下マテ、凡ソ三十階トス、其ノ五位以上ニ叙セラルヽヲ勅授トシ、內官八位、外官七位以上ニ叙セラルヽヲ奏聞ーシ、之ヨリ以下內外初位以上ニ叙セラルヽヲ判授トス

官吏ノ俸給　官吏ノ俸給ニハ、地田、耕民ヲ給シテ、封戶トナシ、布帛ノ類ヲ賜フテ、俸祿トナス、封戶ニハ位田、職分田、食封、功田、湯沐田、驛田ノ六種アリ、祿ニハ位祿、季祿、號祿ノ三種アリ、位田ハ一品以下、五品以上ニ賜フ年俸ニシテ、職分田ハ太政官以下、郡司ニ至ルマテ總テ官職アルモノニ賜フモノナリ、食封ハ一品以下、三品以上、大臣、大納言及ヒ正一位以下、從三位以上ニ賜フ、功田ハ總テ國家ニ勳功アルモノニ賜フ、大功アルモノハ之ヲ世襲シ、上功ハ三世ニ傳ヘ、中功ハ二世ニ傳ヘ、下功ハ子ニ傳フ、大功ハ謀叛以上ノ罪アレハ之ヲ沒收シ、上功以上ハ八虐ノ除名ヲ犯セハ沒收ス、湯沐田ハ中宮ニ給ス、當時中宮ト稱スルハ太皇大后、皇太后、皇后宮ノ一ナリ、驛田ハ驛長、驛子、驛馬ノ費トシテ給スル田ヲイフ、又祿ハ諸司ノ職事アルヒトニ賜フ俸給ニシテ絁、綿、布、鍬ノ四種ヨリ成リ、每年春夏ノ二期ニ之ヲ賜フ

官制ノ備ハレルヤ斯ノ如シ、然レトモ藤原氏世々太政大臣ニ任ジ、攝政關白ヲナリテ政權ヲ專ラニシ、以下ノ官司マタ漸ク世襲トナリ、門地ノ貴賤ニ由テ職ノ尊卑ヲ定メ、氏族ノ高下ニ由テ位ノ內外ヲ分チ、マタ才藝伎倆ノ如何ヲ問ハサルニ至レリ、故ニ超瞻ノ士其ノ驥足ヲ伸バスニ所ナク、殊ニ地方ニ在ル剛勇大膽ノ輩ハ、常ニ呻吟聲裏ニ不平ヲ憤フリテ世ニ出ル能ハズ、私カニ黨ヲ樹テ、力ヲ畜ヘテ以テ時會ノ乘ズヘキモノアルヲ待テリ、然ルニ門閥世襲ノ官吏ハ、安ニ馴レ、貴ニ淫シテ文弱淫佚ニ流レ、浮華ヲ事トシテ實務ニ暗ク、竟ニ紀綱ヲシテ地ニ委セシムルニ至レリ、

第二章　政治（其ノ二）法律

大化以後、養老年間ニ至テ、刑律ノ制大ニ定マル、其ノ刑ハ之ヲ分テ五種トス、左ノ如シ

笞（五等　自十至五十）
杖（五等　自六十至百）
徒（五等　自一等　流（三等　近中遠）
死（二等　絞斬）

別ニ六議、請、減、贖、當免ノ法ヲ置キテ、親、故、賢能、功貴ノ情誼ヲ存シ、老疾、婦幼ヲ隱恤シ、除免官當ノ法ヲ設ケテ官吏ヲ優待ス六議ハ第一議親（親トハ皇親及ヒ皇帝五才以下ノ親、及ヒ太皇太后、皇太后、四等以上ノ親、皇后三等以上ノ親ヲイフ）第二議故（故トハ故舊ノコトナリ）第三議賢（賢トハ大德行アリヲ云フ）第四議能（能トハ大才藝アルヲイフ）第五議功（功トハ大勲功アルヲイフ）第六議貴（貴トハ三位以上ヲイフ）ニシテ、此等ハ皆議奏シテ勅裁ヲ待ツ、請ハ六議ニ應ル者ノ近親、若シ五位及ヒ勳四等以上ノ者死罪ヲ犯スヽ、上請スルナリ、減ハ請ブヽヲ得ルモノ、近親、流罪以下ヲ犯スヽ、一等ヲ減スルナリ、贖ハ議請減ニ應ルモノヽ、近親流罪以下ヲ犯スヽ之ヲ贖フナリ

除免官當ノ法ハ、官ヲ貶シ、若クバ之ヲ褫フテ罪ニ代フルナリ、即チ三位以上、一官ヲ貶セバ徒三年ニ當リ、五位以上一官ヲ貶セハ徒二年ニ當リ、八位以上一官ヲ貶セハ徒一年ニ當ル、但シ公罪ニハ各々一年ヲ加フ、又居ル所ノ一官ヲ免シ、一年ノ後、先位ヨリ一等ヲ降シテ叙任スルヲ免所居官トイヒ、居ル所ノ官位ヲ免シ、三年ノ後、先位ヨリ二等ヲ降シテ叙任スルヲ免官トイヒ、官位ヲ除テ庶人トシ、六年ノ後再ヒ叙任スルヲ除名トイフ

但シ八虐ヲ犯スモノハ、常赦原サズ、議請減セズ、必ラズ、刑ニ當テラレテ步モ寛假サルヽヿナシ

（謀反（國家ヲ危フセントスルヲイフ）、謀大逆（山陵及ヒ宮闕ヲ毀ツヲイフ）（斬ニ父子ニ家人資財田宅並沒レ官）

一謀叛（國ニ背キ外國ニ從フヲイフ）——（絞罪）

一惡逆（祖父母父母其ノ他總テ我ヨリ上ノ近親四親ヲ毆殺スルヲイフ）（斬）

若クハ謀殺スルヲイフ

一不道（一家死罪ニアラザル三人ヲ殺シ若クハ近親以上ノ尊長及ヒ妻ヲ殺スヲイフ）（流）

一大不敬（大社ヲ毀チ若クハ大社ニ無禮ヲ加ヘ天子勅ヲ使ニ對シテ敬禮ヲ失スルヲ云）（流）

一不孝（祖父母父母ニ不孝ナル者及ヒ祖父母ノ妾ヲ奸スルヲイフ）（絞若クハ徒）

一不義（本主本國主師ヲ殺シ吏卒五位以上ノ官ノ喪ニ貞ナラザルヲイフ）（斬若クハ徒）

贖法ハ笞十毎ニ贖銅一斤、是ヨリ以上遞次十斤ヲ加ヘ、徒三年ニ至レハ六十斤、近流百斤、中流百二十斤、遠流百四十斤、二死各二百斤ナリ、今之ヲ區別スレハ左ノ如シ

刑期	贖銅
罪	二十 三十 四十 五十
笞罪 十	一斤 二斤 三斤 四斤 五斤
杖罪 六十	六斤 七十 八十 九十 一百
	七斤 八斤 九斤 十斤

流罪ノ場所ハ刑ノ輕重ニ依テ地ノ遠近ヲ分ツ、大略左ノ如シ

徒罪、	一年	一年半	二年	二半年	三年	
流罪	廿斤	三十斤	四十斤	五十斤	六十斤	
流罪 近流	百斤	百廿斤	百四十斤			
死罪 絞	二百斤	斬 二百斤				

近流（越前 距京三百五十里、安藝 距京四百十九里）

中流（信濃 距京五百六十里、伊豫 距京仝上）

遠流（佐渡 距京千二百廿五里、隱岐 距京九百十里、伊豆 距京七百七十里、安房 距京千百九十里、土佐 距京千二百廿五里、常陸 距京千五百七十五里）

司法ノ事務ハ刑部省ノ知スル所ニシテ、大中小ノ判事アリテ罪狀ヲ覈審シ、刑名ヲ斷定シテ諸訟事ヲ究問ス、又被管ニ贖贖、囚獄ノ二司アリテ囚徒ニ關スル雜事ヲ掌ル、次ニ左右京職、攝津職アリ、大宰府アリ、國司アリ、郡領アリ、職ニ由テ司法ノ事ヲ掌ル、其ノ順序ヲ表示スレハ左ノ如シ

（諸司
太政官
刑部省（京職（左京 右京）
攝津職（左京 右京）
右辨官局（諸國司（畿内（攝津ヲ除ク）
諸道（西海道ヲ除ク）
（太宰府（九國
二島 壹岐 對馬

第三章　政治（其ノ三）財政

今租稅ノ制ヲ叙スルニ方リ、先ヅ戸籍及ヒ田制ヲ觀察スルヿ順序ナリ、抑モ血統ヲ重ンジ、宗家ヲ尙ブハ、日本古來ノ風習ニシテ、中古ノ戸籍ノ

戸籍

如キモ、亦此ノ風習ヲ斟酌シテ定メタルモノナリ、即チ一戸トイフハ一族ノ宗家及ヒ租庸調ヲ納ムル公民ニシテ、其ノ一家數所ニ分居シ、各々家長アリト雖モ其ノ宗家ノ戸主ヲ以テ一戸籍トナシ、各分家ヲ以テ戸族トス、家人奴婢ハ假令一家ヲ有スルモノト雖モ、總テ主家ノ屬庸タリ、又男女ハ三歲以下ヲ黄トシ、十六歲以下ヲ少トシ、廿歲以下ヲ中トシ、廿歲ヲ丁トシ、六十一歲ヲ老トシ、六十六歲ヲ耄トス、又全國ノ戸ヲ大別シテ課戸ト不課戸ノ二トス、課戸トハ正丁及ヒ中男次丁アリテ、賦役ヲ課セラルヽ戸ヲイヒ、不課戸トハ、皇親八位以上、男十六歲以下、幷ニ蔭子五位以上ノ子、耄六十歲以上、癈疾、篤疾、妻妾、家人、奴婢等、總テ賦役ヲ課セラレサル戸ヲイフ

田

大化ノ新政ニテ租稅ノ法ヲ立ツルニ方リ、先ヅ田制ヲ定メラレタリ、其ノ制、凡ソ田長サ三十步、廣サ十二步（即チ三百六十步）ヲ一段トシ、十段ヲ一町トス、男女六歲ニ至レバ、口分田トシテ二段ノ田ヲ男子一人ニ給シ、其ノ三

口分田

男ノ一ヲ女子一人ニ給シ、女ノ三分ノ一ヲ奴一人ニ給シ、奴ノ三分ノ二ヲ婢ニ給ス、是レ唐朝班田ノ制ニ倣ヘルモノ、貧富ヲ平均シ、兼併ノ弊ヲ絶ツニ足ルカ如シト雖モ、到底永ク行ハルベキニアラズ、故ニ幾クモナクシテ班田ノ法紊レ、豪族恣ニ土地ヲ併有スルニ至レリ

當時ノ民ハ口分田ヲ給セラルヽノ外、別ニ官ニ請フテ荒蕪ノ田ヲ開拓スルヿヲ得、之ヲ墾田ト稱ス、墾田ハ始メ三世ニ限リテ之ヲ私有スルヿヲ許サレシト雖モ、天平年中ニ至リテ世襲スルヿヲ許サレタリ

口分田墾田ノ外ニ、位田、職分田、賜田、功田、神田、寺田、驛田等アリ、位田ハ位階アルヒトニ賜ヒ、職分田ハ職司アルモノニ賜ヒ、賜田ハ臨時褒賞等ニ賜ヒ、功田ハ功臣ニ賜ヒ、神田、寺田、驛田ハ神社、佛寺、驛使等ニ賜フ田地ナリ、口分田、墾田、位田、職分田ノ如キ、尋常田租ヲ輸ス諸田ハ之ヲ輸租田トイヒ、神田、寺田、放生田、勅旨田、公廨田、御巫田ノ如キ、田租ヲ官ニ輸サズ、全ク其ノ社寺、國司、御巫等ノ所得トスル諸田ハ、之ヲ不輸租田、又不稅田トイフ、又位田、職分田等當分主ナキトキハ、之ヲ人民ニ貸シテ地子ヲ納メシムルガ故ニ、之ヲ輸地子田ト稱ス

輸租田

不輸租田

輸地子田

租稅ハ之ヲ分テ租調庸ノ三種トス

田

（第一）租ハ年貢ナリ、大化ノ新政ニテ定メラレシ所、左ノ如シ

大化ノ制	水田大尺	獲米減大桝	租米全上	租米割合
一歩	方五尺	一升	三勺余	三分五厘強
一段	三百六十歩	三石六斗	一斗一升	
一町	三千六百歩	三十六石	一石一斗	

其ノ後之ヨリ少シク減セラレシヿアリ、次表ノ如シ

白雉租	水田大尺	獲米大桝	租米全上	租米割合
	方六尺	一升	三勺	三
	二百五十歩	二石五斗	七升五合	

一制	二千五百歩	二十五石	七斗五升	分

義老中ニ至リテ、マタ大化ノ古制ニ復ス、慶雲中ニ至リテ又頗ブル減ゼ

一應	水田大尺	獲米減大桝	租米全上	租米割合
一雲	一歩 方五尺	一升	二勺余	二分八毛強
一和	一段 三百六十歩	三石六斗	七升五合	
一制	一町 三千六百歩	三十六石	七斗五升	

歩坪ノ廣狹ト、減大桝ト大桝トヲ用フルニ由テ、租率ノ輕重一ナラスト雖モ、蓋シ大同小異ノミ、前代三分以上ノ率ニ比ブレハ、慶雲ノ租率ハ實ニ低廉ナリ〻〻ハサル可ラズ、然レモ和銅年間ニ至リテハ更ニ左ノ如ク改メラレタリ

一和	水田和銅大尺	獲米大桝	租米全上	租米割合
一銅	一歩 方六尺	六合九勺四撮余	二勺零八余	三分
一和	一段 三百六十歩	二石五斗	七升五合	
一制	一町 三千六百歩	二十五石	七斗五升	

地子ハ官田ヲ私借シテ耕種スルモノヨリ、田地ノ等級ニヨツテ、其ノ獲米ノ五分ノ一ヲ輸サシム、即チ獲米上田ハ五百束、中田ハ四百束、下田ハ三百束、下々田ハ百五十束トス、故ニ地子ハ一段ニ付一斗五升、一町ニ付一石五斗ニ當ル

(第二)庸ハ免役料ニシテ、賦役ニ出ツベキ代リニ納ムル所ノ稅ナリ、大化二年詔シテ一戶ニ庸布一丈二尺、庸米五斗ヲ納メシム、後ニ大寶律ヲ定メラルヽニ及ヒ、凡ソ百姓正丁タル間ハ、二十一歲ヨリ六十歲マテ、每年十日ヅヽ賦役ニ就カシメ、其ノ就ク能ハサルモノハ、一日ニ付布二尺

六寸ノ割ヲ以テ十日分ヲ納メシム、即チ二丈六尺ナリ、但シ正役ニ就ク
ノ外、猶ホ加役三十日ニ充ルトキハ、租調共ニ免ゼラル、其ノ三十日ニ充タ
サルモノハ、租調ヲ三十分シテ其ノ一分ヲ一日トシ、加役ノ日數ヲ算シ
テ之ヲ免ス、次丁ハ六十歳以上、若クハ病者ニシテ、二人ヲ以テ正丁一人
ニ充ツ、之ヲ表示スレハ左ノ如シ

大寶庸制		正丁	次丁
十日	歳役	庸	歳役
二丈六尺	加役	布	庸
三十日 租調共ニ免ス			布
五日			加役
一丈三尺			
十五日 租調共ニ免ス			

（第三）調ハ小物成、及ヒ諸種ノ運上ナリ、絹、絁、絲、綿、布、鹽、鐵等其ノ鄕土ニ產
スル物ヲ納ム、大化二年詔シテ田ノ賦役ヲ罷メテ、田ノ調ヲ行フ、凡ソ田
一町ニ付絹ナラハ一丈（四町ニシテ疋ヲ成ス）絁ナラハ二丈（二町ニシテ疋ヲ成ス）布ナラハ
四丈（一町ニシテ端ヲ成ス）其ノ廣サ各々二尺五寸トシ、別ニ戶別ノ調アリ、一戶ニ

付布一丈二尺トス、左ニ當時ノ制ヲ表示セン

大化調制			
田一町	一戶	百戶	二百戶
絹一丈（廣二尺半）			
絁二丈（疋上）	布一丈二尺	副物鹽贄	中馬一匹
布四丈（端上）			細馬一匹

大寶律ノ發布ニ及ヒ、改メテ丁男ニ課ス、其ノ制正丁一人ニ付、絹又ハ絁
ナレハ八尺五寸、六丁（一人ヲ以テ正丁トス）ニシテ疋（長サ五丈）一尺ヲ成シ、美濃絁ナレ
ハ六尺五寸、八丁ニシテ疋（長サ五丈）二尺ヲ成シ、絲ナレハ八兩、二丁ニシテ鉤（十六
兩）ヲ成シ、綿ナレハ一斤、二丁ニシテ屯（二斤）ヲ成シ、布ナレハ二丈六尺、二丁
ニシテ端（長サ五丈二尺）ヲ成ス、次丁ニハ其ノ二分ノ一ヲ課ス、即チ次丁二人ニ
シテ正丁一人ニ中ル、中男（十六歳ヨリ廿年迄ノ者）ハ其ノ四分ノ一ヲ課ス、即チ中男
四人ニシテ正丁一人ニ當ル、又雜物アリ、調ノ副物アリ、此等ヲ合セテ共

調トイフ、左ニ其ノ制ヲ示サン

正調

品目	正丁次丁	正丁中男	調副物
絹	廣長八尺五寸 廣二尺二寸 二分一	四分一	紫
絁	廣長同 同	右	紅
美濃絁	廣長六尺五寸 廣二尺二寸 同	右	茜
紙	八兩 同	右	蓮黃
綿	一斤 同	右	束木綿
布	廣長二丈六尺 廣二尺四寸 同	右	安藝木綿
望陀布	廣長一丈三尺 廣二尺八寸 同	右	麻
雜物			熟麻
品目	正丁次丁	正丁中男	菓

麻	同	二斤	
熟麻	同	十兩 十六銖	
菓	同	十二兩	

調

鐵	十斤	二分一	四分一
鉛	三口	同	右
鹽	三斗	同	右
酒	十八斤	同	右
堅魚	卅五斤	同	右
鳥賊	三十斤	同	右
埋	卅二斤	同	右
海鼠	廿六斤	同	右
雜魚楚割	五十斤	同	右

黃蘗	同	七斤	
黑葛	同	六斤	
木賊	同	六兩	
胡麻油	同	七勺	
麻子油	同	七勺	
荏油	同	一合	
曼椒油	同	一合	
猪油	同	三合	

中古租稅ノ制ハ斯ノ如ク整備セシト雖モ、後ニ王綱紐ヲ失シ、莊園ノ如キモノ起ルニ及ヒ、租庸調ノ制殆ンド破レタリ

財政ハ、京師ト地方ト其ノ經濟ヲ異ニス

中央政府

京師諸官寮司ノ費用ハ、專ラ調庸及ビ年寮ノ舂米四万餘石別納ノ租穀十三萬石

地方官

ヨリ支辨シ、大藏省之ヲ管ス、地方國郡ハ專ラ田租ヲ以テ支辨ス、田租ハ正稅（動用不動雜米ノ三種ニ分ツ、動用ハ出擧シテ利ヲ收メ、不動ハ其ノ國ニ貯ヘテ不虞ニ備ヘ、雜米ハ京師ニ輸ス）公解（欠負未納ノ補充ニ、乃チ國儲ヲ補ヒ、餘ハ國司處分ニテ取ル）、雜稻（社寺料、佛會料、修理官舍料、修理驛家料、堤防料、救急料、學生料等ニ充ツ）ニ分ツ、民部省之ヲ管掌シ、每年諸國司ヨリ大張使、稅帳使、調帳史、朝集使ヲ官

四度ノ使

ニ送リテ出納ヲ計算ス、之ヲ四度ノ使トイフ、最モ重ンスル所ナリ

皇室費

皇室ノ費用ハ、畿內ノ官田百町許、園地十餘所ヨリ供スル米穀菜菓ヲ以テ天朝ニナス、又諸國ヨリ貢獻スル土地ノ名產アリ、宮內省之ヲ管掌ス

第四章　政治（其ノ四）兵制

大化ノ新政ニ由テ、封建ノ制ヲ打破スルト同時ニ、地方豪族ノ兵權ヲ解キテ之ヲ朝廷ニ收メラレタリ、即チ大化二年ノ詔勅ヲ以テ、全國ノ正丁三分ノ一ヲ取テ兵トス、天智天皇ノ御代ニ三韓ニ事アリ、乃チ兵ヲ筑紫ニ置テ邊海ヲ戒嚴ス、是レ防人ノ始メナリ、爾來朝廷意ヲ兵制ニ用キラレ

防人ノ制

防人制ハ、深ク、大寶ノ律令定マルニ及ヒ、成丁三分ノ一ヲ點シテ交々京師ニ宿衛シ、又邊境ヲ守ラシム、其ノ京師ニ有ル者ハ之ヲ衛士トイヒ、邊境ヲ戍ル者ハ之ヲ防人トイフ、其ノ上番衛士ハ一年、防人ハ三年トス、

京師ノ衛士

京師ニハ衛門府、左右衛士府、左右兵衛府アリ、五衛府ト稱ス、衛門府、衛士府ノ兵士ハ諸國上番ノモノニシテ、一年每ニ交替スレドモ、兵衛府ノ兵ハ常禁アリテ、而シテ身幹强大、弓馬ノ才ヲ具フルモノヲ撰ミ、四百人ヲ以テ定數トス、聖武天皇ノ御代ニ至リ、中衛府ヲ置キ、三百人ヲ以テ限トス、依テ通稱シテ六衛府トイフ、又淳仁天皇ノ御代ニ授刀衛ヲ置キ、稱德天皇ノ時之ヲ改メテ近衛府ト稱シ、別ニ外衛府ヲ置ク、即チ八衛府ナリ、光仁天皇ノ御代ニ之ヲ廢シテ又タ七衛府トス、平城天皇ノ御代ニ近衛府

六衛府

ヲ左近衛トナシ、中衛府ヲ右近衛トナス、而シテ六衛竟ニ永制タリ

衛士ノ外ニ內舍人、中宮舍人、東宮舍人、左右大舍人、合セテ三千人アリ、又帳內アリテ親王家ヲ護衛シ、資人アリテ五位以上ノ官人ヲ護衛ス

軍團

諸國ニハ軍團アリ、大中小ノ三等ニ分ツ、地形ノ樞要如何ニ由テ差アリ、大ハ千人、中ハ六百人、小ハ五百人以下トス、凡ソ兵士五人ヲ伍トナシ、十人ヲ火トナシ、五十人ヲ隊トナシ、隊ニ隊正一人アリ、二隊ニ一ノ旅帥アリ、二旅ニ一ノ校尉アリ、千人ニ滿ツルトキハ大毅一人、小毅二人アリテ之ヲ統ブ、又主張一人アリ、大小毅ハ部內ノ散位、勳位ノ者、若クハ庶人ノ武藝超群ノ者ヲ取リ、校尉以下ハ庶人ノ弓馬ニ便ナルモノヲ取リ、主張ハ書算ニ工ナルモノヲ取ル、一隊每ニ騎兵アリ、步兵アリ、又强壯ノモノ二人ヲ定メテ努手ト

隊伍ノ組織

出征ノ軍制

以上ハ常時ノ制ナリ、戰時ニモ亦其ノ制アリ、出兵一萬人以上一萬二千人マデヲ一軍トスレバ、將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人アリ、五千人以上九千人マデヲ一軍トスレバ、將軍、副將軍、軍監各一人、軍曹四人、錄事二人アリ、三千人以上四千人マデヲ一軍トスレバ、將軍、副將軍、軍監各　人、軍曹錄事各二人アリ、而シテ三軍ヲ總ブル每ニ大將軍　人アリ、出征スルトキニ節刀ヲ授ク、其ノ軍ニ臨ミ敵ニ對スルヤ、大毅以下軍令ニ隨ハズ、若クハ稽留ノ事アレバ、死罪以下ノ罪ヲ專決スルノ權アリ（但シ還リノ日之ヲ具狀ス、又未ダ冠ヲ脫ニ隨ヲリレハ斯ノ如キ權利ナシ）然レドモ軍畢テ歸ルヤ、節刀及ビ兵器ハ總テ之ヲ官廳ニ收ム、而シテ諸兵ヲ徵發スルハ兵部省ノ任ナリ

鎭守府

軍團ノ外、陸奧ノ膽澤ニ鎭守府アリ、將軍、軍監各一人、軍曹二人、醫師弩師各　人ヲ置ク、又鎭西ニ大宰府アリ、九州及ビ二嶋（壹岐對馬）ノ政令ヲ總ブル所ニシテ、專ラ外寇ニ備フ、養老二年ニ府制ヲ定メテ、帥、大貳、小貳、大監、小監、大典、小典等ノ官ヲ置キ、外蕃ノ朝貢使牒ノ往來、遠人ノ歸化、商船貿易

大宰府

兵權ノ分離

第一ヲ掌ル、又其ノ屬ニ防人正アリテ、防人ノ政ヲ掌ル、後ニ至リテ朝廷政事ニ怠リ、率子親王ヲ以テ正帥トス、而シテ親王自カラ任所ニ往カス、權帥若クハ、大貳ニ府事ヲ委ヌ、其ノ屬官闕員ヲ生ズルモ補ハス、防人司ノ如キハ、延喜中既ニ廢セラレテ府制漸ク破レタリ、但ダ當時事ナカリシヲ以テ、幸ニ大患ナキヲ得タルノミ

右ノ兵制ハ實ニ整備シタルモノナリシト雖モ、未ダ五十年ヲ出テサルニ兵士怯弱トナリテ用ニ堪ヘス、故ニ光仁天皇ノ御代ニ至テ、單ニ强壯ナル者ノミヲ取テ兵ト爲シ、羸弱ナル者ヲ放テ農トナセリ、是ニ於テ兵農ノ別全ク分レ、兵士ハ永ク兵士タルニ至レリ、然レトモ藤原氏政權ヲ取リテ京師腐敗シタルヨリ、兵士多ク諸國ニ歸散シ、恣ニ土地ヲ兼併シ、黨ヲ集メ私ヲ樹テ、以テ府官ヲ凌轢セリ、故ニ京師ノ六衛府ハ其ノ名アリテ殆ンド其ノ實ナク、盜賊城中ニ横行スルニ至リシカバ、宇多天皇ノ御代ニハ帶刀瀧口ノ上兵ヲ置カレ、白河天皇ノ御代ニハ北面ノ武士ヲ置カレタリ、院廳政治ノ頃ハ檢非違使兵事ト警察事務ヲ行ヒ、其ノ權力强大ナリシト雖モ、未ダ幾ナラズメ兵權竟ニ源平二族ニ屬スルニ至レリ、蓋シ兵權ノ朝廷ヲ離レシモノハ、制度ノ罪ニ非ズシテ朝廷ノ咎ナリ、文弱ニ流レテ自カラ兵權ヲ失墜シタルノ咎ナリ

第五章　文學

上古ノ世、支那ノ文學ハ既ニ三韓ヨリ我ガ國ニ來注シ、中古唐ト通スルニ至リテ、彼ノ文學ハ千里一瀉ノ勢ヲ以テ流入シ來レリ、蓋シ唐ノ文學ハ、當時交際上ニ於テ必要ナリシノミナラズ、國內ニ於テモ彼ノ文學ニ通ズルモノヲ重ンズルヿ、猶ホ明治ノ初年ニ洋學者ヲ珍重スルガ如クナリシガ故ニ、彼ノ文學ハ勢ヒ盛ンナラザルヲ得ザルナリ

始メテ學校ヲ

天智天皇ノ御代ニ、始メテ學校ヲ建テ玉ヘリ、天武天皇ノ御代ニ至リ、マタ占星臺ヲ建テ、天文博士、天文生ヲ置キ、又大學ニ音博士、書博士ヲ置カセラフ、延テ養老中ニ至リ、學制大ニ整備ス、當時大學ヲ京師ニ置キ、國學ヲ諸國ニ置ク、大學ハ專門ノ科ヲ教フル所ニシテ紀傳（歷史ヲ主トシテ文學ニ通ジ）明經（六經左氏傳論語孝經等ヲ教ユ）明法（法律格例ヲ教フ）算道（數理ヲ教ユ）ノ四科アリ、國學ハ經籍ヲ主トシテ傍ラ普通ノ學問ヲ教フル所タリ、然レドモ其ノ生徒ヲ取ルヤ、大學生ハ五位以上ノ子孫、及ビ東西史部ノ子弟ニ止マリ（八位以上ノ子孫ト雖モ願フ者アレバ）國學生ハ郡司ノ子弟ニ止マリ、共ニ十三歲以上、十六歲以下ニシテ、聰明善良ナルモノヲ撰ミ、其ノ卒業スルヤ、式部省之ヲ試驗シテ官ニ登庸ス、大學ヨリ擧グルモノハ之ヲ擧人ト稱シ、國學ヨリ擧グル者ヲ貢人ト稱ス、又俊壯ノ學生ヲ撰ミ、遣唐使ト共ニ唐ニ遣シテ留學トシ、ハカリアリ、之ヲ留學生トイフ

大學

桓武天皇ノ御代ニ至リ、平安城中ニ大學寮ヲ築カセ玉ヒ、又水田百三十二町ヲ勸學田トシテ、諸生ニ供給セシメ玉フ、大學寮ニ東西ノ兩曹アリ、東曹ハ菅原氏、西曹ハ大江氏其ノ主タリ、平城、嵯峨、淳和、仁明、文德ノ數朝ニテモ、亦學問ヲ重ンシ玉フコト深シ、故ニ此ノ間和氣清麿ノ弘文院、菅原清公ノ文章院、藤原冬嗣ノ勸學院、嵯峨皇后橘氏ノ學館院、在原業平ノ奬學院、僧空海ノ綜藝種智院等ノ私校相次テ起レリ

故ニ歷朝碩學鴻儒ノ輩出スルモノ多ク、法律ノ書、及ビ歷史等ノ編纂アリテ頗フル備ハレリ、元明天皇ノ和銅五年ニ太安麻呂勅ヲ奉ジテ古事紀ヲ撰ス、之ヲ本朝國史ノ最モ古キモノトス、次ニ日本紀、續日本紀、後日本紀、續後日本紀等ノ史アリ、皆見ルニ足ル、又醫書ノ精細ナル者モ世ニ出デ、大同類聚方（本朝醫書ノ始メ）治療記、醫方心等アリ、醫術ニ長ケタル者亦多シ、又天文星占ニ巧ミナル者モ多ク、文學ノ光輝燦然トシテ煥發セリ

本朝國史ノ始

書籍ノ板行

然レドモ當時未タ書籍ノ印行スルモノ少ク、天平中陀羅尼ヲ印行セルヲ、本邦板行ノ嚆矢タリ、其ノ後佛經ノ板行スルモノアリシカドモ、儒書ハ悉

ク謄寫セリ、或ハ紙價ノ貴キニ苦ミ、故紙ノ背ニ寫スモアリ、故ニ上流富貴ノ人ニ非ラザレバ容易ク書ヲ讀ムヲ得ザリシトイフ

支那文學ノ盛ナルト同時ニ、本朝固有ノ文學モ亦大ニ進歩開發セリ、何ヲカ本朝固有ノ文學トイフ、國語ヲ用フル和歌文章ノ如キ即チ是レナリ、和歌ハ上古ノ始メヨリ既ニ之レアリシト雖モ、意匠尚ホ單粗ニシテ見ルニ足ラザリシト雖モ、佛法傳來シテ寂滅因果等ノ觀念ヲ交ヘ且ツ唐ノ文學ノ思想ヲモ傳ヘシヨリ、趣向一變シテ琅々誦スベシ、紀貫之、藤原定家（定家ハ近世ノ人ナリ）ノ如キ其ノ最モ工ナルモノナリ、後世ノ和歌ナイフモノ多ク此二人ヲ宗トス、又文章モ唐ノ文學ノ思想ヲ傳ヘ、且ツ固有ノ語法ヲ精練セシヨリ、優美婉麗ノモノヲ出スヿ多ク、土佐日記、竹取物語（本朝小說ノ嚆矢）宇津保物語、榮華物語、源氏物語、枕草紙等アリ

文字ハ始メ支那字ヲノミ用ヒタルガ如シ、故ニ古事記、萬葉集（歌集）ノ如キハ、邦語ヲ用フト雖モ、其ノ文字ハ尚ホ漢字ヲ用ヒタリ、今ノ片假名字ハ

和學

假名文字ノ發明

吉備眞備ノ發明ニ係リ、平假名ハ弘法大師之ヲ發明スト稱セリ、唐ノ文學ハ固トヨリ漢字ヲ用ヒタリト雖モ、假名字發明アリシ以來ハ、和歌及ビ日本文ハ總テ假名字ヲ用フルヿトナレリ、是レ實ニ本邦固有ノ文學ヲ發達セシムルニ於テ、極メテ有力ナル發明ナリシ也

中古文學ノ隆ンナルヤ、三輪高市麻呂、山田三方、聚田眞人、葛野王、紀清人、舍人親王、淡路三船、吉備眞備等アリ、皆桓武以前ニ出ヅ、桓武以後ニ出デシヲ都良香、小野篁、橘房相、藤原菅根、清原夏野、三統理平、紀長谷雄、藤原在衡、菅原道眞、三善清行、菅原文時、大江匡衡、菅原輔正、藤原公任、大江匡房、藤原通俊等トス、道眞最モ博學宏才ニシテ、永ク文學者ノ宗トセラル、三善清行マタ學識アリ、道眞ト共ニ傑出ト稱セラル、此等ノ學者中、律令典故ニ通曉シ、經義ニ長シ、文章ニ工ミナルモノ多シト雖モ、徒ラニ辭誦詞句ノ末ニ陷ルノ弊ナキニアラズ、特ニ藤原氏專横以來、朝廷文弱ニ流レシカバ、文學漸ク浮華ヲ加フ

菅原道眞

三善清行

文弱ノ風朝廷ヲ吹キ靡カセシヨリ、女性ニシテ文學ニ長ケタルモノ亦輩出セリ、蓋シ詞章ノ如キ綺思艶語ヲ以テ感情ヲ描シ出スモノハ、女性ノ最モ得意トスル所、斯ノ如キアリシモ亦怪ムニ足ラズ當時女子ニシテ才筆ヲ以テ世ニ聞ヘタルモノ、紫式部、清少納言、赤染右衛門、和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔等ニシテ、此ノ中紫式部才行共ニ其ノ最タリ、著ス所源氏物語アリ、清少納言亦才學絶倫ニシテ、枕草紙ヲ著ハス、此ノ二書最モ見ルベク、後世能ク及ブモノアルヿナシ、蓋シ源氏物語ハ、艶語綺詞ヲ綴リタル小説ニシテ、枕草紙ハ興ニ觸レテ景情ヲ描シタル散文ナリ、源氏物語ハ豐富婉麗、緻密ヲ以テ優リ、枕草紙ハ雄快豪宕、奇變ヲ以テ勝リ、彼ハ花紅柳綠、春色人心ヲ怡スルガ如ク、此ハ光芒萬丈、直騰人目ヲ眩スルガ如シ、共ニ千古ノ奇文也、女性ニシテ此ノ古今絶倫ノ健腕達筆アリ、而メ時ヲ同フシテ世ニ出ヅ、マタ奇ナラズヤ、赤染右衛門以下マタ文才アリ、最モ和歌ヲ能クス、皆人口ニ膾炙セリ

源氏物語ト枕草紙

斯ノ如ク、文學ハ一時其ノ盛ヲ極メタリト雖モ、竟ニ漸ク衰微スルニ至レリ、源平ノ二氏天下ヲ左右シ、武人跋扈スル時代ニ及ンデハ、固トヨリ然ラザルヲ得ザルナリ

第六章　宗教

中古ニ至テ佛教彌ヨ盛ンナリ、歴朝ノ天皇多ク之ヲ崇敬シ玉ヒ、特ニ聖武天皇ノ如キハ、崇佛ノ餘御躬ラ三寶奴トナラセ玉ヘル程ナリシユヱ、佛寺建立ノ土木ヲ起シテ、財用ヲ吝ミ玉フヿナク、土地人民ヲ僧尼ニ寄附メ咖カモ念トシ玉ハズ、而シテ光明皇后（聖武天皇ノ皇后）ノ僧玄昉ニ於ケル、稱德天皇ノ僧道鏡ニ於ケル、亦イフニ忍ビザルモノアリ、而シテ朝廷ノ官人等ミナ悉ク佛教ニ歸依シ、爭フテ堂塔ヲ建テ、土地ヲ寄附セルノミ

ナラズ、地方ノ庶民モ亦深ク之ヲ尊信シタルガ故ニ、佛教ノ全國ニ傳播スル一火炎枯草ニ弘マルニ同ジ、始メハ天事人事ノ吉凶ハ之ヲ神ニ祈リ告ゲシト雖モ、佛教盛ナルニ至テハ、水旱兵寇アル毎ニ、必ラズ佛事ヲ修メテ之ヲ祓除セントヲ祈ル、故ニ神教ハ僅カニ祈年祭、鎭火祭、大忌祭、大祓等ノ儀式ヲ掌ルノミ、其ノ勢力微々トシテ振ハズ、佛教ノミ全國ニ蔓延セリ、夫レバ諸國ノ文殊會、國分寺、諸寺院等ノタメニ、年々官ノ米稻ヲ費スヿ三百萬束ニ上リ、他ノ臨時ノ費用ノ如キハ、實ニ貫ラレザリシトヿ

三論成實ノ二宗

斯ノ如キ時代ニ在テ、非凡傑出ノ僧侶ノ相次デ起ルハ自然ノ勢ナリ、玄昉、行基ノ如キハ、博識洽才ノ僧侶ニシテ、此ノ他唐ヨリ入朝セル名僧アリ、唐ニ留學シテ其ノ法ノ淵源ヲ探レル才僧アリ、故ニ佛法ノ教義彌ヨ高妙玄遠トナレリ、是ヨリ先キ、推古天皇ノ御代ニ高麗ノ貢僧惠灌ナル者、三論成實ノ二宗ヲ傳ヘ、齊明天皇ノ御代ニ僧智通、唐僧玄奘ニ學ビテ

法相宗、倶舍宗、華嚴宗

法相宗（唯識宗トイフヲ傳フ）、又倶舍宗（又賢首宗トイフ）ヲ傳ヘ、唐僧鑑眞歸化スルニ及ンデ、マタ律宗ヲ傳フ、桓武天皇ノ御代ニ、天台宗ノ祖最澄アリ、最澄ハ近江ノ人、七歲ニシテ學ヲ受ケ、十二歲ニシテ僧トナリ、延曆七年根本中堂ヲ比叡山ニ創ス、是レ延曆寺ノ始ナリ、後チ遣唐使藤原葛野麻呂ニ隨フテ唐ニ航シ、天台山國清寺ノ道邃ヲ師トシテ、天台ノ教義ヲ授カリ、兼テ順曉、翛然等ニ隨テ密禪ノ諸宗ヲ涉獵シ、皈リテ力ヲ布教ニ致ス、其ノ弟子、義眞、圓澄、圓仁等、名最モ高ク、皆天台ノ座主トナレリ、之ヨリ延曆寺大ニ興ル、嵯峨天皇ノ御代ニ眞言宗ノ僧空海アリ、空海ハ讃岐ノ人、幼ニシテ異才アリ、延曆ノ末年、遣唐使ニ隨フテ唐ニ入リ、青龍寺ノ僧惠果ニ從テ密教ヲ學ブ、居ル一三年ニシテ歸朝シ、普ク諸國ヲ巡リテ眞言秘密ノ教ヲ布キ、弘仁七年始メテ紀伊ノ高野山ヲ開キ、金剛峯寺ヲ建テ、眞言宗ヲ弘ム、空海博學ニシテ辨ニ長ジ、最モ書ヲ能クス、穎才遠識當世及ブモ

ノ少シ、後ニ最澄ニ謚シテ傳教大師トイヒ、空海ニ謚シテ弘法大師トイフ、後世二人ヲ擧ゲテ僧侶ノ巨擘トス

本地垂迹ノ說

最澄、空海ハ活眼能ク本邦ノ民俗性情ヲ察シ、神佛ヲ混合シ、本地垂跡ノ說ヲ唱ヘシ故ニ、曾テ神祇ヲノミ尊崇シテ佛教ニ冷淡ナリシ地方僻遠ノ民トイヘドモ、尙ホ靡然トシテ佛ニ歸依スルニ至レリ、是ニ至テ佛教益々盛ナリ

佛教ハ其ノ歸依者ヲシテ安心立命ノ觀念ヲ堅クセシメシノミナラズ、上古中古ヲ通ジテ、文學、實業等ニ裨益ヲ與ヘシヤ實ニ大ナリトス、蓋シ彼ノ宗祖タル僧侶ハ毫モ遊食座禪セズ、大抵ハ自カラ山澤ヲ跋涉シテ荒蕪ヲ拓キ、民ニ耕稼ノ法ヲ敎ヘシモアリ、道路ヲ通シ、橋梁ヲ架セシモアリ、先ツ實利ヲ起シテ民心ヲ收攬シ、而シテ後ニ佛敎ヲ傳ヘンコトヲ力メタリ、是レ佛敎ノ世益ヲ爲セシ所以ナルベシ、然リト雖ドモ中古佛敎ノ害モ亦甚シカリシニハ相違ナシ、例セバ僧尼ノ如キ遊食ノ徒ヲ多クシ、

宗祖タル僧侶ノ勢

寺院伽藍ヲ莊麗ニシテ、民ノ膏血ヲ盡シタルガ如キ是ナリ、又各宗各派政綱ノ地ニ委スルニ乘シ、山門中ニ宛然タル軍隊ノ組織ヲ作リ、兵器ヲ貯ヘ、糧食ヲ積ミ、法綱ヲ逃レシ惡漢無賴ノ徒（此ノ輩一ビ佛門ニ入レバ皆罰ヲ許サルヽナリ）ヲ僧兵トシテ勢力ヲ振ヒ、竟ニ神輿ヲ奉シ、兵仗ヲ擁シテ朝廷ニ强訴シ、傍若無人ノ振舞ヲ爲スニ至ル、延曆、園城、興福ノ諸寺其ノ最タルモノナリ、夫レ僧侶ノ英邁ナル法皇ト雖ドモ「天下朕ガ意ノ如クナラザルモノナシ、止ダ雙陸ノ采、加茂川ノ水、山法師ノ三ノミ奈何トモスル能ハズ」ト宣フニ至レリ

山門ノ僧侶

諸山ノ僧兵ハ、獨リ自カラ兵ヲ擁シテ威ヲ振ヒシノミナラズ、後ニハ武人ニ加擔シテ屢々戰亂ニ加ハルヽニ至レリ

第七章

風俗

服

第一服制　孝德天皇ノ御代ニハ、諸事唐制ニ摸倣セラレシガ故ニ、朝衣ノ如キモ頗ブル唐風ニ摸シタルガ如シ、養老年中ニ至テ男女貴賤ノ服制定マリ、貴人ニハ、朝服、禮服ノ二種アリ、其ノ中文官ノ服ヲ衣トイヒ、武官ノ服ヲ袴トイフ、各々色ヲ以テ上下ニ別ツ、共ニ袴ヲ穿テリ、無位及ビ庶民ノ服ニハ、制服ノ一種アリ、其ノ製文官ノ服ニ同シク、止ダ色異ナルノミ、婦人ノ服ハ貴賤トモ粗々同シク、亦袴ヲ穿テリ、其ノ色ハ概シテ紅ヲ用フ、故ニ紅袴ハ當時下婢ト雖モ尚ホ之ヲ用ヒタリトイフ

後ニ至テハ衣服ノ制ニ屢々小變革アリ、男子ノ服ニハ水干、狩衣、直衣等アリ、又官女ノ服ニハ五重、七重、八重、十重、十二一重等ト稱シテ、數枚ノ單衣ヲ重子着ルヿ起レリ、男子ハ下賤ノ者ト雖モ、總テ袴ヲ穿チ、冠ヲ戴ケリ、貴人ハ皆車ニ乘リ、牡牛ヲシテ之ヲ牽カシム、婦人ノ外出スルヤ貴女ハ、糸毛車、唐車、網代車、半蔀車等ニ乘リ、其ノ徒歩スルヤ、垂髪ヲ小袖ニ着込ミテ被衣ヲ着、若クハ市女笠ヲ被リ、又ハ被衣ノ上ニ市女笠ヲ被リ、足ニハ韈、靴、糸靴、黑皮靴、麻靴、木履、草履等ヲ穿ツ、男女幼童ハ衣服ノ色ヲ別ニシテ大人ト分ツ

髪

髪ハ、男子ハ總テ結髪ナリシト雖モ、女子ハ多ク垂髪トナシ、勞働者ニ限リテ結髪セルガ如シ、婦人ハ髪ヲ潤スニ綿油（綿ニ香油ヲ漬シタル物）ヲ用フ、面ヲ粧フニ白粉ヲ塗リ、燕脂ヲ着ケ、又齒ヲ染メ、眉ヲ拔キ、更ニ墨ヲ以テ眉ヲ畫ケリ、斯ノ如キ化粧ハ、當時婦人ノミ之ヲ爲セシニ非ス、京師ノ官人モ齒ヲ染メ眉ヲ畫キシヿ一般ノ常態ナリシトイフ

帶

上古ハ劍ノ價貴クシテ、賤民ハ容易ニ之ヲ得ルヿ能ハサリシト雖モ、後ニ其ノ製作盛ナルニ至テハ人民ノ帶劍スルモノ極メテ多シ、然レモ天武天皇ノ御代ニ、漸リニ帶劍スルヿヲ禁ジサセ玉ヒシヨリ、平民ハ全ク無刀ノ風トナレリ

家屋

第二家屋　延暦ノ遷都以來、宮殿家屋ノ建築全ク一變セリ、當時貴人ノ邸宅ハ皆門アリ、門ヲ入レバ車宿(クルマヤドリ)アリ、此ニテ車ヲ下リ、中門ニ入リ、南庭ヲ過ギテ北ニ向ヒ、寢殿ニ入ル、寢殿ハ本家ニシテ之ヲ母屋(モヤ)トイフ、母屋ノ左右ニ東西ノ對屋アリ、北ニモマタ北ノ對屋アリ、母屋ト對屋トノ間ニハ廂アリテ往來ニ便ニス、是レ普通ノ建築法ナリ、然レトモ權勢アル人ハ、大廈高屋ヲ築キ、輪奐ノ美ヲ盡セリ、就中源融ノ河原院、藤原道長ノ京極第ノ如キ、其ノ最タルモノナリ、特ニ京極第尤モ壯麗ヲ極メ、多ク新規ノ建築法ヲ用ヒ、大ニ家ヲ高クセシカバ、貴縉ノ第宅之ニ倣フモノ多ク、後ニハ舊來ノ低矮ナル建築ヲ古代造、又ハ昔造ト稱シテ、漸ク之ヲ罷フニ至レリ、又商賈ノ店ハ、重モニ柵ヲ造リ、其ノ脇ニ入口アリテ、長キ暖簾ヲ掛ケ、軒頭ニ塵避アリ、板若クバ席ニテ之ヲ作レリト云フ

商賈ノ店

貴人ノ家屋ニ用フル柱板ハ、木賊、椋葉ヲ以テ之ヲ磨キ、施スニ種々ノ彩色ヲ以テス、屋ヲ葺クニ種々ノ法アリ、瓦葺、板葺、草葺等アリシト雖モ、大抵朝廷及ヒ佛寺ハ瓦葺ヲ用ヒ、貴人ノ家ハ多ク檜皮葺ヲ用ヒタリ、又地方ノ家屋ハ小柴垣ヲ廻ラシタル中ニ建ラレタル小ナル草屋ナリシ也、母屋對屋ノ內ニハ、其ノ一所ニ蓆ヲ敷キ、更ニ疊(畳)ヲ敷キテ主客ノ座トス、又貴人ノ座ニハ床ヲ用ヒ、上ニ種々ノ敷物ヲ敷ク、座側ニハ必ラズ几帳アリ、几帳ハ木ニテ作リ、絹帛ヲ垂ル、高サ三尺許、身ヲ隱スニ足ル、當時ノ婦人ハ、他人ニ對スル時必ズ几帳ヲ隔テ、談話シ、其ノ形貌ヲ他人ニ視セシメサルヲ常トス

地方ノ家屋

食

第三食物　始メハ貴賤トモニ肉食ヲ好ミシカトモ、聖武天皇佛法ヲ信シリセ玉ヒテ、堅ク牛馬犬猿ノ肉ヲ禁シ玉ヒシヨリ、肉食漸ク衰ヘテ纔カニ魚鳥ノ肉ヲ喫フノミ、故ニ常食ハ穀物ニシテ、米飯ハ上古ノ如ク強飯、若クバ粥ヲ用フ、酒ハ濁酒ニシテ醬油ナク、多ク味噌ノミヲ用ヘリ、然レトモ當時食物調理ノ法ハ頗フル進歩シタルガ如ク、羹、鱠、鮨、鮓等アリ、又菓子ハ煎餅ノ類ニシテ、麥粉ヲ油ニテ熬ケシモノナリ、蓋シ當時未ダ

砂糖ナカリシヲ以テ、其ノ甘味ノ如キハ麥粉又ハ甘葛煎ヲ用ヒタリトイフ、又梨栗等ノ菓物、蕪菁等ノ蔬菜ヲ用ヒシモ、中古ノ初メヨリ以後ノ事ナリ

冠婚ノ禮

第四冠婚葬祭　男子十五歳ニ至レバ元服ノ禮ヲ行ヒ、女子十二三歳ニ至レバ裳着ノ禮ヲ行フ

男女ノ同等

茲ニ婚姻ノ事ヲ叙スルニ方リ、先ツ上古以來男女ノ等級ニ大差異アリシヲ言フベシ、抑モ神代以降、上古ノ初メニ於テハ、男女同等ノ地位ニアリ、蓋シ女子ハ布ヲ織リ衣ヲ製シテ、男子ニ與フルカ如キ伎倆ヲ有セシノミナラズ、男子モ能ク之ヲ優待シ、其ノ婚スルヤ男ヨリ女ノ家ニ行ケノ風アリシカバ、租稅ノ如キモ、男女同貢ノ制ナリシナリ、但シ一夫多妻ノ風ハ、上古ヨリ之レアリ、但タ正妻ハ夫ト同居シ、他ノ妻ハ別居シテ、夫ヨリ時々之ヲ訪ヘルノミ

男尊女卑

然レドモ男女同等ノ風ハ竟ニ破レテ男ヲ尊ビ女ヲ卑ムヿ甚タ盛ナルニ其ノ第一原因至レリ、其ノ原因蓋シ三アリ、第一ハ應神天皇以後儒教ヲ傳ヘシヿナリ、蓋シ儒教ハ本來女ヲ卑ムノ教ニシテ、其ノ甚ダシキハ七去ノ條ヲ立テヽ子ナキヲ以テ直チニ妻ヲ去ルヿヲ許セリ、去レバ儒教ヲ傳ヘタルガタメニ、大ニ男女間不倫ノ習惡ヲ矯正セリトハ雖ドモ、更ニ男尊女卑ノ風其ノ第二原因ヲ生セルハ明カナリ、第二ハ欽明以後、佛教ノ渡來セシヿナリ、佛教ノ婦人ヲ卑ムヤ、儒教ヨリモ甚シ、例セバ婦人ニ五障アリテ、生レナガラ其ノ罪深シ、イヒ、或ハ佛身タルヲ得ストイフノ類ナリ、斯ノ如ク宗教道義ニ由テ男尊女卑ノ感情ヲ生ジタルノ外、中古ニ至テ更ニ政治上ヨリ婦人ヲ卑ムノ風ヲ盛ニスルニ至レリ、即チ大化以來、班田、租稅、婚嫁ノ法ヲ以テ男子ノ權利義務ヲ重クシテ之ヲ揚ゲ、女子ヲ輕クシテ之ヲ抑ヘ、全ク男女尊卑ノ分ヲ明カニセリ、之ヲ第三原因トス

其ノ第三原因

男女間ノ等級ハ全ク一變シタリト雖ドモ、其ノ間ニ情ヲ通シ、愛ヲ寄スルニ節操儀範ナク、淫佚ノ風ノ行ハレシハ上古中古殆ンド異ナラズ

結婚ノ法

律令ノ定マルニ及ヒ、男子十五歲以上、女子十三歲以上ニ至レハ結婚スルヿヲ許リル、當時ノ婚姻ハ男女相識レルモノ、歌文ヲモテ消息ヲ通ジ、直チニ父母ノ許ヲ得テ當時未ダ媒妁ノ手ヲ借ル風ナシ男子ヨリ聘物ヲ贈リテ婚ヲ約シ、然ル後ニ結婚ノ式ヲ擧グ、二三日ノ後之ヲ公ニスル式アリ、露顯ト稱

葬

上古ノ才ヨリ、死者ヲ葬ムルニ、奢侈虛飾ヲ力メ、民爲メニ貧セルヿアリシカバ、孝德天皇ノ御代ニハ之ヲ禁シ、貴賤ニ由テ其ノ制ヲ定メラレタリ、然レトモ未ダ僧侶ノ手ヲ假リテ葬儀ヲ營ムヿナシ、但ダ埋葬ノ地ヲ定メ、葬禮ハ夜間之ヲ行フヿトシタルハ、此ノ時代ナリシ也、又人ヲ葬ムルニ總テ土葬ヲ用ヒ來リシト雖トモ、文武天皇ノ御代ニ、僧道尙ノ死スルヤ弟子等其ノ遺言ニヨリテ之ヲ火葬ス、是レ本朝火葬ノ嚆矢ナリ、是レヨリ火葬ノ一亦多少行ハレシト見ヘ、持統天皇ノ御遺体ノ如キモ之ヲ火葬シ奉レリ

火葬ノ始

男女ノ戲樂

中古ノ世ハ朝廷ノ官人皆文弱ニ流レ、實際ノ政務ヲ治メズシテ、歌舞音樂ノミヲ事トシ、優遊以テ春日秋夜ヲ送リタリ、故ニ宴ニハ梅花、蓮葉、萩花、菊花、曲水アリ、歌合ニ貝覆、貝合、根合、艶詞合アリ、樂ニハ神樂、催馬樂、散樂アリ、歌物ニハ今樣、風俗、郢曲アリ、其ノ他蹴鞠、打球、將棋、圍碁、雙六、投壺、及ヒ物眞似、聲業、骨業、力業等ノ戲アリ、男女饗筵ニ袂ヲ聯子、或ハ舞ヒ或ハ歌ヒ、逸樂遊興ヲノミ事トセリ

淫風甚ト

斯ノ如キ文弱ノ弊アルトキハ、男女風俗ノ壞亂アルハ蓋シ免レサルヿナリ、故ニ私ニ宮媛ニ通ズル色男アリ、有夫ノ妻ニシテ他ノ好男子ニ見ル多情婦アリ、才アル公卿ハ二三ノ婦人ニ通ゼザルハナク、淸少納言ノ如キ才女ト雖トモ、マタ屢々其ノ節操ヲ破リテ怪マス、其ノ他ハ即チ類推スベキノミ、蓋シ男女風俗ノ壞亂セルヿ、當時ヨリ甚シキハアラズ

第八章

農工商業

町村ノ制

町村ノ制ハ大化ノ新政ニテ定メラレタリト雖モ、律令ノ發布セラルヽニ及ヒテ、頗ブル定マレリ、即チ五十戸ヲ以テ一里（後改メテ郷トス）トシ、里毎ニ長一人ヲ置キ、二十里以下十六里以上ヲ大郡トシ、八里以上ヲ中郡トシ、四里以上ヲ下郡トシ、二里以上ヲ小郡トス、郡毎ニ郡領ヲ置ク、又京師ニハ坊毎ニ長一人ヲ置キ、四坊ニ令一人ヲ置ク、皆戸口ヲ檢校シ、奸罪ヲ督察シ、賦徭ヲ催驅シ、兼テ農桑ノ課植ヲ掌ル

田、宅地、園

人民ハ總テ口分田ヲ賜ハリ、又荒地ヲ開墾スレバ、墾田ヲ所有スルヿヲ得、口分田墾田ハ皆水田ナリ、此ノ外ニハ陸田アリ、宅地アリ、園地アリ、陸田ハ人ニヨリテ數町歩以上ヲ賜ハリ、粟麥等ヲ植フ、宅地ハ空地ヲ便宜占有スルヿヲ許サレ、園地ハ鄉土ノ廣狹ニ應シテ之ヲ賜ヒ、戸ノ等級ニ隨テ桑漆ヲ植フルノ制ナリ、即チ上戸桑三百本、漆百本以上、中戸桑二百本、漆七十本以上下、戸桑百本、漆七十本以上トス

貸付

口分田、宅地、園地ヲ賜ハルヿ斯ノ如クナリシカバ、民甚タシク窮スル者ナカリシト雖モ、年ニ豐歉アリ、身ニ疾病アリ、動モスレバ飢寒滯稅等ノ患ナキニ非ス、是ニ於テ義倉及ヒ出擧ノ法アリ

義倉ハ田租ノ外ニ粟ヲ收メテ之ヲ蓄ヘ、窮民ヲ賑救スルニ備フルナリ、粟ヲ收ムルノ制、一位以下雜色ニ至ルマデ、口ノ多少ヲ計リテ戸ヲ九等ニ分チ、上々戸ハ二石、上中戸ハ一石六斗、上下戸ハ一石二斗、中上戸ハ一石、中々戸ハ八斗、中下戸ハ六斗、下上戸ハ四斗、下中戸ハ二斗、下々戸ハ一斗ヲ出ス、但シ稻麥豆ヲ以テ代フルモ妨ナシ、稻ハ二斗、大麥ハ一斗五升、小麥ハ二斗、大豆ハ二斗、小豆ハ一斗ヲ以テ各粟一斗ニ充ツ、孝謙天皇ノ御代ニハ、米穀ヲ貯ヘテ非常ニ備ヘ、兼テ飢民ヲ救恤スルカタメニ

不動倉常平倉

不動倉ヲ建テラレ、又光仁天皇ノ御代ニハ常平倉ヲ設ケラレタリ、常平倉ハ常ニ穀價ヲ平均スル所、官ニテ先ヅ中等ノ價ヲ定メ、豐年ニハ其ノ價ヲ

以テ之ヲ買ヒ、凶年ニハ其ノ價ヲ以テ之ヲ賣リ、以テ穀價ヲ平準セントスルモノナリ

出擧ハ分テ公擧、私擧ノ二トス、財物及ヒ稻粟ヲ人民ニ貸シ、其ノ息利ヲ收ムルナリ、凡ソ公私財物ヲ出擧スルニハ、六十日毎ニ利ヲ取リ、八分ノ一過クルヲ得ス、四百八十日ヲ過クト雖ヒ、一倍ニ過ルヲ得ス、大抵財物ノ息利ハ一倍以内トシ、稻穀ノ息利ハ十分ノ三、若クハ五トス、其ノ施行年ヲ追テ盛ンニ、凡ソ正租、公廨、雜稻、悉ク之ヲ擧シ、下民往々其ノ弊ヲ受ク、蓋シ其ノ利息ノ重キニ苦ムナリ、且ツ國司豪族等、法ヲ弄シ、欲ヲ逞フシ、侵漁誅求、甚シカリシカバ、民ノ困弊スルヿ益甚シク、義倉常平倉ノ如キモ亦無効ニ屬セリ

班田ノ法モ、莊園ノ如キ私領生シテヨリ漸ク弛廢シ、田畑ハ百姓ノ私有トナリテ、豪族土地ヲ兼併シ、貧富ノ懸隔甚タシキニ至レリ

莊園ノ起レル年月ハ今得テ之ヲ詳ニシ難シ、然レ𪜈農政稍々弛ミテ賜田、功田、寄附田等ノ竟ニ私有ニ歸セシヨリ起レルカ如シ、即チ權門勢家、恣ニ公民ヲ驅役シテ耕種セシメ、私利ヲ營ミショリ、私田漸ク多キヲ致セリ、私田ハ皆國郡ノ支配ヲ受ケズ、賦稅調庸等モ亦無カリシヲ以テ、重稅ニ苦ミシ百姓ハ之ヲ利トシテ勢家ノ民トナリ、漸次ニ莊園ヲ生出セシカ如シ、蓋シ莊園ノ地タル、全ク所有者ノ私地ニシテ、郡ニ非ス、鄉ニ非ス、故ニ國司ト雖𪜈之ヲ奈何トモスルヿ能ハズ、莊園毎ニ莊司アリテ、莊內ノ百姓ヲ使役シ、其ノ產スル所ノ財物ハ之ヲ領主ニ納メ、公事裁判ハ盡ク莊司ニテ決セルカ故ニ、百姓ハ課役ニ出ルノ義務ナク、マタ莊政簡易ナルヲ喜ヒシヨリ、莊園ノ數漸ク增加セリ、然レトモ後ニ至テ莊司ニ好市ノ人物ヲ生シ、百姓稍々之ヲ苦ムノ色アリ、且ツ全國豐富ノ土地ハ、大半莊園トナリテ朝廷收ムル所ノ租庸調大ニ減セシヲ以テ、後朱雀天皇ノ如キハ、其ノ國家ニ大弊アルヲ察シ玉ヒテ、勅シテ之ヲ廢シ玉ヘリ、是ニ於テ莊園ノ私領領主タリシ皇族、大臣、女官等、皆大ニ驚キ憂ヘシト

イフ、然レドモ未ダ幾クナラズシテ天皇崩御シ玉ヒシカバ、其ノ事竟ニ
止ミ、後三條天皇マタ力メテ之ヲ廢セントシ玉ヒシカトモ、院廳政治行
ハルヽニ及ビテ、多ク莊園ヲ置カレシカハ、其ノ數彌ヨ增加シテ、國司治
ハル所ハ莊園ノ百分ノ一ニ過キサルニ至レリ
行ハ農業ニ最モ密接ノ關係アル土地倉稟ノ制度沿革ナリ、抑モ中古ノ
時代ニ於テハ、農業益進歩シ、歷朝多ク桑漆、梨、栗、蕪、菁、豆、麥ヲ種フルヿヲ
勸奬セラレタレバ、米穀ノ外、菓物蔬菜ノ耕作モ亦盛ナリ、農具ハ大抵備
ハリカナク、機械ヲ以テ川流ヲ延キ、以テ灌漑ニ便スルヿモ行ハレ、淳
和天皇ノ御代ニハ水車ノ製造アリ、然レトモ牛馬ヲ用ヰテ田畝ヲ耕ス
ヿハ、未ダ行ハレザリシトイフ

織物

絹ハ桓武天皇ノ御代精好ナルモノ出デ、波久乃幾奴（ハクノキヌ）好絹ノ最美ナルモノ加登利（カトリ）好絹ノ別稱ナリ物等アリ、天武天皇ノ御代ニ新羅ノ使者暈繝錦ヲ獻セシヨリ、之
ヲ織出スモノアリ、此ノ御代ニ又窠子錦ヲ織ラシメ玉ヘルヿアリ、爾後

錦及ビ綾織業頗ブル盛ナリシカ、承平天慶ノ亂以後ハ絹、綾、錦等大ニ衰
ヘタリ、又天慶中越後ヨリ兎毛布ヲ獻セシヨリ、之ヲ織ルヿ行ハル、紬モ
亦中古已ニ之ヲ織出セシトイフ

建築術

建築術ハ特ニ進歩シ、大厦高塔等見ルベキノ建築多ク、舟車橋梁ノ製作
モ亦彌ヨ功ヲ加ヘ、宇治橋、飛舟、大舶、指南車、水車等モ製出サレ、瓦甃砌ヲ
製スルヿモ漸ク多キヲ致セリ、又石ヲ以テ垣門、碑碣、寶塔橋梁ヲ作ルヿ
モ行ハレ、玉器モ益々精巧トナレリ、傳ヘイフ、此ノ頃既ニ硝子ヲ作レル
ヿアリ、承平天慶ノ亂ニ至テ其ノ製法ヲ失スト

天慶承平ノ亂ニヨリテ工業大ニ衰ヘ

抑モ天慶承平ノ亂ニヨリテ、諸工業ノ衰ヘシヿ實ニ甚シ、然レドモ武具馬
具ノ如キ武人戰鬪ノ用ニ供スルモノハ、獨リ進歩セルヿ勿論ナリ、即チ
革ニハ蕪皮（ソヌベカハ）、雛文皮（ヒナカハ）、菖蒲皮（アヤメカハ）等アリテ、鞍、靴、筥等ヲ作ルヿ益々盛ナリ、刀劍
弓鏃ノ鍛造ハ、特ニ精巧ヲ極メ、天國安綱、眞守友成、宗近、友國等、著名ノ刀
工輩出シテ、名劍靈刀ヲ作リ、大ニ其ノ名ヲ著セリ

武具武器ノ製

筆墨紙

筆墨紙ハ上古推古天皇ノ御代ニ、僧曇徴始メテ其ノ製法ヲ傳ヘテヨリ、中古ニ至リテ製出多ク、其ノ用マタ廣シ

貨幣

上古ノ世ニハ、支那ヨリ渡レル銅錢一小部分ニ行ハレ、中古天智天皇ノ御代ニハ、其ノ流通ノ區域漸ク廣マリシガ如シ、天武天皇ノ二年對馬ノ國ヨリ始メテ銀ヲ出シ、天明天皇ノ御代ニ武藏國ヨリ始メテ銅ヲ出シ、聖武天皇ノ天平勝寶元年ニ陸奥國始メテ黃金ヲ出セリ、鑄錢司ヲ置キシハ天武天皇ノ御代ナリトス、然レドモ始メハ錢貨ノ流通スル部分尙ホ狹ク、歷朝多ク之ヲ奬勵シ、且ツ鑄造司ヲ諸所ニ置キテ、多ク錢貨ヲ鑄造セラレタリ、就中銅ノ產出多カリシヲ以テ、始メハ銅貨ノ品質極メテ精良ナリシト雖ドモ、銅佛ヲ鑄ルヿ流行セシヨリ銅貨甚ダ粗惡トナリ、庶民之ヲ厭フテ一時ハ唐錢ヲ貴ビ、之ヲ使用セシカバ、銅貨ノ價大ニ下落セシヿアリ、又諸國ノ鑄造司盛ンニ銅貨ヲ鑄ルニ方リテハ、人民ノ贋造スルヒトモ亦多カリシトイフ

生銀銅產出ノ

商業

商業ハ通貨ノ鑄造盛ンニシテ、而シテ其ノ流行スルヿ廣キヨリ、漸次ニ發達セルヿナレン、即チ孝德天皇ノ御代以後ニハ、國司ヲシテ賣買沽價ヲ掌ラシメラレシヿアリ、海底ノ深淺、水路ノ遠近ヲ測定シテ標木ヲ建テ、以テ商船ノ往來ヲ便ニセラレタルヿアリ、蓋シ當時ノ商業ハ外國貿易、市店販賣、行商ノ三種ナリシカ如ク、外國貿易ハ支那トノ間ニ行ハレ、頗ブル盛ナリシカ、遣唐使廢セラレテ、支那トノ交通絕ユルニ至リ、亦大ニ衰ヘタリトイフ、或ハ曰ク、市店販賣ハ中古ノ代未タ行ハレズト、然レドモ當時既ニ商賈ノ店アリ、重モニ棚ヲ作リ、入口ヲ脇ニ設ケ、長野簾ヲ掛ケ、日ツ席又ハ板ヲ以テ軒頭ノ塵避ヲ作リシトイヘバ、市店販賣ハ已ニ行ハレタリシカ如シ、行商ハ大抵婦人ノ業ニシテ、之ヲ販女（ヒサメ）トイフ、髮ヲ上ケ、笄ヲ挿シテ髻ヲ固メ、髻上ニ商品ヲ載セテ呼ヒ歩ケリトイフ、然レドモ此等ハ大抵都會ノ地ニノミアリテ、村落ノ間ニハ未タ之ヲ見ザリシナリ

販

第九章

美術

繪畫

土佐家ノ祖

鳥羽繪ノ祖

第一繪畫　繪畫ト宗教トハ、密接ノ關係ヲ有ス、故ニ中古佛教ノ盛ナルヤ、繪畫ノ進歩セシヤ勿論ナリ、況ンヤ隋唐ノ畫法ヲサヘ傳ヘシオヤ、歷朝世々高名ノ畫家ヲ出シ、巨勢金岡ノ如キ、古今獨歩ト稱セラル、一條天皇ノ御代ニ、藤原基光、宅磨爲氏アリ、基光ハ土佐家ノ始祖ニシテ、爲氏ハ宅磨家ノ祖ナリ、崇峻天皇ノ御代ニ僧覺猷アリ、鳥羽ニ居リ、鳥羽僧正ト稱ス、人物ヲ善クシ、戲畫ニ工ニシテ、鳥羽繪ノ始祖ト稱セラル、此ノ他平城天皇ノ御代ニ百濟百河アリ、醍醐、朱雀、村上三天皇ノ御代ニ、飛鳥部常則アリ、皆精妙ノ域ニ達ス、巨勢、飛鳥部、土佐等ノ諸派ハ、韓畫唐畫ヨリ出テ、一變セルモノ、之ヲ倭畫トイフ

倭畫

書法三體

第二書　書法モ中古ニ至リテ大ニ見ルベキモノアリ、小野道風、藤原佐理、藤原行成ヲ三蹟ト稱ス、嵯峨、淳和、仁明ノ三天皇マタ能筆ノ御聞ヘ高ク、僧空海、菅原道眞等モ盛名アリ、此ノ時ニ當リ、書法モ猶ホ繪畫ノ如ク其ノ流派ヲ分チリ、即チ行成ノ一派ヲ入木道トイヒ（行成ハ兼テ上代流ノ中ニモ入ル）紀貫之藤原俊賴等ノ一派ヲ上代流トイヒ、藤原定家ノ一派ヲ定家流トイヒ、飛鳥井雅信ノ一派ヲ飛鳥井流トイフ、其ノ眞行草ノ如キハ、或ハ全ク唐樣ヲ模シ、或ハ唐樣ヲ骨トシテ特種ノ肉ヲ附シ、優ニ一家ノ体ヲ創セリト雖モ、是レ皆ダ漢字ニ於テ然ルノミ、日本假名文字ニ至リテハ、全ク

八木流

上代流

定家流

飛鳥井流

休ヲ備ヘ、最モ巧ヲ極メタリ

音樂

第三音樂　音樂ハ既ニ神代ヨリ之アリ、上古中古ニ至テモ行ハル、之ヲ本邦固有ノモノトス、其ノ歌舞ニハ神樂、宮人振、天田振、酒樂之歌、志津歌等アリ、樂器ハ始メ弓ヲ駢ベテ之ヲ彈ジタルコトアリシガ、後ニ和琴ノ製出アリ、又和笛アリ、始メ百濟ヨリ樂工ノ渡來スルヤ、廐戸皇子天下ニ令シテ伎樂ヲ習ハシメ玉ヘルコトアリ、唐ト通スルニ及ヒ、彼ノ音樂ヲモ傳ヘテ殆ント本邦固有ノ樂ヲ傾倒スルノ勢アリ、律令ノ制定セラル

本邦固有ノ音

舶來ノ音

ヽヒ、雅樂寮ヲ置キ、朝廷音樂ノ事ヲ掌ラシム（今ノ樂師又ハ伶人ノ如キモノ歟）其ノ樂ニハ新鳥蘇（右鳥蘇、綾切ヨリ傳フ）皇帝破陣樂（クワウテイハヂンラク）、春鶯囀（ドウヂンソウカウマンス）、團亂旋（ヒラ）、蘇合香（ソガウカウ）、萬秋樂（ヨロヅアキラク）等アリ、又本邦人ノ手ニ成レル韓樂ニハ、延喜樂、仁和樂、長保樂、唐樂ニハ賀王恩、秋風樂、承和樂、河南府等アリ、此等ヲ總稱シテ雅樂トイフ、サトシテ朝廷ニテ用ヒラル、其ノ樂器ニハ笙、篳篥、横笛、箏、琵琶、太鼓、鞨鼓、鉦鼓、鞨、三鞨、方磬、尺八、管攸、新羅琴、阮咸、拍子、銅拍子、奚婁等アリ

俗樂

俗間ニハマタ踏歌アリ、其ノ歌フ所ハ大抵三十一音ノ短歌ニテ、手ヲ拍チ、太鼓、笛ヲ用フルニ過ギズ、神樂モマタ俗間ニ行ハレタレド、雅樂ニ比スレハ簡素野鄙ナリシハ勿論ナリ、次テ和漢折衷ノ音樂出ヅ、催馬樂、東遊散樂、今樣、朗詠、是レナリ、催馬樂東遊ハ、古代ノ俗樂ニ唐調ヲ附セシモノ、散樂ハ滑稽樂、今樣ハ流行歌、朗詠ハ唐詩ニ和漢折衷ノ節ヲ附セシモノナリ、此ノ內催馬樂最モ廣ク俗間ニ行ハル

和漢折衷ノ音樂

田樂及ヒ白拍

後ニ堀河天皇ノ御代ヨリ田樂行ハレ、鳥羽天皇ノ御代ヨリ白拍子ノ舞アリ、田樂ハ始メ俗間ノ舞ニシテ、豐年ヲ祝スルモノナリ、舞者ハ錦繡ヲ着、金銀ヲ飾リ、歌者ハ鼓ヲ拍チ笛ヲ吹キ、編木（ビンサヽラ）ヲ擊テ拍子ヲ取ル、堀河天皇ノ御代ニ至リテハ、朝廷ニモ亦行ハレシトイフ、白拍子ハ女子ノ容姿美ナルモノ、水干ヲ着ケ、刀ヲ佩ビ、朗詠ヲ謠フテ舞フ、朝野之ヲ賞スルモノ多ク、音ニ其ノ色ヲ愛デヽ妻妾トナスモノアルニ至レリ

陶器

第四陶器漆器、陶器ハ桓武天皇ノ御代ヨリ稍々進歩シ、元明、元正、聖武三天皇ノ御代ヨリ、釉ヲ施スヿ少シク行ハレ、其ノ製作モ大抵唐風ヲ摸シテ多少雅趣ヲ添ヘタルガ如シ（陶器ノ美術ト稱スヘキ域ニ達セル器ハ實ニ近世ニ在ルモ暫ク之ニ掲グ）

漆

漆器ハ日本固有ノ美術ニシテ、其ノ伎最モ精巧ト稱セラル、孝德天皇ノ御代ニ漆器ヲ以テ調ニ充テラレ、後律令ノ定マルヤ、漆部ヲモ置カレタレバ、其ノ進歩著ルシク、聖武天皇ノ御代以後ニハ、彩漆ヲ用ユルヿ行ハレ、平文、蒔繪、螺鈿等モ出デタリ、又桓武天皇ノ御代ニハ、平塵ノ法出デ、醍醐

天皇ノ御代ニハ梨子地ノ製起リ、其ノ技彌ヨ精巧ヲ加フ、去レバ當時漆器ノ需要多ク、甚シキハ奢侈ノ極、第宅ニ蒔繪ヲ施シ、螺鈿ヲ以テ衣服ヲ裝フ者アルニ至ル、然レドモ陶器及ヒ漆器ハ、承平天慶以後少シク衰微シタリ、然レドモ安德天皇ノ御代マテハ、京師ノ漆工中、尚ホ精妙ノ手腕ヲ有スル者アリ、美麗ノ器物ヲ製出セリ、聖武天皇以後、此ノ御代マテノ漆器ヲ後世稱シテ上代物トイフ

上代ノ彫刻

第五彫刻　木料金屬ノ彫刻モ亦中古ニ至リテ大ニ進歩シ、道慈國中公廨、高市眞國、法橋定朝、覺助、院覺、增田宗磨定國等ノ名匠良工アリテ、木材金屬ノ彫刻精ヲ究メ、微ヲ盡シ、佛像甲冑及ビ刀劍ノ裝飾ヨリ、宮殿社宇ノ門扉、門扇、桁端、蟇股ノ彫刻等見ルベキモノ極メテ多シ

獅子王尊

天智天皇ノ御宇ニ增田宗次ノ武內宿禰ナルモノアリ、二百板ヲ以テ二方白明冑ヲ造リ、之ニ獅子ヲ鐵カシム、天皇之ヲ鎌足ニ賜フ、獅子王尊ヨリ、宗磨ハ坂上田村麿ノ四方白尊甲ヲ造リ、宗國ハ藤原秀郷ノ白星兜冑、及ヒ卯花縅ノ鎧ヲ造ル、皆名アリ

天皇統系及年號時代一覽表　第二（中古）

御代數	御諡號	御名	父	母	都	御壽	御在位年間	年號	紀元
第二十六代	孝德天皇	萬國日尊	御才	御淳王	攝津國長柄		五九	大化（五年）	從一、三〇五
第二十七代	齊明天皇	皇極天皇重祚	才吉備姬	才淳王	大和國飛鳥	六八	一〇	白雉（五年）	至一、三一四
第二十八代	天智天皇	命開別尊	舒明天皇	吉備姬	大和國飛鳥	七	五八		一、三二八
第二十九代	弘文天皇	大友皇子	天智天皇	伊賀采女宅子娘	近江國滋賀	二五	二		一、三三二
第三十代	天武天皇	大海中原瀛眞人尊	舒明天皇	天豐財重日足姬	近江國滋賀	四	五八		一、三三三
第四十代	持統天皇	高天原廣野姬命	天智天皇	天豐財重日足姬	大和國飛鳥	一四	六五	朱雀（一年）	一、三四六
第四十一代	文武天皇	天之眞宗豐祖父尊	草壁皇子	遠智姬	大和國藤原	一一	五八	朱雀（三年）	一、三四七
第四十二代	元明天皇	日本根子天津御代豐國成姬命	天智天皇	宗我嬪	大和國藤原	一一	二五	大寶（三年）	一、三五七
第四十三代	元正天皇	日本根子高瑞浄足姬命	草壁皇子	元明天皇	山城國奈良	八	六一	慶雲（四年）	一、三六七
					山城國奈良			和銅（七年）	一、三七四
					山城國奈良	一〇	六九	靈龜（二年）	一、三七四
								養老（七年）	一、三八三

第四十一代	平武天皇	桓武天皇子	藤原宮子	聖武天皇	山城國奈良	五六	曲象（五年）天平（十年）天平（十六年）天平勝寶（八年）
第四十二代	孝謙天皇	聖武天皇	藤原光明皇后	舍人親王	山城國奈良	一〇	天平寶字（二年）
第四十三代	淳仁天皇	舍人親王	正三位太夫人山背	聖武天皇	山城國奈良	三二	天平寶字（七年）
第四十四代	稱德天皇	孝謙天皇重祚	藤原光明皇后	施基親王	山城國奈良	五三	天平神護（二年）
第四十五代	光仁天皇	施基親王	皇太后楊姬	聖武天皇	山城國奈良	六	神護景雲（三年）
第四十六代	桓武天皇	光仁天皇	皇太后高野氏	施基親王	山城國奈良	七三	寶龜（十一年）
第四十七代	平城天皇	桓武天皇	藤原乙牟漏	太皇太后	山城國奈良	一二	天應（一年）
第四十八代	嵯峨天皇	桓武天皇	藤原乙牟漏	太皇太后	山城國平安	七〇	延曆（廿四年）
第四十九代	淳和天皇	桓武天皇	藤原乙牟漏	太皇太后	山城國平安	五一	大同（四年）
第五十代	仁明天皇	嵯峨天皇	后橘氏	太皇太后	山城國平安	四	弘仁（十四年）
第五十一代	文德天皇	仁明天皇	藤原順子	太皇太后	山城國平安	五七	天長（十年）
						一五	承和（十四年）
						一一	嘉祥（三年）
						五五	仁壽（三年）
						三二	齊衡（三年）
						九	天安（二年）

一、三八四	一、四〇九	一、四一八	一、四二四	一、四二九	一、四三〇	一、四四一	一、四六六
一、四六九	一、四七〇	一、四八三	一、四九三	一、五一〇	一、五一八		

第五十二代	文德天皇	清和天皇	藤原明子	仁明天皇	山城國奈良	六代	貞觀（十八年）
第五十三代	清和天皇	文德天皇	藤原高子	仁明天皇	山城國奈良	八二	元慶（八年）
第五十四代	陽成天皇	清和天皇	藤原高子	仁明天皇	山城國奈良	五八	仁和（三年）
第五十五代	光孝天皇	仁明天皇	藤原澤子	陽成天皇	山城國奈良	六五	仁和（一年）
第五十六代	宇多天皇	光孝天皇	藤原胤子	陽成天皇	山城國奈良	四六	寛平（九年）
第五十七代	醍醐天皇	宇多天皇	藤原胤子	陽成天皇	山城國奈良	四二	昌泰（三年）
						三四	延喜（二十二年）
						三〇	延長（八年）
第五十八代	光孝天皇	醍醐天皇	藤原穩子	陽成天皇	山城國奈良	一七	承平（七年）
第五十九代	宇多天皇	醍醐天皇	藤原穩子	陽成天皇	山城國奈良	四二	天慶（九年）
第六十代	醍醐天皇	宇多天皇	藤原胤子	陽成天皇	山城國奈良	二二	天曆（十年）天德（四年）應和（三年）康保（四年）
第六十一代	朱雀天皇	醍醐天皇	藤原穩子	陽成天皇	山城國奈良	一九	天暦（三年）天延（二年）貞元（二年）天元（五年）永觀（二年）
第六十二代	村上天皇	朱雀天皇	藤原穩子	陽成天皇	山城國奈良	六二	安和（二年）
第六十三代	冷泉天皇	村上天皇	藤原安子	陽成天皇	山城國奈良	二	寛和（二年）
第六十四代	圓融天皇	村上天皇	藤原安子	陽成天皇	山城國奈良	一五	天延（三年）天元（五年）永觀（二年）
第六十五代	花山天皇	冷泉天皇	藤原懐子	陽成天皇	山城國奈良	四一	寛和（二年）
						三	

一、五一八	一、五三六	一、五三六	一、五四四	一、五四四	一、五四七	一、五四八	一、五五七
一、五五七	一、五九〇	一、五九〇	一、六〇六	一、六〇六	一、六二七	一、六二八	一、六二九
一、六三〇	一、六四四	一、六四四	一、六四六				

第六代	一條	師	仁	閑院	天皇	仝	三二	永延（二年）永祚（一年）正暦（五年）長徳（四年）長保（五年）寛弘（八年）	一、六四七
第七代	三條	冕	貞	東三條院藤原詮子			四三	寛仁（四年）治安（三年）万寿（四年）長元（九年）	一、六七二
第六代	一條	懐	成	冷泉	天皇	仝	二六	寛仁（四年）治安（三年）万寿（四年）長元（九年）	一、六七六
第七代	後一條	敦	成	陽明院藤原彰子			二一	寛仁（四年）治安（三年）万寿（四年）長元（九年）	一、六九六
第六代	後朱雀	敦	良	陽明院藤原彰子			三七	長暦（三年）長久（四年）寛徳（二年）	一、七〇五
第七代	後冷泉	親	仁	陽明院藤原嬉子			四四	永承（七年）天喜（五年）康平（七年）治暦（四年）	一、七〇六
第七代	後三條	尋	仁	陽明院藤原茂子			二三	治暦（四年）	一、七二八
第七代	白河	貞	仁	陽明院藤原茂子			四〇	延久（四年）	一、七二八
第七代	堀河	善	仁	皇太后藤原賢子			五	延久（四年）	一、七三二
第七代	鳥羽	宗	仁	皇太后藤原璋子			七七	延久（四年）承暦（三年）永保（三年）	一、七三二
							五	延久（四年）承暦（三年）永保（三年）	一、七四六
							二九	寛治（七年）嘉保（二年）永長（一年）承徳（二年）	一、七四七
							二一	嘉承（二年）長治（二年）	一、七六七
							五五	天仁（二年）天永（三年）永久（五年）元永（二年）	一、七六七
							一七	保安（四年）	一、七八三

第七代	崇徳	顯	仁	鳥羽	天皇	仝	四六	天治（二年）大治（五年）天承（一年）長承（三年）保延（六年）永治（一年）
第七代	近衛	體	仁	鳥羽	天皇	仝	一七	康治（二年）天養（一年）久安（六年）仁平（三年）元喜（二年）
第七代	後白河	雅	仁	鳥羽	天皇	仝	六六	保元（三年）
第七代	二條	守	仁	待賢門院藤原璋子			四	平治（一年）永暦（一年）應保（二年）
第七代	六條	順	仁	後白河	天皇	仝	二三	平治（一年）永暦（一年）應保（二年）長寛（二年）
第八代	高倉	憲	仁	美福門院藤原得子			八	永萬（一年）
第八代	安徳	言	仁	鳥羽	天皇	仝	一三	仁安（三年）
				待賢門院藤原璋子			四	嘉應（二年）承安（四年）安元（二年）治承（四年）
				中宮藤原育子			二一	嘉應（二年）承安（四年）安元（二年）治承（四年）
				後白河	天皇	仝	一三	嘉應（二年）承安（四年）安元（二年）治承（四年）
				二條	天皇	仝	八	養和（一年）寿永（四年）
				皇太后藤原忻子			五	寿永（四年）
				建春門院平滋子				
				高倉	天皇	仝	八	攝津國福原
				建禮門院平徳子				

第七篇

近世史（第一）

近世史ハ源頼朝覇府ヲ鎌倉ニ開キシヨリ、德川慶喜大政ヲ返上スルニ至ル、即チ紀元千八百四十四年ヨリ起リテ、二千五百二十六年ニ終ル、其ノ間六百八十餘年、總テ武門政權ヲ掌握スル時代トス、今之ヲ分テ四期トナス、第一期ハ鎌倉時代ニシテ頼朝ノ創業ヨリ起リ、北條氏ヲ經テ建武中興ノ業敗ルヽニ終リ、第二期ハ足利時代ニシテ、尊氏ノ創業ヨリ起リテ足利氏政權ヲ失フニ終リ、第三期ハ尙武時代ニシテ、戰國割據ニ始マリテ、織豐二氏ノ興亡ニ至リ、關ケ原ノ役ヲ以テ終トス、此ノ時期ハ戰亂殺伐ノ時代ニシテ、其ノ間モ亦甚タ長カラズト雖モ、日本人種ガ最モ其ノ性格氣象ヲ發揮セル時代トス、第四期ハ德川時代ニシテ、家康ノ覇業ヲ大成セシヲ始メト

鎌倉幕府ノ創始、源頼朝

シテ、慶喜政權ヲ奉還スルニ終ル、更ニ之ヲ畧言スレハ、第一期ハ民政最良ノ時代ニシテ、第二期ハ紛擾時代、第三期ハ戰爭時代、第四期ハ泰平時代ナリ

第一期鎌倉時代

第一章　鎌倉幕府ノ創始、源頼

朝廷藤原氏ト共ニ衰弱シテ、空シク虛位空爵ヲ有スルニ方リ、武人一蹶シテ曾ニ政權ヲ掌握スルニ至レリ、然レ𪜈平氏ノ政柄ヲ把ルヤ、其ノ爲ス所、皆、藤原氏ノ如キノミ、蓋シ平氏ハ、其ノ實力天下ヲ擧ルニ足ルヒノアルニ非ズ、根底ノ深キ、威望ノ重キ、以テ海内ヲ傾倒スルニ足ルモノアルニ非ズ、即チ未ダ曾テ天下ヲ敵トシテ、而シテ天下ヲ爭ヘルヿアラザルナリ、然レ𪜈其ノ容易ク威ヲ振ヒ權ヲ恣ニスルヲ得タルハ何ゾヤ、紀綱地ニ委シテ朝廷藤原氏ト共ニ積衰ノ極ニ沈ミ、天下ノ武人等マタ四分五裂シテ、毫モ平氏ニ抗スルモノナカリシガ故ノミ、故ニ平氏ハ最モ幸運ヲ得タル僥倖者ナリ、其ノ天下ヲ得タルハ、止ダ稀世ノ僥倖ナルノミ、然リト雖𪜈平氏ノ既ニ天下ヲ收ムルヤ、其ノ勢力ハ復タ從前ノ如クナラザル也、天下ノ之レニ臣從スル者尠カラズ、一門繁榮シテ其ノ族ノ有スル所、海内ニ半スルニ至ル、是レ豈侮ルベケンヤ、故ニ源氏ノ起ルヤ、平氏ノ前キニ興レルガ如ク容易ナラサル也、頼朝ノ如キハ關東ノ大兵ヲ提ゲテ源義仲ヲ斃シ、尋テ全力ヲ擧ケテ平氏ヲ滅シ、陸奥ヲ平ケテ漸ク天下ヲ一統スルヲ得タリ、即チ知ル、源氏ノ實力ノ大ナル、根底ノ深キヤ、決シテ平氏ノ始メニ比ス可カラサルヿヲ

源氏ノ系統

源氏ハ其ノ先、清和天皇ヨリ出ツ、天皇ノ皇子貞純親王、始メテ源姓ヲ賜ハル、親王ノ御子經基、經基ノ子滿仲、滿仲ノ子頼光、頼信、頼信ノ子頼義、頼

鎌倉幕府ノ創始、源頼朝

義ノ子義家、義光、義家ノ子義親、義親ノ子爲義、爲義ノ子義朝、相傳ヘテ世々武勲アリ、歷世皆戰略ニ長シ、弓馬ヲ善クシ、威望武人ノ間ニ重ク、特ニ關東ノ豪族皆之ニ黨附セリ、夫レ關東ハ古ヨリ武ヲ用フルノ地ト稱シ、民剛悍ニシテ騎射ニ長ズ、頼義以來、屢々奥羽ニ戰功アリテ、武名其ノ間ニ高ク、日ツ前後私恩ヲ施スヿ尠カラサルヲ以テ、武人多ク恩威ニ服シ、自カラ其ノ門下ニ附スルニ至レリ、是レ源氏ガ後ニ大ニ起レル所以ナリ、蓋シ當時關八州ノ兵、天下ヲ擧ルニ餘アリ

關八州

頼朝

頼朝ハ義朝ノ第三子ナリ、小字ハ鬼武者、幼ニシテ器局アリ、義朝之ヲ異トス、平治ノ亂ニ年甫メテ十三、義朝ニ謂テ曰ク「敵將ニ至ラントス、座シテ之ヲ待ンヨリハ若カズ、速カニ六波羅ヲ攻メンニハ」ト、衆之ヲ壯ナリトス、軍敗レ、義朝殺サルヽニ及ヒ、平氏ノ士平宗清ニ囚ヘラル、清盛將ニ之ヲ殺サントス、宗清意之ヲ愍ミ、清盛ノ母池禪尼ト共ニ之ヲ宥サンコトヲ請フ、乃チ釋サルヽヲ得テ伊豆蛭ケ子嶋地名ニ流サル、途上頼朝ヲ觀ル者、其ノ風采ノ非凡ナルヲ見、相語テ曰ク「是レ虎ヲ野ニ放ツナリ」ト、頼朝ノ伊豆ニ在ルヤ、初メ伊藤祐親ニ倚リ、已ニシテ北條時政ニ倚ル、時政女政子ヲ以テ之ニ娶ハス、治承四年以仁王令旨ヲ頼朝ニ傳ヘ、兵ヲ擧ケテ平氏ヲ亡ホサンヿヲ勸メ玉フ、僧文覺マタ之ヲ慫慂ス、頼朝乃チ時政及ヒ佐々木定綱等ト謀リテ兵ヲ起シ、目代平兼隆ヲ殺シ、又平氏ノ將大庭景親ト石橋山ニ戰フテ大ニ敗レ、身ヲ以テ安房ニ逃レ、三浦千葉ノ族ト會シ、平廣常ノ兵ヲ合セ、進ンテ武藏相摸ヲ徇フ、衆十萬餘、兵勢大ニ振フ、

頼朝兵ヲ擧ク

居ヲ鎌倉ニ定ム

竟ニ居ヲ鎌倉ニ定ム

平維盛兵五萬ヲ率ヒ、來テ頼朝ヲ討ツ、頼朝自ラ兵二十萬ニ將トシ、進ンテ維盛ト富士川ヲ夾ミテ陣ス、源氏ノ將武田信義、兵ヲ潛メテ夜敵ノ背ニ出ツ、會々水禽亂レ起ツ、平軍以テ源氏來襲スト爲シ、狼狽シテ走ル、此ノ時頼朝若シ破竹ノ勢ニ乘シテ西上セバ、節々刃ヲ迎ヘテ碎ケ、平氏ヲ滅スル甚ダ難カラジ、然レ𪜈肯テ茲ニ出デサリシハ何ゾヤ、是レ頼朝

頼朝ノ智略

ノ智略衆ニ超ヘタル所以ナリ、當時源義仲北國ニ起リ、其勢小ナラズ、諸國マタ變ヲ窺フ梟雄多シ、頼朝乃チ退キテ鎌倉ニ據リ、八州ノ兵ヲ案ジテ徐カニ天下ノ形勢ヲ倚觀ス、其ノ志、義仲等ヲシテ平氏ヲ亡ボサシメテ□レ其ノ功ヲ收メ、且ツ其ノ根底ヲ固フシテ、兼テ諸國梟雄ノ向背ヲ察スルニ在リ、故ニ義仲既ニ平氏ヲ西海ニ追ヒ、兵ヲ京師ニ置キテ少シク傲慢ノ所爲アルニ及ヒ、始メテ院宣ヲ奉ジテ義仲ヲ亡ボシ、次デ平氏ヲ討滅シテ天下ヲ一統セリ

義經

頼朝ノ弟義經、精悍ニシテ戰ヲ善クシ、義仲及ビ平氏ヲ亡ボシテ大功アリ、後ニ京師ヲ護衛シテ朝廷ノ信任ヲ受クルヿ頗ル厚シ、頼朝之ヲ猜忌シ、親カラ之ヲ討ントス、義經其ノ親臣數人ト微服間行シテ陸奥ニ降リ、藤原秀衡ニ頼ル、秀衡卒スルニ及ヒ、頼朝秀衡ノ子泰衡ヲ誘フテ義經ヲ擊タシメ、次デ大擧シテ泰衡ヲ亡ボス、泰衡ハ清原武衡ノ裔ナリ、世々陸奥ヲ領シテ隱然其ノ威ヲ振ヒ、別ニ一小獨立ノ形ヲ爲セリ、是ニ至テ頼朝之ヲ亡ボシテ陸奥ヲ平グ、時ニ文治五年九月ナリ

建久三年七月頼朝征夷大將軍ニ任ゼラル、是ヨリ鎮守府將軍ヲ罷ム、正治元年正月病ヲ以テ薨ス、是ヨリ先キ稻毛重成、相模川ノ橋ヲ造ル、頼朝其ノ會ニ臨ミ、歸途馬ヨリ墜テ病起リ、是ニ至テ薨ズ、年五十三、頼朝人トナリ、風丰温雅ニシテ音吐朗爽、沈毅ニシテ度量アリ、常ニ儉勤ヲ以テ下ヲ率フ、嘗テ藤原俊兼ヲ召ス、衣服鮮麗ナリ、命シテ其ノ刀ヲ取ラシメ、親カラ其ノ裔ヲ截リ、之ヲ戒メテ曰ク「汝材幹アリ、蓋ゾ儉素ヲ守ラザル、千葉常胤常土肥實平ノ如キハ、介冑ノ武士、禮法ヲ曉ラズ、其ノ采邑ノ大、亦汝ノ比ニアラズ、而シテ蠶薄自ラ持シ、以テ多ク士卒ヲ養フ、志ハ功ヲ建ツルニ在リ、汝之ヲ思フベシ」ト、然レドモ猜忌ニシテ多ク血族ヲ失フ、初メハ女婿義高義仲ノ子ヲ殺シ、次テ弟義經範頼ヲ殺シ、又叔父義廣、行家、從兄弟義仲、光家ヲ殺シ、甚シキハ義經ノ子、纔カニ母ノ胎ヲ出デシ者ヲモ屠ルニ至レリ、蓋シ頼朝ハ義朝ノ子ニシテ、義朝ハ保元ノ亂ニ父ヲ

弑シ、弟ヲ殺セリ、頼朝之ヲ目擊シ、且ツ保元平治ノ亂ニ遭遇シテ、君臣父子相凌ギ、相屠ルノ間ニ人ト爲レリ、是レ其ノ猜忌殘忍ナリシ所以ナル

大江廣元

然レドモ頼朝ノ政畧智謀ニ至テハ、實ニ百世ニ超出セリトイハサルベカラズ、當時大江廣元ナルモノアリ、朝廷ノ臣ニシテ政事ニ通曉シ、頗ル經綸ノ才アリ、然レドモ朝廷混亂委靡シテ其ノ驥足ヲ伸ブル所ナキヲ以テ、傳書ヲ收メテ鎌倉ニ來リ、頼朝ノ謀主トナル、義經行家等ノ逃ルヽヤ、頼朝、廣元ノ議ヲ用ヒ、北條時政ヲシテ、廷奏セシメテ曰ク「行家義經逃竄スレハ輙ク搜捕シ難シ、若シ聞クニ隨テ兵ヲ發セバ、國郡紛擾シテ其ノ費貲ラレズ、請フ諸國ニ守護ヲ置キ、莊園ニ地頭ヲ置キ、所在之ヲ逮捕セシメン、則チ勞セズシテ自ラ定ラン、其ノ兵糧ハ五畿、山陰、山陽、南海、西海、二十六ケ國ノ段毎ニ、米五升ヲ課シテ之ニ充テン」ト、又自ラ總地頭タランヿヲ請フ、朝廷頗ル之ヲ難スト雖ドモ、頼朝ノ意ニ違ハンヿヲ憚リテ竟ニ

守護地頭

之ヲ許ス、已ニシテ頼朝總地頭トナリ、諸國ノ地頭ハ皆家臣ヲ以テ之ニ充ツ、始メ頼朝自ラ相摸、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃等ヲ領シ、功臣ニ諸國ノ土地ヲ分チ與ヘシト雖ドモ、當時尚ホ朝廷ノ公領、親王公卿等ノ莊園少カラズ、之ヲ治ムル國司領家（親王公卿ノ家ヨリ派出セラレシモノニシテ其ノ采邑ヲ治ム）柔懦ニシテ實務ニ通セス、故ニ動モスレバ群盜蜂起シ、且ツ平氏ノ餘類等諸國ニ起リテ、天下動搖ノ恐レアリ、頼朝之ヲ其ノ未ダ起ラサルニ制セント欲シ、乃チ守護地頭ノ制ヲ立テシナリ、守護地頭ノ職ハ、盜賊ヲ追捕シ、鬪爭ヲ警備スルニ在リ、邑入五十分一ヲ割テ其ノ俸祿トス、威福儼トシテ侯伯ノ如シ

議奏官

頼朝マタ奏請シテ、朝廷ニ議奏官十人ヲ置キ、己レニ親善ナル公卿ヲ以テ之ニ充テ、凡ソ關東（鎌倉幕府）ノ奏請スル所、總テ此ノ輩ヲシテ議決セシメ、且ツ朝廷ノ大事ハ必ラズ此ノ輩ヲ經テ關東ト商議シ、而シテ後之ヲ施行スルヿトス、朝臣等皆頼朝ノ威武ヲ恐レ、爭フテ之ニ媚從ス、故ニ朝廷

全ク鎌倉ノ控制ヲ受クルニ至レリ

建久元年十一月頼朝入朝シ、天下總追捕使タランコトヲ請フ、朝廷之ヲ許ス、始メ朝廷往々追捕使ヲ諸國ニ遣シテ、姦盜ヲ糺察ス、頼朝マタ曾テ家臣ヲ以テ追捕使トナシ、近畿諸國ヲ按檢セシメシコトアリ、是ニ至リテ自ラ請フテ天下總追捕使トナリ、翌年征夷大將軍ニ任ス、故ニ兵馬ノ權モ亦全ク頼朝ニ歸セリ、是ヨリ以後政權久シク武門ノ手ニ在リテ、王政維新ノ時ニ至ル、其ノ間六百餘年ナリ

總追捕使

天下ノ實權ヲ武門ニ帰ス

中古ノ時朝廷奢侈ニ流レシヨリ、租稅漸ク重ク、且ツ諸國ノ武人等聚斂ヲ恣ニシタルヲ以テ、庶民凋弊シテ甚タシキハ道路ニ餓死スルニ至ル、頼朝政令ヲ簡ニシ、勉メテ租稅ヲ輕クシ、大ニ德澤ヲ施シテ民心ヲ收攬ス、蓋シ當時ノ民俗、殺伐ニシテ煩雜ヲ厭フ、故ニ政令簡ニシテ武斷ヲ以テ事ヲ處スルカ如キハ、人情ノ好ム所ナリシ也、幕府ノ政治能ク天下ヲ服セシモ故アリトイフベシ

朝廷ノ政治

頼朝ノ幕府ヲ組織スルヤ、北條時政ヲ以テ執權トシ、元暦元年公文所ヲ置キ、建久二年改メテ之ヲ政所ト稱シ、大江廣元ヲ其ノ別當トス、又問注所ヲ置キ、三善康信ヲ其ノ執事トシ、治承四年侍所ヲ置キ、和田義盛梶原景時ヲ以テ其ノ別當トシ、皆幕府ニ於テ事ヲ執ラシム

幕府ノ組織

政所、問注所、侍

頼朝始メ一流人ヨリ起リ、手ニ唾シテ雲蒸龍騰、竟ニ以往絶無ノ大業ヲ創セリ、抑モ藤原氏及ヒ平氏ノ相續テ政權ヲ握ルヤ、皆京師ニ在リテ朝廷ヲ親奉セルヲ以テ、政令皆京師ヨリ出タリト雖モ、頼朝ニ至リテハ、天下形勢ノ地ヲ擇ミテ覇府ヲ鎌倉ニ創シ、以テ兵馬刑政ノ實權ヲ掌握セルカ故ニ、朝廷京師ニ孤居シ、空爵虛位ヲ擁スルノミ、百般ノ政令盡ク幕府ヨリ出ツルニ至レリ、是レ以往絶無ノ例ナリトス、夫レ京師ハ天下綺麗ノ地ニシテ、榮爵ハ人情ノ最モ好ム所、而シテ頼朝獨リ京師ヲ避テ鎌倉ニ居リ、日ツ名爵ノ高キヲ辭シテ實權ヲ大ニセンコトヲ力ム、是レ華ヲ捨テ、實ヲ執ルモノ、眞ニ千古ノ卓見トイフヘシ、然レモ賦性殘忍ニシ

政令京師ニ出テメシテ鎌倉ニ出

朝廷ノ盛衰

テ猜忌深ク、權勢ヲ貪ルヿ甚シキカ故ニ、親カラ一門ノ枝葉ヲ剪滅シテ、獨リ陰險滑ナル北條氏ニ依賴シ、竟ニ其ノ亡ス所トナル、自カラ招ケル禍ナリイフト雖モ、抑亦惜ムベキコ非ラズヤ

第二章　源氏ノ滅亡

賴朝薨スルニ及ヒ、子賴家繼キ立ツ、年十八、北條時政外祖ヲ以テ執政タリ、建仁二年八月賴家征夷大將軍ニ任ゼラル（時ニ年二十）翌月時政、賴家ノ子一幡、及ヒ比企能員ヲ殺シ、賴家ヲ伊豆ニ幽ス、初メ賴家病アリ、政子其ノ起タリルヲ度リ、總守護ノ職ヲ一幡ニ傳ヘ、千幡（賴家ノ弟）ヲ關西三十八州ノ地頭タラシム、能員ハ一幡ノ外祖ナリ、密カニ賴家ニ告テ曰ク、國ヲ割キ權ヲ分ツハ爭亂ノ基ナリ、到底執權ヲ除クニ非サレハ、君、枕ヲ高フスルヿトヲ得ズ、ト、賴家亦時政ノ所爲ヲ憎ミ、密カニ之ヲ討タンヿヲ議ス、政子聞キテ時政ニ告ク、時政乃チ誘フテ能員ヲ殺ス、能員ノ子宗員、一幡ヲ奉シテ小御所ニ據ル、時政攻メテ悉ク之ヲ滅ス、賴家變ヲ聞テ大ニ怒リ、和田義盛、仁田忠常ニ命シテ時政ヲ誅セシム、義盛之ヲ時政ニ告ケ、時政即チ忠常ヲ殺シ、賴家ニ迫テ落飾セシメ、之ヲ伊豆ノ修禪寺ニ幽シ、竟ニ千幡ヲ立テヽ命ヲ朝廷ニ乞フ、詔シテ名ヲ實朝ト賜ヒ、征夷大將軍ニ任ズ、時ニ年十一

（賴家幽セラル）

元久元年七月時政、人ヲ遣シテ竊カニ賴家ヲ禪修寺ノ浴室ニ弑セシム、賴家時ニ年二十三、時政マタ實朝ヲ殺シテ朝雅ヲ立テントス、事發覺ス、時政ノ子義時、時政ヲ其ノ邑北條ニ蟄セシメ、朝雅ヲ殺シ、竟ニ代リテ執權トナル

（義時執權）

建保六年實朝權大納言ニ遷リ、三月右近衛大將ヲ兼ヌ、大江廣元諫メテ曰ク、將軍慶ヲ子孫ニ貽サント欲セハ、宜シク諸ロノ兼官ヲ辭スベシ、是

レ滿ヲ持スル所以ナリ」實朝曰ク「卿カ言誠ニ可ナリ、然レトモ源家ノ系、日々縮ル、止ダ我レ意ノマヽニ官爵ヲ取リ、以テ家名ヲ盛ニスベシ、子孫ヲ慮ルニ遑アラスト、廣元答フルヿ能ハス、是ヨリ先キ畠山重忠、和田義盛等頼朝ノ宿將ニシテ皆誠忠ナリ、時政義時、相次テ之ヲ陷レ、悉ク之ヲ殺ス、故ニ源氏ノ宗室漸ク孤ナリ、十月實朝右大臣ニ任ジ、尋テ内大臣ニ進ム、時ニ頼家ノ子公曉ナルモノアリ、義時之ヲ鶴ケ岡ノ別當ニ補シ、暗ニ煽嗾スル所アリ、承久元年正月實朝大臣拜賀ノ禮ヲ鶴ケ岡ノ祠ニ行フ、公曉暗中ニ在テ實朝ヲ殺シ、大ニ呼ンテ曰ク「今夜父ノ仇ヲ復ス」ト、竟ニ走リテ三浦義村ニ依ラントス、義村之ヲ義時ニ告ク、即チ速カニ之ヲ殺サシム、時ニ實朝年二十八、公曉年十八、是ニ至テ源氏ノ系統全ク絶ヘ、北條氏代リテ政權ヲ掌握ス

實朝殺サル

公曉給キ殺サル

頼朝ノ亡妻政子、義時ト謀リ、左大臣藤原道家ノ子頼經ヲ迎ヘテ鎌倉ノキトナス、年甫メテ二歳、政子政ヲ簾内ニ聽ク、明決ニシテ權數アリ、人皆之ヲ憚リ、尼將軍ト稱ス、嘉祿七年ニ至テ卒ス

父名	在職	年期	歳
頼朝	義朝	自文治元年 到正治元年	十五
頼家	頼朝	自正治元年 至建仁三年	五
實朝	頼朝	自建仁三年 到承久元年	十七

正治元年正月　五十三　元久十年七月　二十三　承久元年一月　二十八

源氏ノ政權

故ニ源氏ノ政權ヲ掌握セルヿ三十五年ニ過ギズ、但シ其ノ將軍タルハ、頼朝ハ建久三年ヨリ正治元年ニ至リ、頼家ハ建仁二年ヨリ三年ニ至レルヲ以テ、其ノ間二十六年ノミ

始メ頼朝猜忌ニシテ、悉ク一門ノ血族ヲ絶ス、是レ自カラ手足ヲ斷ツナリ、其ノ業安ゾ久シキヲ保ス可ケンヤ、況ンヤ、頼家、實朝、皆孤弱ニシテ悍母驕臣ヲ制馭スルヿ能ハズ、外戚ノ姦謀、譎詐陰險ヲ極メ、漸次源氏忠良ノ宿臣ヲ剪除シ盡シタルオヤ

承久ノ亂

源氏ノ滅亡、天下ノ大勢ヲ變ス

然リト雖モ源氏ノ亡フルヤ、但ダ賴朝ノ血統絶ヘシノミ、幕府倒レシニ非ザル也、故ニ政權ハ依然トシテ鎌倉ニ在リ、鎌倉政府ハ尙ホ長ヘニ實權ヲ有セリ、故ニ源氏ノ滅亡ハ一種族ノ滅亡ノミ、毫モ天下ノ大勢ニ關スルナシ

第三章

承久ノ亂

武門政權ヲ掌握シテ、朝廷衰替スルニ及ンテハ、皇室ノ御不平ナルヘキハ言ヲ待タズ、後鳥羽上皇ハ英邁ノ御方ニ在マセリ、故ニ平生回復ノ御志ヲ抱カセ玉ヒ、賴朝兵權ヲ把リテ朝廷ヲ掣スルヿヲ憤ラセ玉フト雖モ、之ヲ奈何トモセサセ玉フヿ能ハズ、陰カニ時會ノ來ルヲ待タセ玉フ、實朝弑セラレテ源氏ノ系統斷絶スルニ及ヒ、上皇ハ政權再ヒ皇室ニ歸スヘシト思召サセ玉ヘリ、然レトモ北條義時源氏ニ代リテ政權ヲ專ラニシ、屢々朝廷ノ命ニ背ク、上皇彌ヨ之ヲ憎マセ玉フ、上皇曾テ仁科盛遠ノ子ヲ擢ンデ南面ノ武士トシ玉フ、義時曰ク「彼ハ關東ノ家人ナリ、恣ニ上皇ニ仕フヘキノ理ナシ」ト、其ノ采邑ヲ沒收ス、上皇特ニ命ヲ下シテ之ヲ復サシメ玉フト雖モ、義時肯テ命ヲ奉セズ、上皇又白拍子龜菊ヲ愛サセ玉ヒ、長江、倉橋（攝津）ノ二莊ヲ賜フ、其ノ地頭、龜菊ヲ侮慢ス、上皇乃チ義時ニ勅シテ地頭ヲ停メシメ玉フ、義時亦從ヒ奉ラズ、上皇大ニ逆鱗在マシ、竟ニ誅伐ノ御謀ヲ廻ラシ、日夜武事ヲ講習セサセ玉ヒ、御躬カラ刀劍ヲ製シテ武人ニ賜フ、上皇又順德天皇ト謀リ、仲恭天皇ヲシテ御位ニ即カセ奉ラセ玉フ、是ニ於テ同時ニ三上皇アリ、後鳥羽上皇ヲ一院ト申シ、土御門上皇ヲ中院ト稱シ、順德天皇ヲ新院ト申シ奉ツル、中院獨リ關東誅伐ノ時機尙ホ早シトシテ、二院ノ御謀ヲ諫メサセ玉フ、時ニ撿非違使三浦胤義、京師ニ直ス、任期滿レドモ歸ラズ、蓋シ義時ヲ恨ムヿアルナリ、密カ

後鳥羽上皇御憤

三上皇

院ニ奏シテイフ「臣カ兄義村、能ク義時ヲ誅スベシ」ト、一院ノ御志竟決ス、承久三年大和以下十四國ヨリ兵ヲ徵サセ玉フ、來リ會スル者千百餘人ナリ、一院又院宣ヲ全國ニ下シテ義時ノ罪ヲ數ヘ、能ク走ルモ推松ヲシテ、院宣ヲ持シテ鎌倉ニ下ラセ玉フ

レ此ノ御企ヤ、假令皇室ノ御威權ヲ恢復セサセ玉フノ義擧ナリトスルモ、實ハ一院ノ御憤ヨリ起レル復讎ノ御企ニメ、强チ民生ノ爲メニ謀ラレタルモノニ非ズ、且ツ當時天下稍々平安ナルヲ得テ、關東マタ甚シキ紊亂ナク、民心尙ホ之ニ歸セリ、故ニ一院ノ御企竟ニ敗レ、北條氏又朝廷ニ對シテ滔天ノ惡ヲ恣ニスルニ至レリ、推松鎌倉ニ至リテ院宣ヲ義村等ニ傳フルヤ、義村之ヲ義時ニ告ク、義時乃チ政子ト共ニ諸將ヲ會シテ之ヲ議シ、大江廣元ノ言ヲ用ヒ、泰時義時ノ子時房義時ノ弟等ヲシテ大軍ヲ帥ヰテ西上セシム、兵數十九萬、一院ノ兵ハ即チ六萬ニ過ギズ、推松歸リ報ズ、一院乃チ藤原秀康及ヒ胤義等ヲシテ東軍ヲ防カシメ玉フ、戰ヒ利アラズ、泰時竟ニ京師ニ入リ、六波羅ニ居ル、天皇及ビ三上皇皆延曆寺ニ幸シ玉フ、一院泰時ニ勅シテ宣ハク「事ヲ擧ケシハ廷臣ノ謀ニ出ヅ、朕ノ知ル所ニ非ズ」ト、義時天皇ヲ廢シ奉リテ、後堀河天皇ヲ御位ニ即カセ奉リ、一院ヲ隱岐ニ、中院ヲ土佐ニ、新院ヲ佐渡ニ遷シ奉ル、其ノ謀圖ニ與カレル公卿等、皆死罪ニ處セラル、之ヲ承久ノ亂トイフ

義時至尊ヲ廢流シ奉ル

兩六波羅

亂已ニ終ル後、泰時、時房留マリテ京師ヲ警衞ス、泰時ハ北方ニ居リ、時房ハ南方ニ居ル、之ヲ兩六波羅トイフ、是ニ至テ北條氏ノ勢威益々熾ニシテ、朝廷ハ止タ手ヲ拱シテ其ノ制ヲ受クルノミ

第四章　北條氏ノ興起

源氏ノ血統斷ニ絕ユルニ及ビ、北條氏代リテ政權ヲ握リ、天下ヲ有スル

一八代百二十餘年ニ及ベリ

北條氏ハ平姓、世々伊豆ノ北條ニ居ル、頼朝ノ姪子島ニ流サルヽヤ、時政、伊東祐親ト共ニ之ヲ監ス、頼朝始メ祐親ノ家ニ居リシト雖モ、憎マレテ時政ノ家ニ逃レ、其ノ子政子ニ通ズ、時政厚ク之ヲ遇ス、頼朝兵ヲ擧ルニ及ビ、時政其ノ一族ヲ擧ケテ之ニ隨ヒ、畫策ノ功最モ多シ、竟ニ鎌倉幕府ヲ創始ス、乃チ功ヲ以テ勢威班位、共ニ諸將ノ上ニ在リ、頼朝薨ジテ頼家聯ヲ襲グニ至リ、時政政所ノ別當トナリテ政務ヲ統ブ、次デ頼家及ビ其ノ子一幡ヲ殺シテ實朝ヲ立ツ、義時次デ執權タリ、義時源家ノ忠臣畠山重忠、和田義盛等ガ威望材幹アルヲ忌ミ、事ヲ設ケテ之ヲ殺シ、次デ頼家ノ子公暁ヲ誘フテ實朝ヲ殺サシメ、又紿テ公曉ヲ殺シ、終ニ頼朝ノ血統ヲ絶ツ、其ノ權謀陰險詭秘ニシテ至ラサル所ナシ、然レドモ北條氏ハ、源氏ノ如ク自カラ武門棟梁ノ顯位（征夷大將軍）ニ居ラズ、皇族或ハ攝家ノ幼兒ヲ京師ヨリ迎ヘテ將軍ト爲シ、己レハ執權ノ職ニ凭リテ以テ天下ヲ統治セリ、而シテ其ノ位爵纔カニ從四位相摸守ニ過キズ、蓋シ名ヲ棄テヽ實權ヲ取リ名ヲ棄ツ

ヲ取レルモノ

夫レハ、當時將軍タリシモノハ、皆幼稚ニシテ世事ヲ知ラズ、其ノ少シク將軍ノ齡ニ至レバ、皆廢逐ヲ免レス、假令壯年マデ位ニ在人事、世事ヲ辨スルノ齡ニ至レバ、皆廢逐ヲ免レス、假令壯年マデ位ニ在ルモノト雖モ、止タ木偶ノ如ク、虛位ヲ擁セシニ過ギス、其ノ廢立ノ一サヘ、北條氏ノ意ノマヽナリシナリ

北條時代鎌倉將軍表

將軍	父名	立年	廢年	立年之齡	廢年之齡	在職年間
藤原頼經	藤原道家	嘉祿二年	寶永二年	二七	九	一九
藤原頼嗣	藤原頼經	寛永二年	建長四年	一四	六	九
宗尊親王	後嵯峨天皇	建長四年	文永三年	二五	一一	一五
惟康親王	宗尊親王	文永三年	正應二年	二六	三	二四
久明親王	後深草天皇	正應二年	延慶元年	三五	一六	二〇

守邦親王	久明親王	延慶元年	元弘三年	七	三二

右ノ內相模ハ經時ニ、頼嗣ハ時頼ニ、宗尊ハ時宗ニ、惟康、久明ハ貞時ニ歷セラレ、獨リ守邦ハ北條氏滅亡ノトキ、朝廷ヨリ廢サレタリ

朝廷ヲ制スルノ術

承久ノ亂以後、北條氏ノ朝廷ニ備フルヤ、實ニ至嚴至密ナリ、六波羅ニ兩府ヲ設ケテ探題二人ヲ置キ、其ノ宗屬若クハ親近ノ士ヲ以テ之ニ充テ、畿內西海ノ兵政ヲ總ベシム、大番ノ外四十八所ノ篝卒皆之ニ隸ス、故ニ一旦事アレハ數萬ノ兵立ロニ集ルベシ、是レ京師護衛ヲ名トシテ、實ハ朝廷ヲ制スルナリ

皇統ヲ二分ス事

又御幼沖ノ天皇ヲ卽位ニ卽カセ奉リ、御成長アレハ則チ事ニ托シテ御位ヲリ卸シ奉ル、且ツ貞時ノ時ニ至テ、後深草天皇、龜山天皇ノ二統迭立ノ一ヲ定メ、皇統ヲ二分シテ皇室ノ御權力ヲ減削シ奉リ、兩統ヲシテ競フテ己レニ依ラシメ奉ラントセリ

攝家ヲ分ツ

北條氏ハ止ダ皇統ヲ二分シ奉レルノミナラズ、又攝家ヲモ分割セリ、始メ頼朝ノ時ニ攝家ヲ分チテ近衛、鷹司ノ二流トス、蓋シ攝家ノ權ヲ分タンガタメ也、貞時ニ至リ、奏シテ攝籙ヲ前二家（近衛鷹司）及ヒ九條、二條、一條ノ五派トシ、五攝家交ル〳〵關白ニ任ズルヿヲ定ム、故ニ關白ノ進退、マタ悉ク北條氏ノ意ノマヽナリ

下ニ對スルノ簡略民政

北條氏ノ上ニ備フルヤ實ニ斯ノ如シ、其ノ下ニ備フルヤ、筑紫ニ探題ヲ置キ、奥州ニ總奉行ヲ置キ、其ノ支族ヲ以テ之ニ任ジ、以テ天下樞要ノ形勢ヲ制セリ、而シテ其ノ庶民ニ對スルヤ、政治ヲ寛大ニシ、事務ヲ簡便ニシテ、力メテ天下ノ人心ヲ收攬ス、實權ヲ握リ民心ヲ收ムルノ法、實ニ巧ミナリトイフベシ

頼朝ノ資性酷ダ殘忍ナリシト雖モ、尙ホ時政義時ノ如クニハアラズ、時政義時ハ其ノ女婿ヲ殺シ、同胞ヲ屠リテ恤マザルノミナラズ、數々主君ヲ弑シテ酷薄ヲ極メ、甚シキハ天皇上皇ヲ配流シ奉リテ憚カラザルニ至ル、嗚呼是レ豈イフニ忍ビンヤ、蓋シ保元平治以來、仁厚ノ德地ヲ拂ヒ、

殺伐殘酷ノ風俗ヲ爲ス、故ニ北條氏世々殆ンド誅殺ノ禍ナキハナシ、鎌倉ノ武人中、屢々小恐慌ヲ生ジ、甲ヲ擐シ第ヲ守リ、毎年兄弟相屠リ、族戚相殺スノ不祥事アリ、是レ皆多ク猜忌ノ間ニ彷徨シ、竟ニ殘忍ニ流ルヽナリ、然レドモ天下幸ヒニ泰平ニシテ、久シク兵革ノ禍ナカリシハ何ゾヤ、泰時ノ德政能ク一般ノ民心ヲ收攬シタレハ也

第五章　北條泰時

北條氏ノ事業ヲ創始シタルモノハ義時ニシテ、之ヲ大成シタルモノハ泰時ナリ、義時權術ニ富ミ、其ノ陰險姦詐、適カニ時政ニ過グ、然レドモ其ノ智畧規模ハ頗フル非凡ナリトイハサルヲ得ズ、是レ常ニ陽ニ手ヲ拱シ、容ヲ恭フシテ竟ニ源氏ヲ倒滅セシ所以ナラスヤ、然リト雖ドモ權智詐畧ヲ以テ天下ヲ取ルモノ、必ラズ久シキヲ保ツ能ハズ、而シテ北條氏八代百二十餘年ノ長キニ傳ヘ、其ノ間甚ダシキ動搖ナカリシハ何ゾヤ、止ダ泰時アリ、德政深ク人心ニ適ヒシガ故ノミ

泰時

泰時ハ義時ノ長子ナリ、幼名ハ金剛、江馬太郎ト稱ス、曾テ徒步シテ出遊シ、加賀重行ニ遇フ、重行馬ヨリ下ラズ、賴朝之ヲ聞テ大ニ怒リ、重行ヲ責ム、重行詐テ此ノ事ナシトイフ、賴朝益々怒リ、泰時ヲ召シテ之ヲ問フ、泰時、重行ノ罪ヲ獲ンコヲ愍ミ、對フルニ重行ノ言ノ如クス、賴朝其ノ能ク人ノ過ヲ掩フヲ嘉シ、劔ヲ賜フテ之ヲ褒奬ス、年甫メテ十三、之ヲ幕府ニ召シ、親カヲ冠ヲ加ヘテ賴時ト名ケ、後泰時ト改ム、長スルニ及ンデ寛厚ニシテ謙讓アリ、一年伊豆ノ北條大ニ饑ユ、泰時自ラ往キ、米ヲ出シテ民ニ貸シ、秋ニ至テ子本ヲ償ハンコヲ約セシム、既ニシテ暴風アリ、年穀實ラズ、民辦スル能ハズ、相率ヒテ流亡セントス、泰時悉ク逋負者ヲ會シ、粥ヲ出シテ之ヲ焚キ、且ツ之ニ飲食セシメ、人毎ニ米一斗ヲ與フ、民感泣

泰時

セサルナシ

承久ノ役

承久ノ役、泰時、政子及ヒ義時ノ命ヲ奉ジ、時房朝時ト共ニ兵ヲ率ヒテ西上ス、已ニシテ單騎途ヨリ還ル義時驚キ訝リテ之ヲ問フ、泰時曰ク「號令部署總テ命ヲ聽ク、若シ聖駕親征セハ如何セン」義時曰ク「止ダ冑ヲ脫シ、弓ヲ弛メテ身ヲ下吏ニ委スベシ、然レ𪜈諸將督師ニ遇ハヽ、努力死ヲ効シ、進ムテ退クヿ勿レ、軍若シ利ヲ失セバ、我レ復タ汝ヲ見ルヿ能ハズ」ト、泰時乃チ進ンテ京師ヲ陷レ、父ノ意ヲ受ケテ天皇上皇ヲ配流シ奉ツリ、留リテ六波羅ニ居リ、以テ京畿ヲ鎭ス

泰時執權ト

元仁元年義時卒ス、泰時乃チ鎌倉ニ還リテ執權トナリ、賴經ヲ輔佐シテ大政ヲ裁決ス、政子將ニ義時ノ莊園ヲ割キテ之ヲ諸子ニ與ヘント欲シ、泰時ニ命シテ注擬セシム、泰時多ク諸弟ニ分與シ、自ラ取ルヿ甚ダ少シ、政子其ノ故ヲ問フ、泰時謝シテ曰ク「身執權タリ、又何ヲカ求メン、止タ諸弟ヲ撫スルヲ以テ意トスベキノミ」ト、政子嗟嘆ス、繼母藤原氏、兄光宗トヽ謀リテ女婿藤原實雅ヲ將軍トシ、生ム所ノ政村ヲ以テ執權タラシメントス、群情洶々タリ、或人之ヲ泰時ニ告ク、泰時以テ誣妄ナリトシ、敢テ意ニ介セズ、三浦義村、泰時ニ謁シテ曰ク「頃者光宗等異圖アリ、僕中間ニ處シテ潛ニ其ノ謀ヲ折ク、是レ少シク奉効スル所以ナリ」泰時自若トシテ曰ク「我レ政村ニ織芥ノ恨ナシ、豈愛憎スル所アランヤ」ト、毫モ喜怒ノ色ナシ、然レ𪜈群議沸騰シテ將士競ヒ集マリ、政子、賴經ヲ奉シテ泰時ノ家ニ徒ル、乃チ議ヲ決シテ光宗ヲ流シ、實雅ヲ逐ヒ、他ハ少シモ問フ處ナシ、

泰時ノ至誠

寛喜中、諸國大ニ饑ユ、米九千石ヲ發シテ貧民ヲ賑救ス、蓋シ泰時ノ仁慈温厚、悉ク至誠ニ出ツ、故ニ四民其ノ德ニ懷ク

仁治三年四條天皇崩ジサセ玉ヒ、儲貳未ダ定ラズ、泰時歎ジテ曰ク「天位至重、神人ノ主ル所、我レ若シ緘默シ、廷臣ヲシテ立策ヲ恣ニセシメハ、安危殆ンド知ル可ラズ」ト、戶ヲ閉テ沈吟、殆ント寢食ヲ忘ル、竟ニ土御門天皇ノ皇子ヲ御位ニ即カセ奉ツル、後嵯峨天皇ヲ立テ申ス

後嵯峨天皇ヲ立テ申ス

泰時ノ人

ス、年六一

鎌倉政治ノ面

鎌倉時代ハ政治最モ簡易ニシテ、又最モ善良ナリシ時代トス、而シテ其ノ政事家タルノ具伎倆アルモノハ、泰時ヲ以テ第一ト爲サヾル可ラス、蓋シ當時ノ政治ハ、最モ民生ヲ愛撫シ、誠ヲ推シテ之ヲ治メシヲ以テ、制度ノ見ルベキモノナカリシト雖ドモ、天下泰平ニシテ四民各々其ノ堵ニ安ンズ、是レマタ華ヲ衒ハズシテ實ヲ尙ブ也、泰時嘉祿七年ヲ以テ新制

貞永式目

二一六條ヲ制シ、貞永元年ヲ以テ式目五十一條ヲ定ム、之ヲ貞永式目トイフ、文簡ナリト雖ドモ、爲政ノ摸範トシテ綱ヲ擧ゲ要ヲ悉ス、故ニ後世武家ノ政ヲ執ルモノ、皆之ニ倣フトイフ、始メ泰時ノ六波羅ニ在ルヤ、梅尾ノ僧明辨明恵ト人ヲ延キ、治政ノ材本ヲ問フ、明辨曰ク「世ヲ亂ルモノハ止ダ一ノ欲ノミ、欲心百出シテ萬般ノ禍トナル、故ニ爲政ノ要ハ、先ツ自カラ欲ヲ去ルニ在リ、大守苟クモ欲ナクンバ、臣僚皆欲ナク、政治公平ニシテ民枉屈ナケン、乃チ泰平到ルベシ」ト、泰時大ニ其ノ言ヲ可トシ、常ニ

泰時ノ政治

自ラ足ル所ヲ知リテ顯位ヲ欲セズ、又宗親將士ノタメニ官職ヲ求メズ、赤誠ヲ推シテ政局ニ當ル、曾テ評定衆十二人ヲ置キ、誓フテ曰ク「我等天下ノ直道ヲ司ル、若シ一點偏私スル所アラバ、神罰直チニ至ラン」又斷獄ノ事ニ分シテ曰ク「輕罪ハ其身ニ止メ、決シテ羅織スルヿ勿レ、盜竊スル者ハ、倍シテ之ヲ償ハシムベシ」ト、又屢々民ヲ賑恤シ、節儉ヲ以テ將士ヲ勵マシ、敢テ執權ヲ以テ驕ラズ、常ニ諸將ト遞番シテ、幕府ニ宿直ス、老ニ至テ懈ラス、其ノ訴ヲ聽クヤ、曲直ヲ明カニシ、邪正ヲ分チ、强宗豪族ト雖ドモ毫モ假スナシ、故ニ海內皆親服ス

泰時ノ良政事家タル所以

泰時ノ治ヲ爲スヤ、止タ大体ヲ擧ルノミ、己ヲ持スルヿ謹謙ニシテ其ノ政ヲ視ルヤ公正ヲ主トス、而シテ百事簡樸ヲ尙ビ、制文禮法ノ華ヲ求メズ、故ニ顯赫世ヲ驚カシ、華麗人ヲ喜バスノ蹟ナシト雖ドモ、海內平安ニシテ、民皆其ノ生ヲ樂ム、是レ所謂無爲ニシテ天下ヲ治ムルモノ也、眞成ニ治体ニ通セル良政事家トイフベシ

時頼

泰時ノ孫ヲ時頼トス、時頼一ニ泰時ノ遺法ニ遵ヒ、節儉ヲ守リ、公平ヲ主トシ、深ク士心ヲ得、後自ラ諸國ヲ行脚シテ風俗ヲ察シ、吏治ヲ視ル、風化大ニ行ハル、時頼マタ青砥藤綱ヲ擧ケテ引付衆トス、藤綱廉潔ニシテ學識アリ、公文ナル者、曾テ北條ノ邑人ト田ヲ爭テ訟フ、諸吏北條ヲ憚リテ故ラニ公文ヲ曲トス、藤綱覆議シテ之ヲ斷シ、田ヲ公文ニ還ス、公文喜ヒ、錢三百ヲ懷ニシ、密ニ藤綱ノ庭内ニ置テ去ル、藤綱怒テ曰ク「公平訟ヲ斷スルハ天下ノ直ヲ直トスル也、豈特ニ汝ガ爲メニセンヤ、苟クモ我レ公平ヲヨバ、相摸公（時頼ヲ謂フ）宜シク賞奬セラルベシ、汝ノ貨焉ソ我ヲ汚スヲ得ンヤ」、錢ヲ以テ其ノ家ニ還ス、藤綱剛直ニシテ權貴ヲ憚カラズ、故ニ姦吏迹ヲ斂メ、一時風俗翕然トシテ改マル、後世鎌倉ノ美蹟ヲ談スルモノ、皆時頼時宗ノ世ヲ推ス、而シテ其ノ治、實ハ藤綱ノ輔佐スル所ナリ

青砥藤綱

第六章

元兵ノ來寇

元ノ大勢

元ノ大勢ハ有名ナル蒙古ノ成吉思汗（ヂンギスカン）ナリ、勇武絶倫、戰畧ニ長ズ、兵ヲ起シテ西ノ方中央亞細亞、波斯、あふがにすたん、印度ノ北部等ヲ征服シ、又進ミテ歐洲ニ至リ、露ノ南部ヲ擺破シ、返リテ金ヲ攻メ、竟ニ支那ニ入ル、

世宗忽必烈

世宗忽必烈ニ至リ、宋ヲ滅シテ國ヲ元ト號ス、版圖ノ廣大ナル、前後比ナシ、乃チ戰勝ノ餘威ヲ藉リテ、日本ヲ征服セント欲シ、使ヲ遣ハシテ好ヲ通ヒンコトヲ求ム、實ニ龜山天皇文永五年二月ナリ、朝廷鎌倉ニ命シテ之ヲ諭ヤシム、時ニ時宗執權タリ、元使ノ書辭無禮ナルヲ怒リ、之ヲ却ケ還ス、八年元ノ使趙良弼來リ、書ヲ出タシ、答書ヲ求ム、朝廷答書ヲ草シテ鎌倉ニ示ス、時宗曰ク「是レ神州ノ威ヲ墜スナリ」ト、良弼ヲ逐ヒ還サシム、

時宗元使ヲ斥ク

後宇多天皇ノ御代（文永十一年）元兵三萬人、大宰府ヲ犯ス、建治元年四月元使杜世忠、何文著等九人、マタ來リ、必ラズ我ガ答書ヲ得ントス、時宗、世忠以

元兵來寇

下五人ヲ斬リ、大ニ沿海ノ兵備ヲ修メシム、弘安二年元將范文虎等來リ、部將周福・忠・陳光等ヲ大宰府ニ遣シテ通好ヲ求メシム、時宗マタ命シテ二人ヲ斬ル、元主之ヲ聞テ大ニ怒リ、四年范文虎・忻都・洪茶丘等ヲ將トシ、兵十餘萬、船艦數百艘ヲ以テ日本ヲ討タシム、我カ兵之ヲ壹岐・對馬ニ防ク、利アラズ、龜山天皇深ク宸襟ヲ惱メサセ玉ヒ、御躬カラ石清水ニ祈リ、宸筆ヲ伊勢大廟ニ奉ジ、身ヲ以テ國難ニ代ランヿヲ祈ラセ玉フ、六月元兵筑紫ニ來リ、五龍山ニ據テ平戸ヲ攻ム、九州ノ探題北條實政之ヲ防グ、部將草野七郎、兵船二艘ニ乘シテ、夜、元ノ軍艦ヲ襲ヒ、火ヲ放テ二十餘人ヲ斬獲ス、元兵乃チ大艦ヲ駢列シ、之ヲ繫クニ鐵鎖ヲ以テシ、板ヲ敷テ馳騁ヲ自在ニシ、艦上ニ弩ヲ列シ、大砲ヲ放ツ、我カ兵船マタ之ニ擊攘セラレ、死傷頗ル多ク、容易ク近ツクヲ得ズ、河野通有・膳勇人ニ過ク、輕舸ヲ飛シテ進ミ、檣ヲ以テ梯ニ代ヘ、攀チテ元艦ニ登リ、刀ヲ揮テ數十人ヲ斬リ、其ノ艦將ヲ擒ニス、安達次郎、大友貞親等亦繼テ進ム、我カ兵奮鬪力戰

元兵大敗

シテ敵兵數十人ヲ殺ス、元兵竟ニ陸ニ上ルヿ能ハズ、退キテ鷹嶋ニ據ル、范文虎等我カ兵ノ慓悍驍勇ナルヲ恐レテ先ツ逃レ走ル、八月晦夜、風雨大ニ起リ、海濤簸蕩シテ悉ク元艦ヲ顚覆ス、溺死算ナシ、敗卒千餘人、尚ホ鷹島ニ在リ、壞船ヲ修繕シテ逃レ歸ラントス、少貳景資勢ニ乘シテ之ヲ掩殺ス、生擒二人ヲ放テ國ニ還ラシム、始メ元兵十餘萬、是ニ至テ生還スルヒノ繩ニ二人ノミ、探題益兵備ヲ嚴ニス、元主憤恚シ、再ヒ大擧シテ來寇ハ、冠セント欲ス、其ノ臣ニ諫メラレテ竟ニ止ム、之ヨリ元兵復タ我カ國ヲ窺ハズ

夫レ元ハ大國ナリ、其ノ土地兵數、固トヨリ我ニ百倍ス、上皇ノ宸襟ヲ惱マシ玉ヘル故ナキニ非ズ、然ルニ時宗泰然トシテ動スルヿナク、自カラ鎌倉ニ在リテ命令ヲ下シ、竟ニ一大快勝ヲ得タリ、器度沈勇想フベシ、當時若シ時宗ナカリセバ、國家ノ安危未タ知ルヘカラサリシナリ、其ノ功豈偉ナラズヤ

第七章

元弘ノ亂

後鳥羽、土御門、順德ノ三上皇配流ノ禍ニ罹ラセ玉ヒシヨリ、天皇ノ廢立ニ北條氏ノ手中ニ歸セシカバ、後嵯峨天皇深ク之ヲ憤ラセ玉ヒ、崩御ノ時、遺詔シテ宣ハク、後深草院ノ後ハ、長講堂領百八十ケ所ヲ有シ、子孫永ク登位ノ望ヲ止メヨ、龜山院ノ後、獨リ大統ヲ承讃シテ、敢テ斷絕スベカヲズト、後深草、龜山ノ二天皇ハ共ニ後嵯峨天皇ノ皇子ナリ、而シテ天皇斯ノ如ク定メサセ玉ヘル者ハ、龜山院ノ後ヲシテ北條氏ヲ謀ラシメ奉ルノ御志アリシガ故ナリトイフ、然レドモ後深草院、時宗ニ謀ラセ玉ヒ、皇子伏見天皇ヲシテ、後宇多天皇（龜山天皇ノ皇子）ノ後ニ立タセ奉ラシメ玉フ、伏見天皇マタ貞時ニ依リ、皇子後伏見天皇ヲシテ御後ヲ嗣カセ奉ラシメ玉フ、是ニ於テ後宇多上皇、後嵯峨天皇ノ遺詔ヲ擧ケテ鎌倉ヲ責メサセ玉ヒシカバ、貞時乃チ兩院ノ御系統十年毎ニ交ル〳〵御位ニ卽カセ

後嵯峨天皇遺詔

兩統迭立ノ詔

玉フノ制ヲ定ム、故ニ後嵯峨天皇以來、御位ニ卽カセ玉ヘル御系統ハ左ノ如シ

第八十代 後嵯峨天皇（第八十九代後深草天皇——第九十二代後伏見天皇）（第九十五代花園天皇）（第九十代龜山天皇——第九十一代後宇多天皇）（第九十三代後伏見天皇）（第九十四代後二條天皇）（第九十六代後醍醐天皇）

後深草天皇ノ御系統ヲ持明院ト申シ奉リ、龜山天皇ノ御系統ヲ大覺寺ト稱シ奉ル、持明院流ハ長講堂ヲ有サセ玉フト雖モ、大覺寺流ニハ御封邑ナシ、故ニ大覺寺流ノ御不幸唯リ異ラセ玉フ所ナクンバアラズ、且ツ鎌倉ノ專横益々甚クシテ、動モスレバ持明院流ニ偏頗ナル所アリ、大覺寺流ヲ尊ビニシ奉ルヿ屢々ナリシカバ、此ノ御系統ハ世々御憤リ骨髓ニ徹シ玉ヒ、恢復ノ御志一日モ止マセ玉フヿナシ（持明院流ハ鎌倉ニ偏依シ玉ヒ、大覺寺流ト御間官シカラズ、時トシテハ大覺寺流ノ御企ヲ私カニ鎌倉ニ洩シ玉ヘルヿモアリ）後醍醐天皇ハ後宇多天皇第二ノ皇子ニ在マシテ、天資御英敏ニ渡ラセ玉ヒシカバ、龜山院深ク御

持明院及ビ大覺寺

後醍醐天皇

望ヲ繫カセ玉ヒ、竟ニ後二條院ノ皇子邦長親王ヲ超ヘテ御位ニ即ケ奉ラシ玉フ、天皇御心ヲ政治ニ留メサセ玉ヒ、記錄所ヲ置キ、御躬ラ訴訟ヲ聽カセ玉ヒ、諸事ヲ決シ玉フ、此ノ時ニ方リテ高時驕奢ニシテ人心ヲ失ス、天皇乃チ護良親王、藤原資朝、仝俊基、僧圓觀、文觀、土岐賴貞、多治見國長等ト謀リテ、誅伐ノ事ヲ企テ玉フ、謀泄ル、高時大ニ怒リ、資朝等ヲ捕テ流ニ處シ、將ニ廢立ヲ行ハントス、天皇誓書ヲ高時ニ賜フテ事纔カニ解クヲ得タリ、既ニシテ皇太子邦長親王薨シサセ玉フ、天皇後嵯峨天皇ノ遺詔ニ據テ、皇子護良親王ヲ立タセ玉フ叡慮アリ、令ヲ鎌倉ニ下シ玉フ、高時兩統迭立ノ約ヲ執テ勅ヲ奉セズ、竟ニ後伏見院ノ皇子量仁親王ヲ立ツ、是ニ於テ天皇逆鱗甚シク、護良親王ヲ延曆寺ノ座主トシ、僧徒ニ結ンデ北條氏ヲ圖ラセ玉フ、親王英武ニシテ武事ニ長ケ玉ヘリ、天皇ヲ贊ケテ密ニ謀圖ヲ廻ラシ玉フ、後伏見院使ヲ鎌倉ニ下シテ、天皇ノ御企ヲ報シ玉フ、高時大ニ驚キ、大兵ヲ發シテ京師ヲ攻ム、天皇乃チ親王ノ策ニヨリ、潛カニ南都ニ赴カセ玉ヒ、笠置ニ幸シテ諸國勤王ノ兵ヲ募ラセ玉フ、藤原師賢、輦輿ニ乘リ、天皇ト稱シテ延曆寺ニ赴ク、兩六波羅ノ將、仲時時益等之ヲ攻ム、僧徒等眞ノ天皇ニ非ザルヲ知テ叛キ去ル、仲時等マタ轉ジテ笠置ヲ犯シテ之ヲ陷ル、天皇潛カニ赤坂城（楠木正成ノ據ル所）ニ幸シ玉ハントス、群臣皆逃散シテ、獨リ藤原藤房、弟季房ト共ニ隨從シ奉リ、扶行シ參ラスルヿ三日、疲ルヽヿ甚シ、天皇二人ト共ニ岩ニ倚テ臥サセ玉フ、松露滴リテ御衣ヲ沾フス、天皇乃チ和歌ヲ詠ジサセ玉フ

天皇ノ御歌

指して行く笠置の山を出でしより
あめが下には隱れ家も無し

藤房血涙ヲ揮テ之ニ和シ奉ル

いかにせん頼むかげとて立寄れば
なをそでぬらす松のした露

既ニシテ城兵追ヒ至リ、天皇ヲ護送シテ平等院ニ入レ奉ル、高時竟ニ天

天皇ヲ隱岐ニ遷シ奉ル

楠木正成

皇ヲ六波羅ニ幽閉シ奉リ、次デ隱岐ニ遷シ奉ル、之ヲ元弘ノ亂トイフ

是ヨリ先キ楠木正成、徵ニ應ジテ兵ヲ擧ゲ、赤坂城ニ據ル、將ニ天皇ノ乘輿ヲ城中ニ奉ゼントス、其ノ建築成ルトキ、笠置既ニ陷リ、關東ノ將大佛貞直等、直チニ來リテ之ヲ攻ム、兵數三十餘萬、城中ノ兵僅カニ五百人ニ過ギズ、正成能ク禦ギ、東軍屢々敗ル、既ニシテ城中食盡ク、正成乃チ計ヲ設ケ、城ヲ火シテ逃レ、金剛山ニ入ル、次テ赤坂城ヲ復シ、更ニ進ンデ河內和泉ヲ徇フ、京師震動ス、次デ護良親王モ亦兵ヲ吉野ニ擧ゲサセ玉フ、高時兵ヲ遣ハシテ之ヲ攻ム、吉野、赤坂皆陷ル、是ニ於テ關東ノ兵皆集リテ金剛山ヲ攻ム、正成能ク守リ、屢々奇計ヲ設ケテ東軍ヲ窘ム、時ニ新田義貞マタ東軍ノ中ニアリ、密カニ護良親王ノ令旨ヲ奉ジ、上野ニ還リテ兵ヲ擧グ、土居得能等マタ四國ニ起リ、赤松則村、摩耶山ニ據リ、共ニ官軍ニ應ズ、是ニ於テ天皇源顯忠ト謀リ、夜潛カニ隱岐ヲ出デサセ玉ヒ、柴舟ニ御シテ伯耆ノ名和ノ港ニ着カセ玉フ、土地ノ豪族名和長年、一族ヲ擧ケテ天皇ヲ船上山ニ迎ヘ奉ル、近國ノ兵多ク來附ス、天皇乃チ顯忠ヲ遣ハシテ京師ヲ討タシメ玉フ、此ノ時ニ方リ、足利尊氏（始メ高氏ト稱ス、天皇御諱ノ一字ヲ賜フ、依テ尊氏トイフ）高時ノ命ヲ受ケ、兵ヲ率テ京師ニ至ル、急ニ叛シテ官軍ニ降リ、源顯忠等ト共ニ六波羅ヲ攻メテ之ヲ破ル、仲時時益等皆敗死シ、金剛山ノ圍ミ亦解ケ、京師平定ス、天皇乃チ伯耆ヲ發シテ攝津ニ至ラセ玉フ、正成等來リテ輿ヲ奉迎ス、時ニ鎌倉ノ捷報マタ至ル、天皇乃チ京師ニ入ラセ玉フ、實ニ元弘三年六月ナリ

足利尊氏

天皇京師ニ還ラセ玉フ

光嚴天皇ヲ立テ

始メ天皇ノ兵ヲ擧ゲサセ玉フヤ、高時、量仁親王ヲシテ御位ニ卽カセ奉ル、光嚴天皇是ナリ、是ニ至テ之ヲ廢シ奉ル、後醍醐天皇還幸ノ禮ヲ以テ御位ニ復リセ玉ヒ、關白ヲ罷メテ御躬カラ政治ヲ執ラセ玉フ

第八章　北條氏ノ滅亡

北條氏世々心ヲ民政ニ用ヒ、儉素ヲ以テ自ラ守リ、未ダ曾テ民心ヲ失ハズ、高時ニ至リテ驕奢ニ流レ、政治ニ荒ミ、忽チ父祖ノ業ヲ失ス

高時正和五年ヲ以テ執權トナル、年甫メテ十四、人ト爲リ舉止度ナシ、始メ國事ヲ秋田時顯、長崎圓喜ニ委ス、二人共心同謀、一ニ泰時ノ約束ニ隨フ、頗ブル無事ト稱ス、圓喜老ヲ以テ職ヲ辭スルニ至リ、其ノ子高資之ニ代ル、高資十ノ暗ニ乘ジテ威福ヲ恣ニシ、吏人ノ黜陟、訴訟ノ曲直、一ニ賄賂ヲ以テ定ム、是ニ於テ海内怨望シ、衆情日ニ離ル、而シテ高時昏亂滋々甚シク、日夜酣飲ス、曾テ犬鬪ヲ見テ之ヲ喜ヒ、諸將吏ノ家ニ索メ、及ヒ百姓ニ課シ、出セバ租稅ニ充ツ、遠近獻スル所數千頭ニ至ル、之ヲ養フニ粱肉ヲ以テシ、珠繡ヲ着セ、籃輿ニ載セ、毎月十二度、朋ヲ分テ縱鬪セシメ、諸將ヲ招觀シテ樂トス、又田樂ヲ好ミ、優倡數百人ヲ集メ、諸將ニ命ジテ各々人ヲ義ハシメ、宴毎ニ曲ヲ奏セシム、高時以下競フテ衣服ヲ脫シテ繩頭トシ、錦繡常ニ積ミテ丘ヲナス、其ノ費賞ヲレズ、而シテ高資益々横暴ナリ、陸奥、攝津、大和、紀伊等ニ兵ヲ擧ケテ、叛スルモノアリ、高時命シテ之ヲ討タシムレドモ克タズ

長崎高資

犬鬪

田樂

後醍醐天皇ノ兵ヲ擧ケサセ玉フヤ、高時大兵ヲ遣リテ之ヲ敗リ、竟ニ天皇ヲ隱岐ニ流シ奉ツル、時ニ楠木正成千早ノ城ニ據リ、寡兵ヲ以テ獨リ關東ノ兵ト戰ヒ、屢々之ヲ窘ム、東軍援クヿ能ハズ、軍情稍々解弛シ、私カニ背叛セントスル者アリ、護良親王マタ兵ヲ吉野ニ擧ゲサセ玉ヒ、檄ヲ諸國ニ飛シテ勤王ノ兵ヲ徵サセ玉フ、新田義貞千早城攻兵ノ中ニ在リ、親王ノ令書ヲ得、疾ト稱シテ上野ニ歸リ、元弘三年五月兵ヲ擧ケ、進ンテ武藏ニ入ル、高時兵ヲ遣シテ之ヲ擊タシメ、大ニ武藏野ニ戰フ、鎌倉ノ兵利アラズ、已ニシテ泰家（高時弟）赴キ援ケ、大ニ義貞ノ軍ヲ破ル、三浦義勝六千騎ヲ以テ義貞ニ屬シ、不意ニ泰家ヲ襲フ、泰家等敗レテ鎌倉ニ返ル、

義貞兵ヲ興ス

會々六波羅敗レ官軍大ニ振フノ報達ス、上下色ヲ失フ、義貞破竹ノ勢ニ乘シ、三道ヨリ前ヒ進ンデ鎌倉ヲ攻ム、竟ニ稻村ケ崎ヨリ海ヲ渉リテ鎌倉ニ入リ、風ニ因テ火ヲ放ツ、府第皆焚ケ、烟炎天ヲ衝ク、死傷算ナシ、高時千餘人ヲ以テ東勝寺ニ入リ、攝津道準、長崎圓喜、及ヒ高重（高資ノ子）諏訪直性等ト訣飲シ、枕ヲ駢ベテ自盡ス、其ノ戚屬將士從テ死スルモノ六千餘人、北條氏卒ク亡フ

高時自殺、北條氏亡ブ

義時ヨリ高時ニ至ルマテ九世、世之ヲ北條九代ト稱ス、然レ𪜈泰時ノ子時氏、未ダ執權タラズシテ卒ス、故ニ實ハ八代ナリ、今其ノ歷世執權ノ表ヲ示サ

北條氏執權表

父名	執權年間	卒去年號	年齡
一時政	一時家	自正治元年至元久二年	七
一義時	一時政	自元久二年至元仁元年	二〇
一泰時	一義時	自元仁元年至仁治三年	一九
一經時（泰時ノ子）	一時氏	自仁治三年至寛元四年	五
一時賴	一時氏	自寛元四年至康元元年	一四
一時宗	一時賴	自文永五年至弘安七年	一七
一貞時	一時宗	自弘安七年至正安三年	一八
一高時	一貞時	自正和五年至嘉曆元年	一一

康元元年時宗尚ホ幼ナルヲ以テ、文永五年マデ十餘年間長時（泰時ノ弟）時村相繼キテ執權ノ事ヲ攝ス

正安三年ヨリ師時（貞時ノ嗣）執權ノ職ヲ攝ス、應長元年五月頓死ス、北條宗時、同瀧時連署執權ノ事ヲ攝ス、翌正和元年宗宣卒シ、四年瀧時亦卒ス、北條基時之ニ代ル、蓋シ高時尚ホ幼ナルカ故ナリ

嘉曆元年高時執權ヲ弼メ、赤橋守時、北條維貞ヲシテ連署執權ノ事ヲ攝セシム、二年維貞卒ス、元德二年北條茂時之ニ代ル、以テ元

弘二年北條氏滅亡ニ帰ル

第九章

建武ノ中興

建武中興ノ制度ハ、主トシテ文武ヲ一ニスルニ在リシガ如シ、卽チ護良親王ヲ以テ征夷大將軍ニ任ゼラレ、又源顯家ヲ陸奥守ト爲シ、結城宗廣ト共ニ、皇子義良親王ヲ奉ジテ陸奥出羽ヲ鎭セシメ、又成良親王ヲ上野大守ニ任ジ、鎌倉ヲ鎭セシメ、足利直義（尊氏ノ弟）ヲ相摸守トメ之ヲ助ケシム、又新決所ヲ置キテ五畿七道ノ事ヲ分治セシメ、天皇自カラ記錄所ニ臨御シテ事ヲ裁決シ玉フ、卿相、大史、外記、判事及ビ正成（河內守）長年（伯耆守）等寄人トシテ之ニ預カル、又侍所ヲ置キ、天皇親臨シテ事ヲ決シ玉フ、又武者所ヲ置カレ、新田氏ノ人其ノ頭人ト爲リ、諸家ノ臣從ヲ宿直セシム

記錄所

侍所武者所

當時ノ地方官ハ國司、守護、地頭ニシテ、國司ハ公卿ノ任ゼラルヽモノ、守護地頭ハ武人ノ任ゼラルヽモノナリ、而シテ其ノ職トスル所異ナラズト雖モ、國司（公卿）ノミ門閥ニ跨リテ傲横ニ、守護地頭（武人等）ハ頗ブル輕蔑セラレタリ

國司、守護、地頭

斯ノ如ク、中興ノ制度ハ一見備ハレルガ如シト雖モ、永ク天下ヲ統治スルヿ能ハザリシモノハ、施設其ノ要ヲ得ザリシガ故ナリ、夫レ鎌倉幕府ハ武斷政府ニシテ、其ノ實權實ニ强大ナリシナリ、今一朝之ヲ顚覆シテ王政復古ノ業ヲ成ス、新政府ノ權勢ハ固トヨリ强大ニシテ、天下ノ武人ヲ制スルニ足ルモノナラザル可ラザル可ラズ、能ク全國ノ民心ヲ一致シテ、其ノ從フ所ヲ知ラシメザル可ラズ、然ルニ建武中興ノ新政府ハ、武人ヲ輕蔑スルヿ甚シクシテ、而カモ其ノ兵權ヲ朝廷ニ收ムルヿヲ爲サズ、賞罰其ノ當ヲ失シ、婦人ノ內謁盛ニ行ハレテ、朝令暮改、政ニ一定ノ方針ナク、且ツ政治ノ實權ハ公卿僧侶ノ輩ニ歸シ、妓女俳倡ノ輩ト雖モ、媚ヲ求メ色

中央政府ノ失

ヲ賞ルモノニハ采邑ヲ賜ハリ、有功ノ武人ニハ、卽チ微賞少封ヲ得ルニ過キズ、甚シキハ全ク賞祿ニ與カラザルノ武人アリ、或ハ偶々封邑ヲ賜フト雖モ、內奏ニ由テ直チニ之ヲ奪ハルヽモノアリ、故ニ有功强勇ノ武人ハ其ノ所ヲ得ズ、諂諛阿媚ノ輩、却テ揚々トシテ得色アリ、斯ノ如クニシテ士心豈一致スルヲ得ンヤ、政府豈武人ヲ統御スルヲ得ンヤ

日ツ中興政府ハ外觀ヲ飾テ其ノ莊重ヲ裝ハント欲シ、兵亂ノ後、庶民ノ疲弊甚シキヲ顧ミズ、急ニ土木ヲ起シテ內裏ヲ造營セシメ、又不用ノ典禮ヲ起シテ租稅ヲ重クセリ、而シテ朝廷ノ官人ハ宴安ニ流レ、放逸ニ耽リ、マタ實際ノ政務ヲ意トセズ、藤房ノ如キ忠誠賢良ノ公卿ハ、冠ヲ掛ケテ其ノ跡ヲ隱晦スルニ至レリ、斯クノ如クニシテ政府豈解体セザランヤ、民心ハ業ニ既ニ北條氏ノ故政ヲ追慕シ、切ニ武門政治ヲ希望セルナリ

夫レ當時ノ武人ナルモノハ、北條氏ノ頃ニ於テ權勢ヲ有シタル剛强ノ士ニシテ、公卿ノ如キハ常ニ其ノ心ニ侮レル所、然ルニ今ヤ軍功アリト雖モ賞祿ヲ得ザルノミナラズ、平生輕侮セル所ノ柔弱婦女ノ如キ公卿ヲ拜シ、甚シキニ至テハ諂諛阿從、男子ノ齒スルヿヲ耻ヅル妓女俳倡ノ下ニ手ヲ束子ザル可ラズ、是レ豈武人ノ得テ忍フ所ナランヤ、彼等ハ蓋シ腕ヲ扼シ刀ヲ磨シテ戰亂ノ起ルヲ翹望セリ

新田足利ノ一族

此ノ時ニ方リテ新田足利ノ二族隙アリ、蓋シ此ノ二族ハ共ニ源氏ノ宗族ニシテ、足利氏ノ聲望特ニ高シ、然レドモ、義貞上野ニ起リ、死戰シテ鎌倉ヲ攻メ、竟ニ北條氏ヲ亡ボス、其ノ功遙ニ尊氏ノ上ニ在リ、尊氏始メヨリ勤王ノ志ナシ、元弘ノ際、首鼠兩端ヲ抱キ、鎌倉ノ勇將名越高家戰死スルニ及ビ、始メテ意ヲ決シテ敗兵殘卒ノ守レル六波羅ヲ陷レシニ過ギズ、然ルニ天皇ノ功ヲ賞シ玉フヤ、准后ノ言ヲ用ヒテ尊氏ヲ首功トシ玉ヒ、寵賞極メテ厚シ、是ニ於テ義貞頗ル不平ナリ、此ノ時ニ方リ、護良親王亦深ク尊氏ノ姦猾ヲ憎マセ玉ヒ、奏請シテ之ヲ誅セントシ玉フ、時ニ准

后生ミ奉ル所ノ皇子恒良親王立チテ皇太子トナラセ玉フ、淮后護良親王ノ英武ニシテ大功アリ、後或ハ皇太子ニ害アランヿヲ恐ル、尊氏之ヲ機トシ、親王御謀叛ノ御志アリト誣ヒ、淮后ヲシテ之ヲ内奏セシム、天皇乃チ親王ヲ鎌倉ノ土窟ニ幽閉シ、直義ニ命シテ之ヲ衛ラシメ玉フ、次テ直義、親王ヲ弑シ奉ル

直義、護良親王ヲ弑シ奉ル

尊氏自カラ鎌倉ニ帰

建武二年高時ノ子時行叛シ、兵數萬ヲ以テ鎌倉ヲ攻ム、直義、成良親王ヲ奉ジテ出テ走ル、尊氏マタ淮后ニ由テ征討ノ任ヲ請ヒ、行テ直義ト合シテ時行ヲ擊チ、竟ニ府ヲ鎌倉ニ開キ、自カラ征夷大將軍東國ノ管領ト稱ス、上表シテ義貞ヲ誅セントヿ請フ、義貞亦上奏シテ尊氏ノ罪ヲ訴フ、天皇竟ニ義貞ニ勅シテ尊氏ヲ討タシメ玉フ、抑モ此ノ役ヤ、武人中最モ聲望アル足利新田兩氏ノ勝敗ヲ決スル所、天下ノ嚮背一ニ茲ニ繫レリ、義貞三河ニ至リ、直義ト戰フテ之ヲ敗リ、勝ニ乘シテ函根ニ至ル、尊氏來リテ直義ヲ援ケ、大ニ竹下ニ戰フ、義貞竟ニ敗績シテ京師ニ歸ル、是ニ於テ天下ノ武人、一時ニ蜂起シテ尊氏ニ應ズ、尊氏直義進ンデ京師ヲ攻ム、天皇京師ヲ出御シテ叡山ニ幸シ玉フ、時ニ延元元年ナリ、後正成義貞等京師ヲ復スルニ及ビ、復ビ還幸シ玉ヘリト雖モ、次デ叡山ニ籠ラセ玉ヒ、竟ニ吉野ノ行宮ニ遷ラセ玉ヒ、茲ニ在マスヿ四年ニシテ崩シサセ玉フ、御寿算五十三

尊氏ニ應ズ

天皇京師ヲ出御

皇統二分

建武中興ノ業

是ヨリ先キ尊氏京師ニ於テ光嚴院ノ御弟豐仁親王ヲ御位ニ即カセ奉ル、光明天皇是レナリ、是ニ至テ吉野ノ朝廷ヲ南朝トイヒ、京師ヲ北朝トイヒ、皇統マタ二分ス、而シテ建武中興ノ業全ク壞レタリ

第十章

楠木氏及ヒ新田氏ノ勤王

楠氏及ヒ新田氏ノ勤王

今攝津ノ湊川ニ「嗚呼忠臣楠氏之墓」アリ、水戸義公ノ建テシ所、蓋シ正成ノ精忠ヲ表スルナリ、夫レ建武中興ノ際、楠木氏新田氏能ク王事ニ

勤メ、始メハ徴ニ應メ孤城ニ義旗ヲ樹テ、天下武人ノ心眼ヲ醒覺シ、或ハ挺身死戰シテ元凶ヲ誅伐シ、能ク建武中興ノ業ヲ成ラシメ、後賊魁蹶起シテ天下ヲ混亂シ、天日再ヒ曇ルニ及ビ、苦心焦慮シテ攻伐ニ力メ、未タ曾テ寧處セス、終ニ刀折レ矢盡キテ王事ニ死ス、假令南風競ハズシテ、戰勝偉功ヲ立ツルヿナカリシトハ雖ヒ、其ノ忠固ヨリ日月ト併セ懸ルニ足ル、後世二氏ノ風ヲ聞テ奮發シ、起テ王事ニ盡瘁セルモノ多シ、二氏ノ精忠、世道人心ニ關スルヿ大ナリ

正成ハ河內ノ人ナリ、始メ後醍醐天皇笠置ニ幸シテ、勤王ノ士ヲ募ラセ玉フヤ正成徴ニ應ジテ至ル、天皇深ク之ヲ嘉ミサセ玉ヒ、興復ノ事ヲ托リセ玉フ、正成感激シテ曰ク、東兵勇ニシテ衆トハ、力ヲ用ヰテ勝ツコト難シト雖モ、謀ヲ以テセハ勝算ナキニ非ズ、然レヒ勝敗ハ兵家ノ常ナリ、假令少シク挫衂スルヿアルモ、臣若シ存スルアラバ、幸ヒニ宸慮ヲ煩ハシ玉フコトナカレト、拜辭シテ赤坂ニ歸リ、關東ノ兵ヲ防グ、赤坂陷ルニ

正成

及ビ、千早城ニ據ル、東國ノ兵衆ヲ悉シテ之ヲ圍ム、正成屢々謀ヲ以テ之ヲ苦メ、東軍久シク拔ク能ハズ、叛キ去ラント欲スル者アリ、諸國ノ武人マタ楠木氏ノ兵强ク、東軍屢々利アラズト聞キテ、勤王ノ志ヲ生ズルモノ多シ、是ニ於テ義貞上野ニ起リテ鎌倉ヲ攻メ、足利氏六波羅ヲ陷ル、蓋シ正成皆之ガ先ヲ爲スナリ

建武中興ノ業成ルニ及ビ、朝廷ノ識者皆正成ヲ以テ首功トス、天皇准后ノ內奏ヲ用ヒ玉ヒテ、却テ尊氏義貞ノ下ニ置カセ玉フ、故ニ正成撿非違使河內守ニ拜セラレシニ過ギス

後尊氏謙倉ニ據テ叛シ、大擧西上スルニ及ビ、正成之ヲ宇治ニ防グ、尊氏大渡ヲ破リテ京師ニ入リ、天皇叡山ニ幸シ玉フ、正成乃チ策ヲ設ケテ義貞ト共ニ尊氏ヲ襲フ、尊氏大ニ敗レ、身ヲ以テ九州ニ逃ル、車駕京師ニ還幸ス、始メ新政ニ偏頗多ク、賞罰其ノ正ヲ失シ、天下ノ人心漸ク離散ス、正成之ヲ憂ハテ屢々直諫ス、用ヰラレズ、藤房因ト正成ト善シ、竟ニ身ヲ雲水

大ニ尊氏ヲ敗

藤原房因

足利大軍東ニ

ニ任シテ去ル、是ニ於テ正成マタ意ヲ決ス、延元元年五月尊氏直義ト共ニ九州ノ兵ヲ率ヒ、水陸二道ヨリ進ム、義貞之ヲ兵庫ニ防グ兵士多ク逃亡ス、乃チ急ヲ朝廷ニ報ズ、天皇正成ヲシテ赴キ援ハシメ玉フ、正成策ヲ立テヽ曰ク、今賊衆ヲ悉シテ來ル、其ノ鋒鋭當ル可ラス、如カス車駕再ビ叡山ニ幸シ玉ヒ、尊氏等ヲ京師ニ入レ、臣ト義貞ト挾ミテ之ヲ塞ニセンニハシト、參議清忠等之レヲ不可トス、正成乃チ拜辭シテ兵庫ニ至リ、湊川ニ陣ス、賊ノ陸兵二十餘萬、正成七百騎ヲ以テ之ニ當リ、向背敵ヲ受ク、弟正季ト共ニ進ンデ直義ノ兵ト戰ヒ、縱横奮擊ス、賊兵披靡ス、殆ント直義ヲ獲ントス、適々尊氏ノ兵其ノ背ニ迫ル、正成轉ジテ之ニ當リ、血戰數十合、終ニ正季ト共ニ死ス、年四十三、一族從兵皆之ニ死ス、天皇追悼シテ正三位左近衛中將ヲ贈ラセ玉フ

湊川ノ役

正成戰死

正行

正行ハ正成ノ子ナリ、正成死スルトキ河内ニ在リ、尊氏正成ノ首級ヲ見テ嗟嘆ス、士卒マタ涙ヲ垂ルヽモノ多シ、竟ニ之ヲ河内ニ贈ル、正行之ヲ見テ直チニ起テ持佛堂ニ入ル、母恠ムデ之ヲ窺フ、正行將ニ自刃セントス、母走リ入テ之ヲ止メテ曰ク「汝狂セル乎、先君汝ヲ殘シ玉ヘルモノハ、汝ヲシテ斯ノ如クセシメンガタメニ非ズ、正ダ賊ヲ亡ボシテ天子ノ宸襟ヲ安ンジ奉リ、先君ノ仇ヲ復セシメンガタメノミ」ト、其ノ刀ヲ奪フテ泣キ且ツ諫ム、正行感泣ス、時ニ年十一、是レヨリ恢復ヲ以テ志ト爲シ、日夜軍事ヲ練習ス

母ノ苦諫

官軍ノ湊川ニ敗ルヽヤ、天皇マタ叡山ニ幸シ玉フ、尊氏佯リ降リテ神器ヲ北帝ニ傳ヘ玉ハンコトヲ請フ、天皇許シ玉ハズ、夜潛カニ穴生ニ至ラセ玉フ、正行、和田正朝等ヲ隨ヘテ之ヲ奉迎ス、乃チ吉野ヲ以テ行宮トス、天皇正行ヲ正四位下ニ叙シ、帶刀ニ任ジサセ玉フ、後ニ父ノ職名ヲ襲フテ左衛門尉河内守ト爲ル

後村上天皇ノ正平二年、正行兵ヲ攝津ニ出シ、尊氏ノ將細川顯氏、山名時氏等ヲ敗ル、兵勢大ニ振ヒ、京師震動ス、翌三年正月尊氏、高師直師泰ヲシ

テ、兵萬人ヲ率ヒテ來リ討タシム、正行乃チ弟正時及ビ一族ヲ率ヒテ行宮ニ詣リ、奏シテ曰ク「臣亡父ノ遺意ヲ奉ジ、日夜國讐ヲ報ズルヲ以テ念トス、然レドモ稟性多病、或ハ空シク婦女ノ手ニ死シテ、不忠不孝ノ臣タルヲ恐ル、今賊兵大舉シテ來リ犯ス、是レ臣ガ眞ニ報効スベキノ時ナリ、臣若シ彼ガ首ヲ馘セズンバ、則チ臣ガ首ヲ彼ニ授ケン、生死ノ決此ノ一戰ニ在リ、俯シテ願クハ一ヒ天顏ヲ拜シ奉リテ、臣等生涯ノ懷ヲ遣ラン」天皇御簾ヲ揭ゲサセテ將士ヲ御覽ジ、宣ハク「朕深ク汝父子ガ忠義ヲ嘉ミス、今朕ガ賴ム所モ亦汝等アルノミ、假令戰ヒ利アラズト雖モ、朕カタメニ自愛シテ敢テ死スルヿ勿レ」ト、正行嗚咽垂泣シテ出デ、後醍醐天皇ノ廟ニ拜別シテ、進ンデ四條畷ニ陣ス、師直兵八萬ヲ分ツテ五隊トシ、官軍ノ將隆資ヲ敗リ、又正行ノ後軍ヲ破ル、正行意トセズ、三百騎ヲ以テ突進ス、賊將交々遮リ戰フ、正行悉ク之ヲ破リ、竟ニ師直ノ中軍ヲ衝ク、衆皆奮進シ、一以テ百ニ當ラザルナシ、賊兵披靡シ、死屍縱橫山積ス、師直殆ント危ブシ、其ノ臣某師直ト稱シテ死ス、正行其ノ首ヲ獲テ喜ブ、既ニシテ師直ニ非サルヲ知リ、更ニ進ンデ之ヲ索ム、血戰朝ヨリ夕ニ至リ、卒死シ馬斃ル、餘ス所五十餘人ニ過ギズ、大呼シテ敵ヲ衝キ、マタ師直ニ迫ル、賊四周ヨリ箭ヲ放ツ、正行等疲困シテ進ムヿ能ハス、終ニ正時ト相刺シテ死ス、年二十二、從兵悉ク之ニ殉フ

四條畷ノ戰

正行戰死、

是ヨリ先キ、宮女辨內侍姿色アリ、師直之ヲ奪ハントス、正行途ニ於テ之ヲ救ヒ、護シテ吉野ノ行宮ニ至ル、天皇之ヲ賞サセ玉ヒ、內侍ヲ正行ニ賜フ、正行歌ヲ奉リテ固辭ス、曰ク

辨內侍

とても世にながらうべくもあらぬ身の
かりのちぎりをいかで結ばん

聞クモノ皆正行ノ志ヲ悲マザルハナシ、正行戰死スルニ及ビ、內侍落飾シテ其ノ後ヲ吊フトイフ

正行

正行ノ弟正儀、マタ河內ニ據リテ能ク戰フ、吉野タメニ亡ビザルヲ得タ

新田義貞

リ、蓄シ南朝、天下ノ人心ヲ失シテ、而シテ尙ホ猶額大ノ地ニ偏安シ玉ヒシヒノハ、楠木氏父子在リシガ故ナリ

新田義貞ハ上野ノ人、源義家ノ裔ナリ、鎌倉ヲ亡ボスニ及ヒ、功ヲ以テ左兵衛督ニ任ジ、上野播磨ノ守護職ヲ管ス、然レドモ親任尊氏ニ及バズ、尊氏叛スルニ及ビ、南朝ノ兵皆重キヲ義貞ニ屬ス、義貞屢々寡兵ヲ以テ尊氏ノ大軍ヲ敗リ、正成及ビ顯家ト共ニ尊氏ヲ敗ル、尊氏九州ノ兵ヲ率ヒテ東上シ、正成湊川ニ戰死スルニ及ビ、義貞京師ニ歸リ、天皇ヲ奉ジテ比叡山ニ據ル、尊氏東寺ニ據リテ行在ヲ犯ス、義貞等戰フテ之ヲ敗リ、進ンデ東寺ニ迫ル、然レドモ衆寡敵セス、竟ニ敗レ還ル、尊氏佯リ降リ、車駕京師ニ還幸センコトヲ請フ、天皇之ヲ許シ玉フ、義貞未ダ之ヲ知ラズ、聞テ大ニ驚キ、大舘氏明ヲシテ往テ之ヲ窺ハシム、乘輿將ニ發スル時也、氏明泣テ諫メテ曰ク「陛下何ヲ以テ反賊ヲ眷愛シ玉ヒ、義貞何ノ罪アッテ之ヲ捨テサセ玉フヤ、伏テ希クハ義貞以下ヲ召シ、死ヲ御前ニ賜フテ而シテ後ニ駕ヲ顧セヨ」既ニシテ義貞義助等三千人尋デ至リ、入テ階下ニ列ス、天皇乃チ義貞等ニ勅シテ宣ハク「元弘以來、汝一族ノ精忠、朕豈之ヲ忘レンヤ、但ダ天未ダ朕ニ福セズ、賊勢動スレバ滔天ノ勢アリ、由テ權リニ和ヲ講シ、以テ時變ヲ待ントス、其ノ事ノ漏泄ヲ恐ルヽガ故ニ、未ダ告ゲザリシノミ、今皇太子ヲ以テ汝ニ附ス、汝之ヲ視ルコト朕ノ如クシ、奉ジテ北國ヲ經略シ、極ンデヽ恢復ヲ圖レ」ト、義貞等感泣シ、明日皇太子及ヒ尊良親王ヲ奉ジテ越前ニ赴ク、時ニ延元元年十月ナリ、翌年足利高經、高師泰等大兵ヲ以テ來テ金崎城ヲ攻ム、義貞能ク之ヲ防グ、既ニシテ城中食盡キ、城陷ル、尊良親王御躬カラ割腹サセ玉ヒ、皇太子竟ニ賊ノ手ニ落チサセ玉フ、義貞杣山城ヲ保ス、此ノ時ニ方リテ、義貞ノ次子義興、上野ニ起リ、菊池武重肥後ニ起リ、兵勢頗ル震フ、義貞ノ軍威亦漸ク盛ナリ、乃チ進ンデ高師泰ヲ足羽城ニ攻ム、七月藤嶋ヲ攻ム、軍利アラス、箭ニ中テ死ス、年三十八賊兵其ノ屍ヲ檢スルニ及ビ、甲中錦囊ノ詔書ヲ得タリトイフ、以テ義貞

新田義貞

越前ニ出ル

藤島ノ攻略義貞戰死

朝廷ヲ恐レザルノ志ヲ見ルベシ、正成義貞既ニ死セシヨリ、悲ヒ哉天皇慷慨御劍ヲ案ジテ崩ジサセ玉ヘリト雖モ、南風終ニ競ハズ義貞ノ子義宗、義興等、マタ父ノ志ヲ嗣キ、一門悉ク王事ニ死ス、楠木氏新田氏ノ外、北畠氏、菊池氏、名和氏等精忠ニシテ節ヲ替ヘズ、菊池氏最モ能ク戰ヒ、九州之カ爲ニ震フ、然レドモ土地偏僻、竟ニ王業ヲ恢復スルニ至ラズ、明治維新ノ大業成ルニ及ビ朝廷、楠木、新田、菊池、北畠名和ノ諸氏ニ神號ヲ贈リ、國典ヲ以テ之ヲ祭祠シ、以テ其精忠ヲ追賞セラル

第拾壹章

政治

藤原氏執權以來、奢侈文弱ノ弊長ジテ、朝廷遊惰ニ耽リ、紀綱壞敗シテ、衆庶依ル所ヲ知ラス、頼朝起ルニ及ヒ、政令ヲ簡易ニシ、務メテ大体ヲ存シテ細苛ニ渉ルヲ避ク、蓋シ概シテ之ヲイヘバ、武門政治ハ武斷ヲ主トシテ、極メテ簡易單粗ナリト雖モ、鎌倉政府ノ政治ハ、就中最モ簡易ヲ極メ、殊ニ泰時ニ至リテ心ヲ民政ニ用フルヿ厚ク、政治ノ善良ナルヿ、古今無比ト稱セラル

官制

第一官制　鎌倉ニハ執權アリテ諸政ヲ綜覽シ、政所ニ別當アリテ政令ヲ掌リ、問注所ニ執事、寄人アリテ訴訟ヲ聽決シ、侍所ニ別當、所司アリテ軍政、及ヒ將士ノ考課ヲ主リ、評定所ニ評定衆アリテ政令軍事ニ參シ、引付衆アリテ訟獄ニ陪議シ、又越訴奉行アリテ控訴ヲ裁定ス、之ヲ內職員ト

諸國ニハ守護地頭ヲ置キ、之ヲ置カサル所、或ハ樞要ノ地ニハ奉行、探題、管領等ヲ置ク、陸奥奉行、秋田城介、鎮西奉行（後ニ探題トス）中國探題、六波羅探題、蝦夷管領等是レナリ

法律

第二法律　法律ハ問注所、六波羅、守護地頭ノ司ル所ニシテ、始メヨリ一

定ノ法文ナク、多クハ大寶律及ヒ法曹至要抄等ヲ用ヒ、便宜之ヲ參酌ス、泰時ノ時ニ至リ、頼朝以來ノ舊慣ニ據リ、式目五十一條ヲ撰定ス、所謂貞永式目是レナリ、其ノ法、守護地頭ハ罪人ヲ逮捕スルヿ故ノ如シト雖モ、檀ニ之ヲ所分スルヿヲ得ス、幕府若クハ六波羅ノ命ヲ奉シテ之ヲ斷ス、即チ幕府ハ東國、六波羅ハ西國ノ司法ヲ統轄シ、守護地頭等ノ吟味上申スル所ヲ調ベ、又領地境界等ノ民事訴訟ヲモ直裁セリ

刑法

當時正刑ニ四種アリ、禁獄、追放、流罪（遠流、近流、中流）死刑（斬、梟、磔）トス公家ノ閨刑ニハ召籠、怠狀、勅勘、解官除籍アリ、武人ノ閨刑ニハ召禁、過怠、職改易、永不召放、所領召放等アリ、庶人ノ閨刑ニハ剃半髮、捺火印、過料、闕所、所帶沒收アリ、又別ニ三族ノ罪アリ

財政

第三財政　政治簡易ナルトキハ、租稅ノ輕キコト其ノ理ナリ、然レトモ頼朝ノ頃ハ稅率尚ホ五公以上ニ當リ、且ツ布調ヲモ督發セシコトアリ、百姓頗ル窮セリトイフ、泰時ニ至リ、稅率ヲ輕クシ、諸種ノ調物ヲ減ジ、課役ヲ省ケリ、當時田租ヲ乃貢又ハ物成トイフ、其ノ制左ノ如シ、即チ上田ハ五公五民ニシテ、以下之ヲ遞減セルナリ

		水田 曲尺	穫米 宜旨升	租米 全上	割合
錦	上	一歩方六尺	四合一勺餘	二合五撮余	五割
食	田	一段三百六十歩	一石五斗	七斗五升	
		一町三千六百歩	十五石	七石五斗	
政	中	一歩	三合六勺餘	一合五勺餘	四割四分弱
府	田	一段	一石三斗	五斗七升	
		一町	十三石	五石七斗	
租	下	一歩	三合零餘	一合二勺餘	四割零九厘強
制	田	一段	一石一斗	四斗五合	
		一町	十一石	四石五斗	

時輯ノ時ニ至リテ、始メテ武士ト百姓ヲ區別シ、軍事ヲ以テ武人ノ常職トシ、百姓ヲシテ農業夫役ヲ勤メシメテ、戰陣ニ出ルヿヲ免ス

又田地ヲ計ルニ何盛ト稱シ、錢ノ名ヲ用フルヿハ、北條氏ノ頃ヨリ始マレリ、其ノ法大抵土地五段（初高十石）ヲ以テ唐錢一貫文トス其ノ田租ヲ徵スルヿヲ、マタ米納ニ代フルニ錢納ヲ以テスルヿヲ許ス、其ノ制左ノ如シ

錢納

段別	穫米	沽價	租米	納錢	割合
一段	一石	四百文	一石	二百文	五割
租五段	一石	一貫文	五石	五百文	
表一町	二十石	二貫文	十石	一貫文	

是レ米納ノ如キ運漕ノ不便ヲ去リシモノ、官私共ニ極メテ便トスル所ナリシナルベシ

高時ノ時ニ至リ、奢侈ヲ窮極セルヲ以テ、聚斂甚ダ重ク、七公三民ヨリ八公二民ニ至ルトイフ

又國役、段錢、段米、棟別、夫役、夫錢、鄕錢、倉役、目錢、口錢、酒屋錢等ノ課役アリ、田林、町屋、車宿ニハ地子ヲ課ス、課役ハ內裏社殿ノ造營及ヒ城池、道橋、堤防ノ搆築、驛傳等ノ事アルニ臨ミ、費用ヲ課シテ米錢ヲ徵收シ、又ハ百姓ヲ使役スルモノナリ、始メハ之ヲ段別ニ課シテ段錢トイヒ、後ニ石高ニ課シテ高掛米トイフ、武家役ハ文治以來、武士ノ領地特ニ增加セルヲ以テ、大番役、篝火役ヲ課シテ警衛セシメシモノナイフ、又後醍醐天皇ノ御代ニ領地ノ收入二十分ノ一ヲ課シ、以テ宮殿搆造ノ費ニ充テラレシコトアリ

第四兵制　鎌倉及ヒ六波羅ニ大番兵ヲ置キ、一年ヲ以テ上番ノ期トシ、後六ケ月トス、又篝火ヲ置キ、保內ノ家人ヲシテ交替服役セシメ、以テ不虞ニ備フ、大番ハ衛士ノ如キモノニシテ、地方ノ住人ヲ發シテ之ヲ務メシメ、篝卒ハ京中ノ要所（四十八所）ニ警衛シテ篝火ヲ設ケ、皷ヲ置キテ盜賊ニ備フ、其ノ費用ハ一切諸國ノ武士ニ課シ、或ハ大番ノ懈怠者ニ命ス、又樞

要ノ地ニハ探題及ヒ奉行ヲ置キ、兵ヲ蓄ヘテ以テ非常ニ備ヘシム

抑モ武門政府ノ作ハ、武人一切ノ政務ヲ主レルカ故ニ、司法ノ官吏ト雖ヒ、非常ノ作ニ臨ノハ皆甲ヲ擐シ馬ニ跨リテ軍陣ニ出ツ、故ニ其ノ兵制中古ノ如ク整備セスト雖ヒ、兵數多クシテ且ツ驍勇ナルヿ遠ク之ニ過キ、一朝事アレハ數十萬ノ兵馬立ロニ集レリ

第十二章　風俗

第一服裝　當時公武ノ間ニ行ハレシ衣服ハ、素襖、直垂、布衣、水干等ニシテ、皆絹布ヲ以テ之ヲ製ス、大將ノ軍陣ニ臨ムヤ、錦若クハ綾ノ直垂ヲ鎧ノ上ニ着ス、武士ハ即チ布直垂ヲ用フ、直垂ニハ各々徽號ヲ畫ク、之ヲ大紋トイフ（後世ノ家紋ハ是ヨリ起ル）衣服ノ着樣ハ退衣紋（ノケモン）ト稱シテ衽ヲ背後ニ推シ下ケ、袴腰ヲ高ク上ケ、衽ト腰トノ間五寸ニ過ギス、此ノ風久シク關東ニ行ハレ、南北朝以後ニ至リテモ、尙ホ鎌倉風ト稱シテ之ヲ喜ベルモノアリ

中古ノ末ヨリ、百姓帶刀ノ禁弛ミ、所在兇惡ノ徒、皆刀ヲ帶ビテ閭里ヲ横行ス、建長年中ニ至リ、北條時賴令ヲ下シテ卑賤ノ輩ノ帶刀ヲ禁ズ、爾來庶民或ハ小刀ノ長キモノヲ帶ブ、之ヲ脇差トイフ

當時月代（始メハつきしろトイヒ後世之ヲさかやきトイフ）ノ風盛ニ行ハル、冑ヲ被ルトキ逆上ヲ避クルカタメニ、頭上ヲ丸ク中剃ル、其ノ形、月ノ如ク、圓クシテ白シ、故ニ月代ノ名アリ、然レドモ戰ヒ終ルトキ、マタ總髮トナリテ烏帽子ヲ着ク、引起烏帽子、揉烏帽子等アリ、貴賤共ニ露頭ナルヲ無禮トス

京師ニテハ、公卿ノ元服ハ髻ヲ短クシ、鉄漿ヲ以テ齒ヲ涅シ、眉ヲ剃リテ額際ヘ丸眉ヲ畫ク、之ヲ高眉トイフ、但シ男子十六七歲ノ頃マデ之ヲ爲スノミ、是ヨリ以上ハ舊ノ本眉ニ復ス、マタ女子間ニハ、大抵高眉ニシテ

齒ヲ染ムルノ風行ハレタリ

第二家屋　頼朝ノ府ヲ鎌倉ニ創スルヤ、諸國ノ武士、亦邸宅ヲ茲ニ營ム、其ノ建築、舊制ニ倣ハス、皆各自ノ意ニ任セテ造作シ、質朴ニシテ飾ラス、之ヲ武家風ノ建築トイフ、其ノ大略ノ法、總廊ニ門アリ、門ノ左右ニ樓アリ、門ヲ入レバ又中門アリ、傍ニ廊アリ、遠侍(トホザムラヒ)トイフ、中門ヨリ直ニ殿ニ上ル、之ヲ寄殿(京師ニテハ寝殿ト云フ)トイフ、建仁二年禪僧榮西、京師ニ於テ建仁寺ヲ建ツルニ及ビ、宋ノ佛寺ノ建築法ニ倣フテ始メテ玄關ヲ造ル、玄關ハ客殿ニ入ル門ニシテ、即チ二扇門ナリ、當時武士ノ間ニ禪學行ハレシガ、之ヨリ後、家屋ノ建築モ亦佛寺ニ倣ヒ、玄關、書院、床ノ間等ヲ造ル、此ノ時代ニ土藏ヲ作ルノ風始メテ行ハレタリ、造酒屋、質店ハ必ス土藏造リナルヲ以テ、當時二店ヲ單稱シテ土倉トイヘリ、後京師鎌倉ノ商人、漸ク之ヲ造リテ火災ヲ免ルヽモノ多シ、次デ公家、武人、及ビ庶民ノ富有ナル者モ、亦之ヲ造ルニ至ル

第三食物　食物ハ米食ニシテ、一日ニ二食ナリ、飯ニ二樣アリ、甑ニテ蒸スヲ強飯ト云ヒ、釜ニテ煮ルヲ姫飯又厚粥トイフ、中古ノ頃、佛教盛ニ行ハレテ、肉食大ニ衰ヘタルガ、鎌倉時代ノ武士ハ好ミテ猪鹿ノ肉ヲ啖ヒ多數群集シテ飽食スルヿアリ、之ヲ宍戸市ト稱ス

武士ノ遊戯ニハ犬追物、流鏑馬、角力、遊獵等アリ、皆武事ヲ練習スルタメニス、又射藝ハ武人ノ最モ重ンスル所、常ニ之ヲ練習セリ

當時武人ノ風、勇剛ニシテ甚ダ氣節ヲ尚ヒ、名譽ヲ重ンス、故ニ若シ少シク之ヲ毀損スルヿアレバ、直チニ屠腹スルニ至ル、其ノ戰陣ニ臨ムヤ、敵ニ逢フテ我ガ系統姓氏ヲ名乘リテ刃ヲ交フ、進ムデ退カズ、身ヲ殺シテ以テ名ヲ辱カシメザルヲ力ム、是ヨリ後、武人罪アレバ主命ヲ下シテ切腹セシムルヿ行ハレタリ

第一三章　宗教

宗教ハ鎌倉時代ニ於テ最モ隆盛ヲ極メ、新派ノ興ルモノ相次ゲリ、即チ禪宗、淨土眞宗、法華宗、時宗等アリ

當時禪宗ニ二派アリ、臨濟宗トイヒ、曹洞宗トイフ、臨濟宗ハ僧榮西ノ弘ムル所ナリ、榮西ハ備中ノ人、年甫メテ十四、剃髮シテ叡山ニ上リ、台敎ヲ學ブ、仁安三年宋ニ至リ、天台敎ヲ學ビテ歸ル、文治三年再ビ宋ニ入リ、萬年寺ノ敝禪師ニ從テ禪宗ヲ受ク、禪宗ハ佛理ノ奧妙ニ徹セルモノニシテ、釋迦始メテ之ヲ迦葉ニ傳ヘ、迦葉ヨリ二十八傳シテ達磨ニ至ル、達磨支那ニ入ルニ及ンデ、禪宗頗ル行ハル、臨濟玄義ナル者アリ、禪ニ深ク、別ニ一派ヲ立ツ、其ノ後相繼キテ宋ニ至リ、懷敝ニ傳フ、懷敝ハ敝禪師ナリ、蓋シ禪學ノ盛ナリシハ、宋ノ時代ヲ以テ最トス、當時蘇東坡、邵康節、朱晦菴、陸象山等、皆禪ニ參セザルナシ、榮西、敝禪師ニ從學スル「六年、歸リテ始メテ禪宗ヲ弘ム、臨濟宗（臨濟玄義ノ一派ヲ臨濟宗ト云フ）是ナリ、賴家深ク之ニ歸依シ、爲メニ建仁寺ヲ建ツ

曹洞宗ハ僧道元ノ弘ムル所ナリ、道元、貞應二年ヲ以テ宋ニ入リ、如淨禪師ニ從テ曹洞宗ヲ學ブ、曹洞宗ハ六祖ノ傍傳ニシテ、其ノ傳承ノ間、洞山良玠、曹山耽章等アリ、一代ノ英俊ニシテ、深ク禪機ヲ得、之ヲ曹洞宗ト稱ス、道元、建長中歸朝シテ地ヲ越前ニ相シ、永平寺ヲ建ツ、時賴、時宗、貞時等皆之ヲ學ブ（建長五年宋ノ禪僧道隆來ル、時賴建長寺ヲ建テ道隆ヲ延キテ開山トス）

淨土宗ハ僧源空ナルモノアリ、美作ノ產ナリ、始メ天台ヲ學ビ、又黑谷ノ叡空ニ從テ名ヲ法然ト改メ、密乘ヲ受ク、晩ニ往生要集ヲ見テ悟ル所アリ、更ニ淨土惠念ノ宗ヲ立テ、吉水ニ居テ盛ニ之ヲ唱フ、死スル後、圓光大師ト謚ス、是ヲ淨土宗ノ開祖トス

一向宗ハ法然ノ弟子ニ親鸞アリ、京師ノ人、藤原有範ノ子ナリ、淨土宗ヨリ出テ、一向宗ヲ起シ、肉ヲ啖ヒ妻ヲ畜フ、其ノ狀俗人ニ異ナラス、時ニ承元元年

本願寺

ナリ、親鸞ノ女覺信、本願寺ヲ建テ、親鸞ヲ以テ開祖トス、今ノ東西本願寺ハ其ノ裔ナリ、明治維新ノ後、一向宗ヲ改メテ眞宗ト稱ス、此ノ宗ハ其ノ說ク所、卑近ニシテ俗ニ入リ易ク、止タ惠念念佛シテ安樂國ニ往生スト唱フ、故ニ其ノ信者最モ多ク、爾來彌ヨ隆盛ニ趣キ、殆ント天下ヲ風靡スル勢アリ、佛敎爲メニ一大變ヲ致スニ至レリ

法華宗

法華宗ハ僧日蓮始メテ之ヲ唱フ、日蓮始メ眞言ヲ學ビ、次テ諸宗ニ涉獵シ、又神道ヲ修ム、弘長元年始メテ南無妙法蓮華經ノ七字ヲ誦シテ一宗ヲ創立ス、日蓮英邁ニシテ剛膽、最モ血性ニ富ミ、盛ニ他宗ヲ駁擊ス、後甲斐ノ身延山ヲ開キ、弘安中池上ニ寂ス

時宗

時宗ハ僧一遍之ヲ創ス、一遍ハ伊豫ノ人ナリ、始メ村上天皇ノ御代ニ、僧空也ナル者、諸國ヲ周遊シテ念佛ヲ唱フ、空也念佛宗是ナリ、一遍始メ台敎ヲ學ヒ、又心ヲ淨土惠念ニ傾ケ、又西山ノ聖達ニ從テ他力本願ノ旨ヲ受ク、後ニ熊野ニ詣テヽ行住坐臥稱名ス、既ニシテ以爲ラク、一切衆生、六字ノ名號ニヨリテ佛化ス、廣ク之ヲ敎化スベシト、竟ニ空也ノ跡ヲ襲ヒ、諸國ヲ經歷シテ敎ヲ布ク、世之ヲ遊行上人ト稱ス、其ノ宗ノ創立ハ建治元年ニ在リ、藤澤相模ノ淸淨光寺ヲ以テ本山トス

普化

此ノ外、普化宗ナルモノアリ、僧覺心之ヲ始ム、覺心建長中入宋シ、普化禪師ノ風ヲ聞テ悟ル所アリ、歸朝シテ普化宗ヲ唱ヘ、尺八ヲ吹ク、虛無僧ハ皆此ノ宗ヨリ出ルモノトイフ

斯ノ如ク諸宗陸續トシテ興起シ、伽藍堂塔ノ建築少カラス、特ニ禪宗ハ武家ノ歸依セシ所ナルヲ以テ、當時最モ盛ンナリ、蓋シ禪學ハ膽識アル武人多ク之ヲ學ベルカ故ニ、主トシテ上流ニ行ハレ、淨土宗ハ卑近簡易ナルヲ以テ、廣ク下流社會ニ行ハレタリ

第十四章　農工商業

農業

鎌倉政府ハ最モ意ヲ民政ニ用ヒ、民其ノ堵ニ安ンセルガ故ニ、農業モ頗フル進歩シ、田地ノ拓ケタルモノ少カラズ、當時全國ノ田、總計九十四萬六千一百六町ニ及ベリトイフ

刀劍

當時工業中最モ進ミタルモノヲ刀劍業トス、建久中ニハ行平定秀アリ、承久中ニハ粟田口ノ久國、國安、國友、備前ノ則宗、信房、助宗等アリ、四條天皇ノ御代ニハ、備前長船ノ光忠、安忠、長光等アリ、長光晨モ精妙ニシテ出藍ト稱セラル、長船一流ノ鍛工タリ、建長中、來行國アリ、其ノ子ヲ國俊トイフ、之ヲ來一類ノ鍛工ト稱シ、多ク名刀ヲ作ル、後宇多天皇ノ御代ニハ粟田口吉光アリ、名劍ヲ鍛造ス、其ノ名頗ル高シ、吉光ノ晩年ニ正宗アリ、天下ヲ周遊シテ諸名工ノ家法ヲ問ヒ、其ノ伎精巧ヲ極メ、吉光ト齊シク稱セラル、又薩摩ニ波平行安アリ、波平鍛冶トイフ、此ノ外延壽國村、博多三郎左衛門正宗ノ弟子ニシテ左文字ノ乃ヲ作ル吉岡助吉（岡一文字ヲ作ル）鵜飼雲生等アリ、當時刀劍ノ需用盛ニシテ、武人皆名刀ヲ有スルヲ以テ無上ノ榮譽トス、故ニ鍛刀ノ伎益々精熟ス

甲冑

甲冑ノ製作モマタ精巧ヲ加ヘ、鎌倉ノ増田家、代々名工ヲ出シ、多ク著名ノ品ヲ製セリ

建築彫刻

建築彫工モマタ衰ヘズ、當時木工ノ妙手多キヲ奈良、京師トシ、伊豆、相模、武藏、安房之ニ次ク（飛彈國ハ木工多シト雖モ、大抵ハ木拙ナリト云）即チ國弘、宗方、大伴定弘、宗弘等アリ、佛工ニハ康朝、成朝、運慶、快慶、康慶等アリ、彫刻スル所ノ佛像名品多シ、革工ニハ爲直アリ、太鼓ヲ張ルヿヲ以テ其ノ名高シ

陶器

貞應中加藤藤四郎景正、僧道元ニ從テ宋ニ至リ、陶法ヲ學ブ、安貞中歸リテ尾張瀬戸ニテ陶器ヲ製ス、之ヲ古瀬戸トイフ、第二世藤四郎、始メテ黄色釉ヲ發明ス、其ノ製出スルモノ之ヲ眞中古トイフ、第三世藤次郎美濃金花山ノ土ヲ取テ陶器ヲ製シ、黑色釉ヲ施ス、第四世藤四郎破風ト名ク

漆

ル陶器ヲ製出ス、弘安中、近江長野村ニ於テ始メテ信樂燒ヲ製出シ、建武中伊賀ニ於テ伊賀燒ヲ製出ス、其ノ窯法甚タ信樂燒ト相似タリ

漆器類ハ天慶以來大ニ衰微シタリト雖モ、未ダ全ク滅絶セシニ非ス、即チ漆工ニハ清光、守近、守氏、吉長、友重、道性、正圓、友長、法阿、國友、隨親、吉行等アリ、貝摺工ニハ、安弘、景長アリ、螺細工ニハ重直、貞清、守貞、貞仲、末次等アリ、其ノ製出スル所ノモノ、鎌倉雕、越前雕、小田原雕アリ、又根來寺ノ僧徒等カ製出セル根來塗、吉野ニテ製セル吉野根來等アリ

商

此ノ時代ニモマタ多少支那トノ貿易行ハレタルカ如シ、然レモ元兵來寇以來ハ全ク廢絶シタリトイフ、內國ノ商賣ヲ見ルニ、既ニ仲買商ノ業モ起リ、又行賣ト稱シ、物ヲ持チ歩キテ商フト、坐ナガラ商フトノ二風アリ、座ナガラ商フ中ニモ、立賣、店賣ノ二アリ、立賣トハ、大道中ニ貨物ヲ持出シテ商フヲイフ鎌倉ニハ九ケ所ニ市ヲ開キテ、絹ノ座、炭ノ座、米ノ座、檜物ノ座千朶堂ノ座、相場ノ座（又ハ紙ノ座トモイフ魚ヲ賣ル）馬商ノ座アリ、之ヲ七座ノ店ト稱ス、又手買振賣アリ、當時京師及ヒ鎌倉ノ商人中ニ物ヲ質ニ取リテ錢ヲ貸セルモアリシトイフ

第八篇

近世史（第二）

第二期　足利時代

第壹章　足利氏ノ覇業、尊氏

建武中、朝廷兵ヲ擧ケテ北條氏ヲ亡シ玉ヘルモノハ、止ダ皇室ノ陵遲、鎌倉ノ强梁ヲ憤ヲセ玉ヘルニ由ルノミ、而シテ諸國ノ武人、朝廷ニ歸從シ幸ツレルモ、亦止ダ功ヲ立テヽ顯賞ヲ得ントセルノミ、兩ツナガラ毫モ至誠ヲ推シテ民生ノタメニシ、頑兇ヲ除キ、良政ヲ布クノ意ナカリシナリ、嗚呼私情私慾斯ノ如クニシテ天下ヲ謀ル、假令一旦事成ルト雖ヒ、安ゾ之ヲ久シキニ保ツヲ得ンヤ、況ンヤ朝廷ノ擧指、百事當ヲ失シ、賞罰正シカラズ、民ヲ窘メテ奢侈ニ耽リ、粃政百出セルニ於テオヤ、故ニ建武中

足利氏ノ覇業尊氏

興ノ業忽チニシテ墜チ、朝廷實權ナク、臣下節操ナク、海內紛擾シテ毫モ統スル所ナシ、是ニ於テカ梟雄隙ニ乘ジテ風ヲ搖キ雲ヲ起シ、竟ニ天下ヲ竊取セリ

足利氏ノ世系

足利氏ハ其ノ先キ源義家ニ出ヅ、義家ノ子義國、二子アリ、長義重、新田氏トナリ、次義康、足利氏トナリ、義康ノ子義兼、北條時政ノ女ヲ娶リテ義氏ヲ生ミ、義氏、康氏ヲ生ミ、康氏、賴氏ヲ生ム、皆北條氏ノ出ナリ、賴氏、家時ヲ生ミ、家時、貞氏ヲ生ミ、貞氏マタ北條氏ヲ娶リテ尊氏ヲ生ム、尊氏始メノ名ハ高氏、又太郎ト稱ス、元弘ノ役ニ北條氏ニ反シテ勤王ノ師ニ合シ、六波羅ヲ攻メテ之ヲ陷ル、當時尊氏家聲最モ高ク、武人ノ間ニ重ンゼラル、後醍醐天皇特ニ御望ヲ囑サセ玉ヒ、佐兵衛督ニ任シ、從四位ニ叙シ、內昇殿ヲ許サセ玉フ、次テ從三位ニ叙シ、武藏守ヲ兼ヌ、天皇又御諱ヲ賜ヒ名ヲ尊氏ト改メシメ玉フ、尊氏ノ弟直義、又智略アリ、兄ヲ助ケテ畫策スル所多シ

尊氏ノ大志

此ノ時ニ方リ、護良親王及ヒ新田義貞等深ク尊氏ヲ憎ミ、必ラズ之ヲ誅セント欲ス、藤原藤房、楠木正成、名和長年等モ亦尊氏直義ノ姦詐ヲ憎ム、尊氏自ノ危キヲ恐レ、先ツ淮后ニ媚事シテ其ノ禍ヲ緩フス、始メ尊氏大志アリ、權署ニ長ズ、其ノ北條氏ニ叛スルヤ、必ラズシモ勤王ノ素志アルニ非ズ、止ダ天下包有ノ志ヲ成サントスルノミ、既ニシテ建武中興ノ政其ノ所ヲ得ス、諸國ノ武人多ク朝廷ヲ怨ミ奉ルヲ見テ以爲ラク、此ノ機乘ズベシト、北條時行兵ヲ鎌倉ニ擧ルニ及ヒ、自カラ請フテ之ヲ討平ス、天皇其ノ功ヲ賞シ、遙カニ從二位ヲ授ケ、且ツ師ヲ班サンヿヲ命シ玉フ、

尊氏勅ヲ奉ス

尊氏勅ヲ奉セス、竟ニ賴朝ノ故跡ニ依リテ府ヲ開キ、自カラ征夷大將軍關東管領ト稱シ、有功ヲ擢賞シ、降附ヲ納撫ス、武人大ニ喜ヒ、北條氏ノ故黨モ亦來歸ス、時ニ建武二年十月ナリ、尊氏マタ義貞ノ邑、關東ニ在ルモノヲ奪フテ將士ニ分與シ、檄ヲ發シテ西南諸道ノ兵ヲ徵シ、且ツ義貞ヲ誅セント請フ、蓋シ義貞ノ聲望頗ル高ク、一族武勇ノ輩多ケシテ、到底足

尊氏ノ權計

利氏ノ下風ニ下ツ可ラサルノミナラス、却テ全力ヲ注射シテ尊氏兄弟ヲ亡ホリントスルカ故ニ、先ツ之ヲ除カント欲スル也、是ニ於テ廷議尊氏ノ官爵ヲ削リ、義貞ニ節刀ヲ賜ヒ、尊良親王ヲ奉シテ之ヲ討タシム、直義諸將ト戎裝シテ尊氏ニ見エ、兵ヲ發シテ官軍ヲ防カント請フ、尊氏曰ク「王師來ラハ情ヲ陳シ、身ニ罪ナキヿヲ明カニセンノミ、敢テ王師ニ對シテ弓ヲ彎カス」ト、色ヲ作シテ起ツ、直義等錯愕ス、諸將相議シテ兵ヲ發シ、官軍ト戰フ、利アラス、尊氏建長寺ニ入リ、髮ヲ削リテ僧ト爲ラントス、左右諫メテ止ム、既ニシテ直義等兵ヲ喪フテ歸ル、府門皆閉ツ、直義謀リテ綸旨ヲ僞作シ、諸將ヲシテ建長寺ニ至リ、謂ハシメテ曰ク「綸旨必ラズ及ヲ窮追シテ嚴ニ之ヲ捕捉セントス、公假令桑門ニ入ルモ、豈免ルヽヲ得ンヤ、請フ更ニ家門ノ計ヲ思ヘ」尊氏、奮然トシテ曰ク「生死汝等ト俱ニセン」ト道服ヲ脫シ、錦ノ直垂ヲ着テ出ツ、兵士大ニ喜フ、衆皆髻ヲ絕テ尊氏ト同フス、逃亡ノ士卒之ヲ聞テ爭ヒ還ル、一日間ニ三十萬ト號ス、進ンテ官軍ト竹下ニ戰フテ之ヲ敗リ、北ルヲ追フテ西上ス、天下ノ武人等翕然トシテ之ニ應シ、勢威甚ダ熾ナリ

延元元年

延元元年尊氏竟ニ官軍ヲ敗リテ京師ニ入ル、既ニシテ義貞正成等謀ヲ合セテ來リ攻ム、尊氏大敗シ、諸將ヲ分遣シテ諸國ニ駐ラシメ、海路九州ニ逃ル、菊池武敏來リ攻ム、邀テ之ヲ敗リ、其ノ居城ヲ拔ク、九州悉ク降附ス、乃チ九州ヲ發シテ嚴島ニ抵リ、禱祀スルヿ三日、始メ尊氏ノ京師ヲ陷ルヽヤ、後伏見天皇ノ胄胤ヲ奉セント欲シテ果サス、其ノ敗レテ兵庫ニ走ルニ及ヒ、以爲ラク我カ軍屢々敗ルヽハ王師ニ抗スルヲ以テナリ、吾將リニ光嚴院ノ院宣ヲ請ヒ、兩帝ヲシテ國ヲ爭ハシムヘシト、人ヲ遣ハシテ之ヲ請ハシム、是ニ至テ院ノ勅書至ル、尊氏悅テ曰ク「我カ事成ラン」ト、乃チ錦旗ヲ製シ、四國九州ノ兵ヲ合セ、自ラ舟師七千隻ヲ率ヒ、直義二十萬騎ニ將トシテ海陸竝ビ進ミ、竟ニ義貞正成ノ兵ヲ敗リテ京師ニ入リ、光嚴院ノ御弟豐仁親王ヲ御位ニ即カセ奉ル、光明天皇是ナリ、延元三

光明天皇ヲ立

征夷大將軍ニ任ス

年北朝曆應元年義貞北陸ニ戰死シ、南朝ノ勢日ニ盛マル、光明天皇、尊氏ヲ征夷大將軍ニ任シ、正二位ヲ授ケ玉フ

尊氏ノ征夷大將軍ニ拜スルヤ、直義副將軍トナル、時ニ高師直兄弟、尊氏ニ親任セラレテ幕府ノ執事タリ、直義ト權ヲ爭ヒ、竟ニ尊氏ヲ勸メテ直義ヲ討タシム、諸將皆二分シ、爭戰互ヒニ勝敗アリ、既ニシテ師直殺サレ、尊氏直義和ヲ講ス、然レドモ內平カナルヿ能ハス、直義竟ニ北陸ニ奔リ、又鎌倉ニ遯ル、尊氏自カラ將トシテ直義ヲ討チ、鎌倉ニ入リテ直義ヲ酖殺ス、實ニ正平六年北朝觀應二年ナリ、時ニ新田義興等兵ヲ擧ケ、其ノ勢頗ル熾ナリ、尊氏ノ子直冬マタ南朝ニ合シ、義詮尊氏ノ嫡子ヲ京師ニ攻メテ之ヲ走ラス、尊氏、義興等ヲ討テ之ヲ走ラシ、基氏尊氏ノ子ヲ鎌倉ニ留メテ關東管領トス、諸軍ヲ率ヒテ京師ニ入ル、十三年北朝延文三年癰ヲ病テ薨ス、年五十四、尊氏器宇弘裕ニシテ遠畧アリ、事ヲ擧クルヤ緩慢及バザルカ如シト雖ドモ、成算既ニ定マリ、施設皆決ス、時々權詐ヲ出シテ其ノ際ヲ窺ハシムルナク、人ニ任シテ疑ハス、金帛ヲ視ルヿ土芥ノ如ク、之ヲ將士ニ分與シテ毫末モ吝ム所ナシ、常ニ賴朝ノ治蹟ヲ慕ヒ、曾テ僧是圓及ヒ玄慧ニ命シテ憲令十七條ヲ定メシム、之ヲ建武式目トイフ、始メ順ヲ犯シテ兵ヲ擧ゲ、天下人心ノ服セサルヲ慮カリ、陽ニ光明天皇ヲ尊ミ奉リ、事必ラズ稟請ス、志ヲ得ルニ及ヒテマタ忌憚スル所ナシ、天皇ヲ視ルヿ辨髮ノ如ク、廢立總テ其ヲニ在リ、天下ノ國郡ハ神祠ノ封戶、公卿ノ食邑ヲ問ハス之ヲ强奪シテ盡ク將士ニ分與シ、五十分ノ一ヲ賦課シテ軍費ヲ資ク、天皇ノ供御闕乏スト雖ドモ顧ミズ、一門顯列スルモノ四千餘人、守護吏タルモノ嗾ケテ數フ可ラス、故ニ公卿其ノ陵侮ヲ蒙ムリテ、反テ陪臣ニ諂媚シ、衛府北面ノ士マデ、悉ク關東ノ語言服裝ヲ學ヒテ以テ其ノ嘲笑ヲ免カレンヿヲ希フニ至ル

建武式目

將軍ト武人トノ關係

天下ノ武人朝廷ヲ恨ムヤ、其ノ賞祿ナカリシヲ恨ムナリ、其ノ足利氏ニ服スルヤ、亦止ダ賞祿ヲ得ント欲スルノミ、即チ足利氏ハ天下ノ武人ニ

與フルニ賞祿ヲ以テシ、彼等ノ慾心ヲ飽カシメザル可ラズ、故ニ尊氏ハ武人ノ戰功アルモノニハ、厚ク土地ヲ賞賜シテ毫モ吝ム所ナシ、故ニ將十ノ領スル所數州ニ跨リ、其ノ土地兵馬ノ力却テ將軍ニ下ラザルモノアルニ至ル、是ニ於テカ將軍ノ勢力ハ以テ天下ノ武人ヲ制壓スルニ足ラズ、武人等皆其ノ志ヲ逞フシテ、少シク慊ラザル所アレバ則チ兵ヲ擧ゲテ將軍ニ叛シ、或ハ南朝ニ結ビ、或ハ數家相結ヒテ以テ將軍ト戰フ、將軍父子兄弟亦相鬩ギ（尊氏ノ弟直義、子直冬、赤松圓心、山名時氏、細川清氏、桃井直常等、皆相鬩ギ、皆父兄ト抗戰セリ）君臣相戰フ（直常等、皆相鬩ギ、皆尊氏兵ヲ擧ゲシヨリ二十餘年、干戈一日モ動カザルヿナシ、而シテ此ノ輩ノマタ降ルヤ、將軍能ク之ヲ遇シテ却テ其ノ歡心ヲ失ハザランヿヲ恐ル、故ニ武人ノ反覆常ナク、其ノ叛ク和スルトノ權、一ニ彼ニ在リテ將軍ハ毫モ之ヲ制スルヿ能ハズ、蓋シ當時若シ武人ノ不逞ヲ糺シ、賞罰ヲ明カニセバ、彼ノ輩永ク南朝ト結ブノ患ヒアリ故ニ足利氏ノ斯ノ如クセルモノ、小怨小禍ヲ忍ビテ以テ眼前ノ大敵（南朝）ニ當ルノミ、蓋シ已ムヲ得ザルニ出ツ

尊氏直義ノ雄圖、眞ニ一世ニ超絶ス、固トヨリ義貞輩ノ比ニ非ズ、然レドモ其ノ人物低ク、止ダ纔カニ勢ヲ見、機ヲ察スルヿヲ能クスルノミ、未ダ機ヲ制シ、勢ヲ制スルノ手腕ナシ、故ニ天下紛々擾々トシテ毫モ統一スル所ナシ、日ツ足利氏ノ天下ヲ取ルヤ、マタ民生ノタメニセルニ非ザル也、權智術策、皆私情ヲ濟シ、私功ヲ遂クルカタメニ非ザルハナシ、故ニ至誠以テ德政ヲ行フナク、蒼生ノヿハ殆ント全ク之ヲ眼外ニ措ケリ、嗚呼是レ止ダ天下ヲ竊メルノミ曷ゾ能ク久シキヲ得ンヤ宜ナリ、尊氏以後十餘代、天下常ニ紛々擾々トシテ更ニ稱スルニ足ルモノナキヿ

（足利氏ハ天下ヲ竊メリノ）

第二章　南北朝

延元元年尊氏、京師ニ敗レテ九州ニ走ルヤ、赤松圓心ノ言ニ隨ヒ、密カニ光嚴院ニ請ヒ奉リテ宣旨ヲ得、錦旗ヲ立テヽ東上ス、後正成、義貞等ヲ兵庫ニ敗リテ京師ニ入ルニ及ビ、光嚴院ヲシテ再ビ御位ニ即カシメ奉ツル、時ニ六月二日ナリ、尚ホ建武ノ年號ヲ用フ（延元ハ南朝ノ年號ナリ）越テ八月十五日、尊氏後伏見天皇ノ皇子豐仁親王ヲ御位ニ即カセ奉ル、光明天皇是ナリ、是ニ於テ南北朝分ル、南朝ハ天下三分ノ一ヲ有シ玉ヒ、北朝ハ三分ノ二ヲ有セヲル、而シテ神器ハ南朝ニ在リ

南北朝ノ分立

歴代ノ典制、天皇ハ必ス三種ノ神器ヲ傳ヘ玉ハザル可ラズ、故ニ世ノ史家多ク南朝ヲ以テ正統トス、然レ𪜈若シ實權ノ有無ヲ以テ之ヲ論ゼバ、南北朝共ニ相似タリトイハザル可ラズ、蓋シ南朝ハ吉野ニ偏安シ玉フノミ、其ノ御勢ハ固ヨリ微々トシテイフニ足ラス、北朝ハ強大ナル足利氏ニ擁サレ玉フト雖モ、尚ホ虛位ヲ擁シ玉フノミ、其ノ命令廣ク天下ニ行ハレシニ非ズ、然リト雖モ此ノ兩朝、共ニ我ガ天日嗣タリ、漫リニ輕ス可ラズ、後遂ニ兩統一ニ歸シテ、綿々神器ヲ傳ヘサセ玉フ

足利義滿ノトキニ至リ、執事細川頼之賢良ナリ、心ヲ傾ケテ義滿ヲ補佐ス、義滿聰明ニシテ頗ル武畧アリ、後龜山天皇ノ元中九年ハ北朝後小松天皇ノ明德三年ニ當レリ、此ノ年十月義滿、大内義弘ヲシテ南北合一ノ事ヲ聞ラシム、曰ク「南朝ノ車駕京師ニ還幸シ、三種ノ神器ヲ北朝ニ傳ヘ給ハヽ、太上天皇ノ尊號ヲ上ツリ、皇子ヲ以テ後小松天皇ノ儲貳ニ立タセ奉リ、兩統更々立タセ玉フ」ト雖ホ北條氏執權ノ時ノ如クスベシト、此ノ時ニ方リテ楠木氏既ニ亡ビ（正勝流浪シ、正元京師ニ入テ義滿ヲ刺サントシ、事成ラスシテ死ス、是ニ於テ楠木、和田ノ一族多ク亡ブ）南朝ノ境土日ニ蹙マリ諸國勤王ノ兵マタ振ハス、天皇依テ義弘カ請ヲ容レサセ玉ヒ、十二月二日吉野ノ行宮ヲ出御シテ、嵯峨大覺寺ニ入ラセ玉フ、儀仗總テ行幸ノ儀ニ同シ、義滿以爲ラク、是レ降王ノ禮

ニ合ハズト、使ヲシテ之ヲ問ヒ奉ラシム、天皇宜ハク「三種ノ神器朕ノ手ニ在リ、故ニ朕ハ正統ノ天子タリ、今和約ヲ許ス、朕宜シク今帝（後小松天皇）ヲ以テ子ト爲スベシ、今帝亦朕ヲ父トセヲレバ則チ神器ヲ傳フベシ、然レドモ未ダ神器ヲ傳ヘズ、行幸ノ儀仗ヲ用ヒズシテ何ヲカ用ヰン」ト、義滿悅バズ、佐々木滿高之ヲ諫ム、義滿乃チ滿高ヲ遣ハシテ和解ノ事ヲ主ラシム、三日天皇三種ノ神器ヲ後小松天皇ニ傳ヘサセ玉フ、依テ太上皇ノ璽號ヲ奉ル、初メ後醍醐天皇ノ吉野ニ移ラセ玉ヒシヨリ、茲ニ至テ二朝五十七年ニシテ南北朝一統ス御系統左ノ如シ

南朝

御名	御父	御在位年間	年號
後醍醐天皇	御宇多天皇	四	延元建武
後村上天皇	後醍醐天皇	三〇	興國正平
後龜山天皇	後村上天皇	二三	建德文中天授弘和元中

北朝

御名	御父	御在位年間	年號
光嚴天皇	御伏見天皇	（三月）	建武
光明天皇	後伏見天皇	一三	建武暦應康永貞和
崇光天皇	光嚴天皇	三	貞和觀應
後光嚴天皇	光嚴天皇	二〇	文和延文應和貞治應安
後圓融天皇	後光嚴天皇	一一	應安永和康暦永德
後小松天皇	後圓融天皇	一〇	永德至德喜慶康應明應

太上天皇嵯峨ヨリ御上洛、禁中ニ留ラセ玉フ、十餘日、遊宴歡樂ヲ盡サセ玉フ、義滿封戸ヲ獻シ、舊南朝ノ公卿等、マタ悉ク封邑ヲ受ク、既ニシテ上皇御落飾アリ、金剛心ト號サセ玉フ、世稱シテ小倉殿ト申シ奉ル、後小松天皇御位ヲ皇子稱光天皇ニ讓ラセ玉ヒ、稱光天皇崩御ノ後、後花園天

皇北朝崇光天皇ノ御曾孫ノ御位ニ即カセ玉フニ及ビ、舊南朝ノ遺臣等、前約ノ違フヿヲ咎メテ屢々兵ヲ起ス、皆克タズシテ平グ、是ニ於テ北朝ノ系統永ク天位ヲ有サセ玉フ（北朝ノ系統ヲ天位ヲ有セモ）

第三章　足利義滿

足利氏世々暗庸ノ主多シ、但ダ其ノ傑出セルヲ義滿トス、蓋シ義滿ハ足利將軍中ニ在テ、鐵中ノ錚々タルモノナリ、故ニ當時紀綱稍々振張シ、將軍ノ威頗ブル強ク、足利時代中最モ盛時ト稱セラル

義滿ハ義詮ノ子、尊氏ノ孫ナリ、正平二十二年（北朝延文三年）義詮薨スルニ及ンテ嗣キ立ツ、年甫メテ十歲、細川頼之管領トナリ、心ヲ傾ケテ之ヲ輔導ス

天授元年義滿從三位ニ叙セラレ、翌年權大納言ニ任ス、此ノ歲室町（京都）ニ新第ヲ造リテ徙リ居ル、世ニ花御所ト稱ス、是ヨリ將軍ヲ呼ンデ室町家トイフ、六年從一位ニ叙セラレ、弘和三年淳和奬學兩院別當源氏長者トナル、是ヨリ先キ久我氏世々源氏長者タリ、是ニ至テ足利氏ニ屬ス（源氏長者）

時ニ山名氏清强梁ニシテ動モスレバ將軍ニ服セズ、其ノ所領十州ニ跨ルヲ以テ、世呼ンテ六分一公トイフ、明德二年叛シテ京師ヲ犯ス、義滿自カラ將トシテ之ヲ邀ヘ擊チ、氏清ヲ擒ニシテ之ヲ誅シ、其ノ領地ヲ分割シテ諸將ニ賜フ、之ヲ明德ノ役トイフ、始メ尊氏義詮ノ時、諸侯强大ニシテ將軍制スルヿ能ハズ、而シテ其ノ叛服常ナク、將軍マタ之ヲ正スヿナシ、義滿ニ至テ山名氏ヲ處スル頗フル嚴、毫モ假借スル所ナシ、故ニ是ヨリ後、諸侯ノ將軍ニ對スルマタ前日ノ如クナラズ（六分一ハ山名氏清所領ノ明德ノ亂）

義滿マタ頼之等ノ謀ヲ用ヒテ南北朝ヲ合一ス、始メ南朝蕞爾タル彈丸黑子ノ地ニ在リト雖モ、正順ノ皇室其ノ首トナラセ玉ヒ、忠義ノ臣之ヲ護衛シテ更ニ屈スルヿナク、諸國不逞ノ徒屢々起テ之ニ應ジ、足利氏ノ（足利氏ノ大思惟）

門臣下ト雖ド、少シク不平ナルアレハ則チ南朝ニ黨附ノ將軍ヲ攻ム、故ニ南朝ハ實ニ足利氏ノ最モ恐ルベキ强敵タリシナリ、義滿ニ至テ之ヲ北朝ト一致セシメ奉ツリ、足利氏ノ大患正ニ絕ツ、是ニ於テ其ノ臣下ヲ處スル彌ヨ果斷嚴正ヲ加フ

大內義弘ノ叛

應永六年大內義弘叛ス、義弘、周防、長門、石見、筑前、和泉、紀伊等ヲ領シ、勢威頗ブル大ナリ、義滿曰ク「彼レ兵ヲ輝カス三十餘年、皆我カ力ナリ、山名氏清ノ强ヲ以テスト雖ド、我レ一戰シテ之ヲ滅ス、況ンヤ彼レ何ゾ能ク爲リン」ト、改メテ之ヲ誅ス、是ニ於テ諸將皆畏服ス

公方

義滿薨

是ヨリ先キ應永元年、義滿太政大臣ニ任ス、天下稱シテ公方トイフ、十五年五月薨ズ、年五十一、鹿苑院ト稱ス

武家式滿

義滿始メ細川頼之、今川貞之等ヲ用ヒ、規畫スル所多シ、外ハ强敵ヲ絕チ、豪族ヲ滅シテ威武ヲ振ヒ、內ハ官職ヲ新定シテ紀綱ヲ張ル、應永二年武家禮式ヲ作リ、又三職七頭ヲ置キ、斯波細川、畠山ノ三家ヲ三職トシテ執

三職七頭

事別當トシ、山名、一色、赤松等ノ四家ヲ侍所別當トシテ京師奉行トナシ、伊勢氏ヲ奏者トナシ、又小笠原、武田ノ二家ヲ弓馬ノ禮式奉行トナシ、兩吉良、今川、渋川ノ四家ヲ武者頭トス、之ヲ七頭トイフ

義滿ノ驕慢

然レドモ義滿ハ驕慢ノ主ナリ、故ニ失擧秕政頗ル多シ、曾テ自カラ太政大臣タランヿヲ請フ、朝議之ヲ難ズ、義滿怒テ曰ク「天皇ハ我カ家ノ立ツル所、若シ我カ請ヲ容レラレスンハ則チ我レ天子トナリ、細川、畠山等ヲ擧ケテ攝家清家トナサンノミ」ト、應永四年三層閣ヲ北山ニ作リ、金泥ヲ以テ柱戶廂壁ヲ塗ル、時人之ヲ金閣ト稱ス、義滿徙リテ之ニ居リ、日夕酣娛シテ肯テ朝覲セズ、有司文書ヲ抱キテ來リ呈署スルニ至ル、其ノ驕慢想フベシ、義滿マタ僧祖阿、商人肥富等ヲ明ニ遣シテ好ヲ通ズ、明主玉璽辨服ヲ義滿ニ贈リテ曰ク「朕、汝ヲ封ジテ日本國王トス」ト、義滿大ニ喜ブ、薨スルニ及ヒ明主恭獻王ノ謚號ヲ贈ル、蓋シ義滿晚年奢侈ヲ窮極シテ、財用窮乏ス、乃チ明ニ通ジテ多ク彼レノ錢幣ヲ得、以テ其ノ費ヲ支フトイ

義滿明封ノ冊ヲ受ク

義滿ノ失敗

フ、醜態國家ヲ辱カシム、之レヨリ甚シキハナシ

夫レ京師ハ、其ノ地形風俗、共ニ覇府ヲ置クニ適セズ、然レドモ尊氏ノ京師ニ在リシハ、賊ニ已ムヲ得サルニ出ヅ、卽チ南朝吉野ニ在リ、將軍京師ヲ離ルヽヿ不利ナリシガ故ナリ、然レドモ南北朝統一スルニ至リテハ、足利氏ノ京師ニ患フベキモノ無シ、故ニ覇府ヲ鎌倉ニ移シ、東國ヲ以テ其ノ根本トシ、形勝ニ據テ以テ海內ヲ制スルヲ可トス、然ルニ義滿之ヲ爲サズ、依然京師ニ在テ虛爵ヲ貪ボリ、奢侈ニ耽リ、代々ノ將軍幕臣等、亦皆京師文弱ノ風ニ侵染シ、漸ク武勇ノ氣ヲ銷盡ス、而シテ關東先ヅ亂レテ、足利氏根本ノ地ナキニ至ル、蓋シ尊氏前ニ機ヲ制シ勢ヲ導クヿ能ハズ、義滿後ニ機ヲ察シ勢ヲ見ルヿ能ハザリシカ故也

關東管領

關東管領ハ、始メ基氏ノ封ゼラルヽ所タリ、其ノ府治鎌倉ニアリ、部下マタ强勇ノ士多ク、其ノ權勢頗フル高シ、義滿三職七頭ヲ置クニ及ヒ、後鎌倉モ亦之ニ倣ヒ、管領ヲ鎌倉將軍ト稱シ、家老上杉氏ヲ管領トイヒ、千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、宇都宮、那須ノ諸家ヲ屋形トイフ、是ニ於テ京師ト鎌倉ニ兩將軍アリ、實權分裂スルヿ茲ニ胚胎ス、而シテ鎌倉將軍ハ後ニ上杉管領ト爭ヒ、管領勝テ將軍ノ權勢漸ク衰ヘ、次テ上杉氏マタ扇谷、山內ノ二家ニ分レテ、東國大ニ亂レ、兩上杉竟ニ北條早雲ノタメニ破ラレテ、鎌倉ハ京師ヨリモ早ク滅亡ス

義滿

義滿ヨリ五傳シテ義政（義滿孫）ニ至ル、義政亦奢侈ヲ極メ、別業ヲ東山ニ起シ、銀閣ヲ築キテ以テ金閣ニ擬ス、應仁ノ亂以後、府庫空虛トナルモ、義政尙ホ華奢ヲ衒ヒ、茶道ヲ好ミテ古器珍寶ヲ愛翫ス、曾テ花御所ノ甍ニ錢六十萬緡ヲ費シ、高倉御所ノ障子一間ニ二萬錢ヲ投セリトイフ、是ニ於テ上下相率ヒテ風ヲ爲シ、庶民ノ窮弊正ニ極マレリ

第四章　應仁ノ亂

足利氏十五代、戰爭曾テ絶ユルトキナシ、而シテ應仁ノ亂ヲ以テ其ノ最モ大ナルモノトス

始メ義滿、三職七頭ノ制ヲ立テシヨリ、此ノ輩皆私意ヲ逞フシテ政權ヲ恣ニス、後ニ至リ細川、山名ノ二家最モ強大ナリ、義政ノ時ニ至リ、細川勝元管領（即チ執事別當）タリ、山名宗全侍所別當タリ、勝元ハ宗全ノ婿ナリ、始メ子ナキヲ以テ宗全ノ子ヲ養フテ嗣子トス、既ニシテ勝元ノ夫人男ヲ生ム、勝元卽チ養子ヲ出シテ僧ト爲ス、宗全是ヨリ勝元ヲ怨ムヿ甚シ、此ノ時ニ當リ、義政マタ子ナシ、其ノ弟義視ヲ以テ嗣トス、其ノ後義尙生ルヽニ及ビ、義政之ヲ立テヽ嗣ト爲サント欲シ、宗全ヲシテ之ヲ援ケシム、宗全之ニ應ジテ以テ勝元ノ權ヲ殺ガントス、當時畠山、斯波ノ二家マタ內爭アリ、畠山政長ハ政就ト相爭ヒ、斯波義廉ハ義敏ト相爭フ、政長、義敏ハ勝元ニ賴リ、政就義廉ハ宗全ニ依ル、是ニ於テ二人ノ隙益々甚シ

細川勝元及ビ山名宗全

應仁元年勝元宗全共ニ兵ヲ起シテ相戰フ、勝元ハ其ノ一族元春政之ト領地攝津、丹後、淡路、阿波、讚岐、土佐、備中、參河ノ兵ヲ徵シ、政長ハ河內、紀伊、越中ヲ以テシ、義敏ハ和泉ヲ以テシ、京極持淸ハ近江ノ半、飛彈、出雲、隱岐ヲ以テシ、赤松二郎ハ、播磨、備前、美作ヲ以テシ、武田國信ハ若狹、安藝ヲ以テシ、赤松政則ハ加賀ヲ以テシ、皆之ニ屬ス、其ノ兵二十二州ノモノ十六萬餘アリ、宗全ハ其ノ族教幸教淸ト共ニ但馬、因幡、播磨、伯耆、石見、備前、美作ノ兵ヲ發シ、義就ハ大和、河內、紀伊ノ故黨ヲ以テシ、義康ハ越前、尾張、遠江ヲ以テシ、畠山義純ハ能登ヲ以テシ、六角高賴ハ近江ノ半ヲ以テシ、一色義直ハ丹波、伊勢、土佐ヲ以テシ、土岐成賴ハ美濃ヲ以テシ、皆之ニ屬ス、其ノ兵十一萬六千餘人ナリ、次デ大內政弘、周防、長門、豐前、筑前、安藝、石見ノ兵三萬人ヲ以テ來テ宗全ヲ助ク、勝元ノ兵ヲ東軍トイヒ、宗全ノ兵ヲ西軍トイフ、各々京師ノ第ニ據リ、勝元ハ天皇及ヒ義政ヲ陣中ニ奉ジ、宗

東軍西軍

宗全勝元共ニ

全ハ義視ヲ奉ジテ相戰フ、文武ノ第宅皆兵燹ニ罹リ、京師慘狀ヲ極ム、此ノ時ニ方リ九州大ニ亂レ、鎌倉マタ亂アリ、上杉顯定攻テ古河城ヲ拔キ、成氏鎌倉將軍走テ下總ノ千葉孝胤ニ依ル、越前尾張ニモ亦亂アリ、文明五年三月宗全卒ス（年七十四）其ノ五月勝元亦卒ス（年四十四）然レドモ兩軍ノ衆尙ホ散ゼズ九年ニ至テ始メテ散ジテ各々其ノ國ニ歸ル、應仁以來是ニ至テ十一年、京師蕩シテ荒野ノ如ク、公卿百官逃散シ、歷朝ノ典藉多ク兵火ニ罹ル、朝廷及ビ幕府ノ衰フル此ノ時ヨリ甚シキハアラズ

第五章　足利氏ノ滅亡

應仁ノ亂以後、足利氏全ク政權ヲ失ヘリトイフベシ、而シテ管領モ亦漸ク衰ヘテ陪臣權ヲ弄シ、恣ニ弑殺廢立ヲ行フニ至レリ

山名氏亨ノ

始メ山名持豐ノ卒スルヤ、山名氏振ハズ、細川氏獨リ管領ノ位地ヲ占ム、細川政元、畠山政長ト相爭フ、政長、義植ヲ奉ジテ屢々政元ト戰ヒ、遂ニ敗レテ死シ、義植出奔ス、政元乃チ義政ノ遺旨ト稱シ、義澄ヲ立テヽ將軍トス、既ニシテ政元其ノ臣香西元長ニ弑セラル、政元ノ臣三好長輝、細川澄元（政元ノ養子）ヲ奉シ、兵ヲ擧ケテ元長ヲ殺シ、澄元ヲ管領トシテ自カラ政ヲ執ル、是ニ於テ細川氏マタ漸ク微ナリ

細川氏亨ノ

大內義興

既ニシテ大內義興、前將軍義植ヲ奉シテ京師ニ入リ、義澄、澄元、長輝等ヲ追ヒ、義植ヲ復職セシメテ自カラ管領トナル、時ニ永正五年ナリ、後十一年、其ノ領國ニ亂アルヲ以テ西歸シ、細川高國代リテ管領トナリ、義植ヲ追ヒ、義澄（近江ニ）ノ遺子ヲ迎ヘテ將軍トス、義晴是ナリ、細川澄元ノ子晴元、南海ノ兵ヲ率ヒテ京師ニ入リ、高國ヲ殺シ、代リテ管領トナル、時ニ天文二年ナリ、晴元權ヲ弄シテ義晴ト隙アリ、天文十五年義晴ヲ逐ヒ、其ノ子義輝ヲ以テ將軍トス、晴元ノ臣三好範長マタ晴元ヲ逐ヒ、高國ノ子氏

細川高國

細川晴元

三好氏

綱ヲ迎ヘテ管領トナシ、自ラ政權ヲ專ラニス、範長老スルニ及ヒ、政ヲ松永久秀ニ委ス、久秀强悍ニシテ專横至ラサル所ナシ、竟ニ將軍義輝ヲ弑シ、義榮義榮ノ子ヲ立ツ、時ニ永祿八年ナリ、既ニシテ織田信長起リテ久秀ヲ亡ホシ、義輝ノ弟義昭ヲ奉シテ將軍トス、後義昭、信長ト隙アリ、天正三年備前ニ往キ、毛利元就ニ依リ、薙髮シテ昌山ト號シ、後マタ京師ニ還リ、慶長二年大坂ニ薨ス、年六十一、足利氏ノ血統全ク絶ユ

足利氏ノ血統絶ル

足利氏將軍表

代數	將軍父名	將軍職	在職年間	薨年齡
一代	尊氏 貞氏	自延元三年到正平十三年	二十年	正平十三年 五十二
二代	詮尊氏	同正平十三年至二十二年	十年	正平廿二年 三十八
三代	滿詮	同正平廿二年同應永元年	廿七年	應永十五年 五十一
四代	持滿	自永應元年至全三十年至卅二年到永享元年	三十年	正長元年 四十三
五代	量持	自應永三十年至全三十二年	三年	應永三年 十九
六代	教滿	同永享元年同嘉吉元年	十三年	嘉吉元年赤松滿祐ニ被弑 四十八
七代	勝教	同嘉吉元年同全三年	四年	嘉吉三年 十
八代	政教	同寶德元年同文明五年	廿五年	延德二年 五十六
九代	尚政	同文明五年同延德元年	十七年	延德元年 二十五
十代	植視	自延德二年至明應二年自永正四年至大永元年	十四年	大永三年 五十八
十一代	澄政	自明德三年至永正四年	十七年	文龜八年 三十二
十二代	晴澄	同大永元年同天文十五年	二十年	天文十九年 四十
十三代	輝晴	同天文十五年同永祿八年	二十年	永祿八年松永久秀ニ弑セラル 三十
十四代	榮冬	同永祿十一年同全	一年	永祿十一年 三十一
十五代	昭晴	同永祿十一年同天正元年	五年	慶長二年 六十一

義榮ハ永祿八年松永久秀ニ擁立セラレシカモ、將軍ニ任セラレ

シハ永禄十一年ナリ、又義持ハ義量ノ薨後、復タ職ニ就ケルヿ四年間、義植ハ一旦逐レテ職ヲ剝レシト雖モ、永正四年マタ復職シテ爾來十四年間職ニアリ

足利氏十五代、其ノ將軍タルヿ紀元千九百九十八年ヨリ二千二百三十三年ニ至ル、其ノ間二百三十餘年ナリ、然レドモ應仁ノ亂以後ハ、其ノ實權既ニ去リ、殊ニ戰國ノ時代ニ至リテハ、將軍職ハ止ダ一個ノ空職ナルノミ、毫モ實權アルニアラズ、蓋シ足利氏ノ時代ハ、常ニ紛々擾々トシテ、將軍ノ威令天下ニ普カリシヿハ殆ンド絶無ト謂テ可ナリ、蓋シ權術ヲ以テ天下ヲ竊ミ、毫モ生民ヲ恤マサルモノ、假令其ノ血統ノ繼續スルヿ長ヤモ、固トヨリ、斯ノ如クナラサル可ラサル也

第六章　足利時代ノ外交

上古ノ世ニ在テハ、既ニ盛ニ外國ト交通シ、タメニ文化ノ開進ヲ致セルコト多シ、降テ中古ニ至リ、唐朝トノ交通マタ盛ナリシカドモ、菅原道眞上表シテ遣唐使ヲ廢セシ以來ハ、外國トノ交通漸ク疏遠ナルニ至レリ、然レドモ近世王綱ノ廢弛セシヨリ、私ニ外國ト交通スルモノ復タ多ク、特ニ足利氏ノ時代ニ於テ最モ盛ナリ、蓋シ是ヨリ先キ、西南地方ノ豪族等、日本ノ使節ト稱シテ屢々外國ニ往來セルコトアリ、然レトモ未ダ通商貿易ノ道ヲ開クニ至ラズ、其ノ之ヲ開ケルハ、實ニ足利氏ノ時ヲ始メトス、義滿ノトキ、即チ應安元年ハ、支那ニ於テ明ノ大祖ノ洪武元年ニ當レリ、時ニ筑紫ノ賈商ニ肥富ナルモノアリ、航シテ明ニ到リ、歸リテ兩國交通ノ利ナルヿヲ、說ク、義滿之ヲ納レ、乃チ肥富ヲ使節トシテ始メテ信書ヲ通ジ、方物ヲ贈ル明ノ惠帝、禪敎ノ長老天倫一菴ナル者ヲ我ガ國ニ

來ラシメ、義滿亦人ヲシテ天倫一菴ヲ送リ還サシム、是ヨリ後、兩國ノ使節互ニ信符ヲ持シテ往來シ、連年絶ルヿナシ、既ニシテ惠帝國書及ヒ冠服ヲ贈リ、義滿ヲ封シテ日本國王トス、義滿其ノ封冊ヲ受ケテ明ノ臣ト稱シ、硯ド一屬國ノ如クス、始メ大古ノ頃、支那ト通ズルニ當リ、我ガ國書謙驕ヲ宜シテ、而メ彼ノ國書多ク不遜ナリ、「皇子曾テ日東ノ天子書ヲ日西ノ天子ニ致ス」ト記シ玉ヘルヿアリ、然レドモ彼ノ國ノ我ガ使節ヲ遇スルヤ、實ニ臣屬國ノ如クナリシトイフ、當時外交上ノヿ想フベキナリ、然リト雖モ未タ我レ自ラ屈シテ彼レニ臣從セシヿハアラズ、然ルニ義滿及然彼ノ國ノ封冊ヲ受ケ、甘ンシテ其ノ臣ト稱ス、是レ抑モ何事ゾヤ、蓋シ足利氏累世、大義名分ヲ辨ヘズ、倫理壞亂シテ君君タラズ、臣臣タラズ、父父タラズ、子子タラズ、而シテ義滿ニ至テハ、更ニマタ國体ヲ辱メ、足氏利ヲ汚ス、嗚呼是レ豈イフニ忍ビンヤ、或ハ曰ク「義滿ガ明ノ封冊ヲ受クル、其ノ名然ルノミ、其ノ實然ルニ非ズ、而シテ其ノ志、主トシテ多ク明ノ貨幣ヲ得テ、我ガ國用ヲ殷ハスニ在リシナリ」ト、然レドモ國体ヲ汚辱スルノ譏ハ竟ニ之ヲ免ル可ラズ、其ノ貨幣ヲ得テ我ガ國用ヲ殷ハスガ如キハ、則チ名ヲ損シテ實ヲ益スルニ似タリト雖モ、是レ足利氏得意ノ一小猾智ノミ、偶々以テ義滿ノ識量ナキヲ證スルニ足ル

義滿ノ死後、一時明朝トノ交通ヲ中止セリト雖モ、義敎ノ時ニ至リテ再ビ之ヲ開キ、銅錢硫黃等ヲ交易ス、爾來主トシテ貿易ヲ營ミ、屢々往來交通シテ、明ノ銅錢ヲ輸入ス、今尙ホ永樂錢ノ現存セルハ則チ當時ノ遺物ナリトイフ、此ノ時ニ方リ、朝鮮ノ貿易モ亦行ハレテ、佛經、朱註五經、四書、漏器等ヲ輸入セリ

朝鮮トノ貿易

應仁ノ亂以後、諸國大抵戰亂ノ地トナリショリ、姦雄不逞ノ徒、各々其ノ國ニ割據シ、自カラ外國ト交易シ、貿易ヲ營メルモノ少カラズ、中國、四國、九州地方ノ守護地頭ノ輩、恣ニ朝鮮ト交通シ、貿易ヲ營メルモノ凡ソ百二十餘家ニ及ビ、就中大友、少貳、島津、五島、松浦、宗、有馬、秋月、河野ノ諸家、其

外國トノ交通頻繁ナリ

ノ最タルモノニシテ、當時鹿兒島ノ如キハ、西洋ノ船舶輻輳セルヿアリ、蓋シ西洋人多ク印度及ビ南洋地方ニ至リ、竟ニ日本ニモ來レル也、特ニ宗氏ノ如キハ、世々對島ニ守タリシヲ以テ、諸家ノ支那朝鮮ニ交通スルモノ、多ク其ノ紹介ヲ經タリトイフ、當時幕府ニ於テ外國交通及ヒ貿易ノ事ヲ掌ルモノヲ唐船奉行トイヘリ、又琉球奉行アリ

唐船奉行及ビ琉球奉行

元龜天正以後ニ至テハ、諸豪傑ニ討タレタル諸國ノ武人、特ニ九州ノ武人等ハ、其ノ身ヲ寄スルコ所ナク、一葉ノ扁舟ヲ浮ベテ明ノ海岸ニ渡リ、浙江、福建ノ海濱ニ寇シテ其ノ民物ヲ掠奪セルモノ多々、明人之ヲ倭賊ト稱シテ最モ恐レタリトイフ、然レドモ曾テ大ニ彼ノ土地ヲ略シテ偉大ノ功ヲ樹テシモノハアラズ

倭賊ノ名明人ノ賊ヲ寇カ

第七章　政治

第一官制　京都コハ征夷大將軍ノ下ニ三管領ヲ置ク、斯波、細川、畠山ノ三氏世々之ニ任ジテ執權タリ、次ニ評定衆アリ、政治ニ參議シ、吏務ヲ行フ、又引付衆アリ、評定衆ト共ニ斷訟ノ事ヲ掌ル、宗族宿將ノ吏務ニ通スルモノヲ以テ之ニ任ス、又政所アリ、幕府ノ財政ヲ管シ、及ヒ錢穀田園ノ貸借賣買ニ關スル訴訟ヲ聽斷ス、又問注所アリ、簿記ヲ掌リ、詐譌遺失等ノ事ヲ審判ス、又侍所別當アリ、將士ヲ進退シ、幕府ヲ護衛シ、市街ヲ巡察シ、盜賊ヲ逮捕シ、諸犯者ヲ檢斷スルヿヲ掌リ、兼テ絞斬拷訊等ノ事ヲ行フ、又評定奉行、守護奉行アリ、評定奉行ハ政務ニ參與シ、公事ヲ奉行シ、守護奉行ハ諸守護職ニ關スル庶事ヲ掌ル、此ノ他、賦別奉行、訴訟奉行、檢使奉行、恩賞奉行等アリ、又諸士ノ品階ヲ定メテ大名衆、相伴衆、國持衆、外樣衆、伴衆、部屋衆、申次衆、及ヒ走衆トス

官制

評定衆

引付衆

政所

問注所

侍所別當

諸奉行

諸七ノ品階

管領探題守護

又鎌倉ニ管領ヲ置キ、九州ニ探題ヲ置キ、諸國ニ守護ヲ置ク、然レ𪜈紀綱紊亂シテ政令曾カラス、故ニ各職大抵ハ有名無實ノモノナリ

封

始メ鎌倉政府ノトキハ、全國ノ土地總テ朝廷ノ御領ニシテ、國司及ビ守護アリテ之ヲ治メタルガ故ニ、其ノ趣未ダ純然タル封建ノ組織ヲ爲サズ、即チ郡縣的封建トモイフベキ制度ナリシナリ、足利時代ニ至テハ、全國ヲ以テ將軍ノ有ト爲シ、將軍ノ權ヲ以テ祿ヲ制シ、郡國ヲ分與シテ別ニ國司ヲ置カズ、而シテ皇室朝廷ノ御費用ハ、皆幕府ヨリ之ヲ支辨ス、是ニ於テ眞成ノ封建組織セラレタリ、然レドモ其ノ輕重大小、權衡ヲ得ズ、之ヲ以テ其ノ組織竟ニ解体シ、梟雄各國ニ割據シテ各々土地人民ヲ私有シ、殆ンド無政府同樣ノ有樣トハナレリ

法

第二法律　足利政府ノ法律ハ、總テ建武式目ニ憑據ス、凡ソ訴訟アレハ先ヅ管領ニ上申シ、管領之ヲ奉行ニ下シテ檢案セシメ、其ノ受理スベキモノハ其ノ訴狀ニ事項ヲ題シ、開闔ヲシテ之ヲ引付頭人ニ告ゲ、裁判者ヲ定メシム、金穀田園ノ貸借賣買、奴僕等ニ關スル訴訟ハ、政所ニ於テ之ヲ決シ、詐譌遺失等ノ事ハ、問注所ニ於テ之ヲ決ス、又地方ノ訴訟ハ、守護國主便宜之ヲ決シ、不服ノモノハ訴訟奉行ニ訴フ、其ノ刑罰ヲ執行スルハ侍所ノ任ナリ、然レ𪜈當時兵革止ムヰナク、將士國土ヲ私有シテ各々意ノマヽニ法ヲ行ヘルカ故ニ、式目ハ空文ニ屬セルノミ、其ノ少シク行ハレシハ京師及ヒ鎌倉ニ過キス

財

第三財政　義滿曾テ細川頼之ノ議ヲ用ヒ、田租ノ率ヲ定メテ四公六民トス、當時マタ明ノ永樂錢ヲ以テ田圃ヲ算ス、然レ𪜈晩年奢侈ヲ窮極シ、財用空耗セルヲ以テ、明朝ヨリ錢ヲ乞フテ之ヲ使用セリトイフ、義政ノ代ニ至リ、天下兵革ニ苦メルモ尙ホ驕奢ヲ極盡セルガ故ニ、幕府ノ用度ハ大ニ窮ス、乃チ諸國ノ領主ニ課シテ出金セシメ、號シテ大儀トイフ、又錢倉ヲ富豪ヨリ借リ、倉役ト稱ス、是ニ於テ四公六民ノ制行ハレス、各國ノ領主等恣ニ稅率ヲ高クシテ以テ聚斂ヲ厚クス、當時マタ臨時ノ課役アリ、

殿

之ヲ段錢ト稱シ、將軍家ニ事アル毎ニ之ヲ課ス、都鄙並ニ一土藏ニ三十貫文、一酒戶ニ二百文ヲ徵ス、其ノ誅求度ナキヲ以テ、民或ハ耙耒田宅ヲ賣ラリルヲ得サルニ至ル、又武家ニハ武家役ト稱シテ其ノ收入五十分ノ一ヲ納メシメ、後增シテ二十分ノ一ヲ取リ、百姓ニハ夫役ヲ課シ、每月五六回ヨリ甚シキハ八九回ニ及フ、故ニ民其ノ負擔ニ苦ミ、流離顚沛スルモノ多ク、田圃荒蕪ス

武家

第八章　風俗

服

第一服裝　衣服ハ直垂ヨリ變化シテ素襖、十德等モ行ハル、又肩衣アリ、素襖ノ袖ヲ取捨テタルモノナリ、人ノ階級ニヨリテ、衣服ニモ差アリ、大抵ハ素襖及ヒ肩衣ヲ用フ、將軍ノ服ハ各種ノ織物、白綾等ニテ作リ、紫色ノ紋ヲ附ケタリトイフ、通例九月ヨリ翌年三月マデハ、綿入又ハ薄小袖ヲ着シ、四月ヨリ袷ヲ著シ、又男子ハ五月五日ヨリ、女子ハ六月一日ヨリ帷子ヲ着ルヲ定例トス、是レ中以上ノ人ニ行ハレタル所ニシテ、中以下ノ輩ハ必ヌシモ然ルニ非ズ

當時貴人ノ步行スルトキハ、概子大刀及ビ小刀ヲ佩ブ、又打太刀トテ、別ニ從者ヲシテ捧ゲ隨ヘシムルモアリ、應仁以後、天下大ニ亂レ、庶民恣ニ雙刀ヲ帶シ、又武人中ニハ長刀流行シテ、甚シキハ七尺三寸ノモノヲ帶スルニ至ル、男女共ニ扇ヲ携フルヲ以テ禮トス、女子ハ又總テ被衣、又ハ市女笠ヲ被リテ面ヲ露ハサズ

出ノ時代ニハ平安優美ノ風行ハレ、武人モ齒ヲ涅シ眉ヲ畫キテ公卿ニ擬スルニ至ル、然レドモ兵亂相次キテ起ルニ及ヒ、殺伐ノ俗漸ク生ジ、月代ヲ廣クスルヲ行ハル、或ハ總髮、撫付ナルモアリシトイフ、婦人ハ概シテ垂髮ナリ、鼻隱ノ婦人ニハ、或ハ白色ノ絹布ヲ以テ髮ヲ結ヒ、殘餘ヲ左右

ニ乖レシモアリ、之ヲ唐風ト稱ス、

第二家屋　貴人ノ住宅ハ、築垣ヲ以テ邸宅ヲ圍ヒ、南方ニ大門アリテ之ヲ正面ノ門トス、大門ノ内ニ屏重門アリ、此ノ門内ニ會所、主殿、番所（遠侍トイ）アリ、客來リトキハ、會所ノ前ニ於テ名ヲ通シ、執事出デ之ニ接ス、會所ハ即チ客殿ニシテ賀儀ノ節ハ茲ニテ客ニ會見ス、主殿ハ家ノ中央ニ位シ、妻戸二アリ、一ハ貴人ノ出入スル所ニシテ、一ハ常人ノ出入スル所タリ、主殿ニ次デ帳臺搆アリ、主人ノ寢殿是也、其ノ西ニ連リテ公卿ノ間、藏人所等アリ、會所主殿ノ前ハ廣椽ニシテ大床トイフ、其ノ屋形ハ唐破風ヲ具ヘ、檜皮ヲ以テ葺ク、又下民ハ藁若クハ茅ヲ以テ葺キ、板庇ヲ附セリ、當時ハ書院玄關ノ風、貴賤一般ニ行ハレシガ、宋風ノ玄關廢シテ、今日ノ玄關ニ類スルモノ此ノ時代ヨリ始マレリ、又數寄屋ト稱スル茶亭モ此ノ時代ヨリ行ハレ、今ノ二階ハ此ノ時代ノ金閣（義滿ノ造ル所三層樓ナリ）銀閣（義政ノ造ル所二層樓ナリ）等ニ胚胎ストイフ

食物　第三食物　常食ハ尚ホ朝夕二度ナレドモ、餅或ハ温飩等ヲ間食スルアリ、之ヲ點心トイフ、後爭亂相付グニ及ビ、三食ノ風始メテ起レリ、當時客ヲ饗スルニ法式アリ、或ハ賓客ノ面前ニ於テ魚鳥ヲ調理スルモアリ、配膳ノ方法、膳部ノ整備等、總テ鄭重ヲ盡セリ、將軍義政、風流奢侈ヲ好ミ、特ニ茶事ヲ嗜ミシヨリ、中以上ノ家ニ至リテハ、珍奇古雅ノ器具ヲ愛玩シ、抹茶ヲ催フシ、又ハ香ヲ燻キ、花ヲ挿スヿモ流行シ、其ノ法ニ流派ヲ立ツルモノアルニ至ル

禮式　足利義滿華奢ニ耽リ、好ミテ外觀ヲ修飾ス、故ニ當時禮文頗ブル備ハレリ、毎年正月、及ヒ賀儀ニハ、必ラズ吉書始ノ式ヲ行フ、其ノ儀、三條ノ令文アリ、ニ曰ク、神ハ人ノ崇祀スル所、人ハ神ノ加護スル所、宜シク式目ヲ守リ、其ノ禮儀ヲ愼ムベシ、二ニ曰ク、國ハ民ヲ基トシ、民ハ農ヲ本トス、宜シク力ヲ灌漑ニ盡シ、稼穡ヲ勵ムベシ、三ニ曰ク、諸國ノ貢賦、各々土宜ヲ納メ、條例ヲ循守シテ其ノ期ヲ誤ツ勿レト、朝廷大禮アリ、將軍就職アル

毎ニ之ヲ行フ、然レドモ是レ空文ノミ

鎌倉時代ノ末ヨリ、武人中其ノ妻子ヲ質トシテ以テ其ノ事フル所ニ背カリハヲ擅フノ風アリ、是ニ於テ婚嫁ノ事漸ク重ク、始メテ媒妁人ヲ定メテ其ノ式ヲ行フ、足利氏ニ至リテハ、其ノ禮法略々定マリ、單ニ武人ノ間ノミナラズ、庶民ノ間ニモ亦其ノ風行ハルヽニ至レリトイフ

婚姻ニ媒妁ヲ用ヒル

第九章　美術及ヒ工商業

足利時代ニハ、兵革一日モ止ムヤナク、民業皆衰頽セリト雖ドモ、美術ノミハ獨リ大ニ進歩セリ、是レ奢侈ノ風長セルノミナラズ、當時ノ武將等其ノ下ヲ勵マスガ爲メニ、時々美術品ヲ與ヘテ其ノ功勞ヲ賞シ、之ヲ得ルモノモ亦之ヲ珍重シ、一枚ノ畫、一個ノ茶器モ、視ルヿ城池ノ如クセルモノ有リシガ故ナリ

繪畫

繪畫ハ足利時代ニ於テ最モ進歩シタルヲ見ル、鎌倉時代ヨリ禪學盛ニシテ、武人ノ之ヲ修ムルモノ多ク、隨テ畫モ漸ク恬淡ニシテ韻致アルヲ好ミ、足利時代ニ至リテ最モ甚ダシ、是ニ於テ支那畫大ニ流行ス、支那畫ハ可翁ノ始メテ傳フル所ナリ、可翁ハ筑前ノ僧、名ハ宗然、元ニ留ルヿ十年ニシテ歸ル、其ノ畫精妙ニシテ特ニ寒山拾得、及ヒ觀音ノ畫ヲ善クス、貞和元年卒ス、次デ鐵舟、愚溪、玉腕等アリ、皆宋元ノ畫風ニ倣ヒ、恬淡ニシテ韻致アルヲ尚ブ、應永中明晁及ヒ周文アリ、明晁ハ晁殿司ナリ、特ニ佛像人物ニ工ニシテ、本邦第一ト稱セラル、之ヲ明晁派トイフ、周文ハ山水花鳥ヲ善クシ、門下ニ宗丹、小墨溪、雪舟等アリ、各々一家ヲ成ス、雪舟特ニ出藝ノ名アリ、航シテ明ニ至リ、四明天童ノ第一座トナル、歸朝スルニ及ヒテ畫名海内ニ鳴ル、雪舟、雲谷寺（防州山口）ニ住セルヲ以テ、此ノ畫派ヲ雲谷派トイフ、此ノ時代ニ狩野家勃興ス、其ノ祖正信將軍義教ニ仕ヘ、頗ル丹青

支那畫

明晁派

雪舟

雲谷派

狩野家勃興

古法

ニ工ナリ、其ノ子元信、和漢ヲ折衷シテ筆力神ニ入リ、畫名一代ニ冠絶ス、世ニ之レヲ古法眼ト稱シ、狩野家ノ泰斗トス、其ノ後、永德、山樂、宗信等アリ、長谷川等伯、狩野家ヨリ出テヽ、別ニ一機軸ヲ出ス、『土佐家モ亦世々名

土佐

手ヲ出シ、寂滿、光重、光國、光弘、行光、廣信、光信、光純等アリ、行光、光信特ニ傑出シ、行光ハ和畫五筆（光長、慶恩吉、光行、光秀）ノ一人ニシテ、光信ハ三筆（光長、光信、光起）ノ一人ナリ、此ノ他、宅磨淨宏、粟田口經光、芝尊海、及ヒ雪村等アリ、皆優ニ一家ヲ成

田

北條高時、田樂法師ヲ養ヒシヨリ、其ノ戲一時盛ヲ極ム、後醍醐天皇ノ御代ニ方リ、田樂法師等兒童ニ新藝ヲ敎ヘ、田樂ノ間ニ之ヲ交ヘ演ゼシム、

猿樂能及ヒ狂言ノ源

是レ猿樂能及ヒ狂言ノ源ナリトイフ、猿樂能ノ行ハレシハ、足利時代ニシテ、緒崎清次（觀阿）及ヒ其ノ子元清最モ能ク伎ニ熟シ、將軍義滿ニ寵セラル、此ノ二人始テ猿樂能田樂能等ニ由リ、更ニ幾多ノ新曲ヲ作リ、大小鼓、横笛等ノ樂器ヲ定メ、猿樂ト狂言トヲ區別シテ、大ニ其ノ面目ヲ改メタリ、當時猿樂大ニ行ハレ、竟ニ武家ノ式樂トナリ、義政ノ頃ニハ觀世、今春、保生、金剛ノ四座ヲ分ツニ至ル、『織田信長ノ侍嫗、小野通ナルモノ、才華アリ、曾テ淨瑠璃十二段ヲ作ル、是レ淨瑠璃ノ祖ナリトイフ

淨瑠璃ノ祖

陶器

義政以降、點茶大ニ行ハレタルヲ以テ、陶器ノ出ヅルモノ多ク、古雅清韻愛スベキモノアリ、即チ文明中ニ、尾張瀨戸村ヨリ志野燒及ヒ織部燒ヲ出シ、永正中京師ヨリ樂燒ヲ出シ、天正中唐津（肥前）ヨリ奥高麗燒ヲ出ス、樂燒ハ宗慶（支那人）ノ發明ニシテ、宗慶ノ子長祐、織田信長及ヒ豐臣秀吉ノ命ヲ奉ジ、千利休ノ意匠ニ由テ茶器ヲ製ス、秀吉深ク之ヲ賞シ、特ニ樂ノ字ノ金印ヲ賜フ、仍テ樂燒ト稱ス』此ノ他京窯（京師）常滑燒（尾張）丹波燒（丹波）備前燒（備前）萩燒（長門）今戸燒（武藏）等ハ皆此ノ時代ヨリ製出サレタリ、『備前燒ハ其ノ堅實ナルヽ我カ邦陶器中ノ冠タリ、天正中製出セルヲ古備前トイフ、韻致アリ、世ニ重ンゼラル

樂燒

備前燒

漆器

漆器モ亦進歩シタルモノヽ一ナリ、後龜山天皇ノ御代ニ、堺ノ工人始メ

春慶塗

テ春慶塗ヲ作ル、義政東山ニ退隱スルニ及ヒ、多ク漆器ヲ製セシム、當時泰阿彌、清阿彌、羽田五郎等ノ名工アリ、後土御門天皇ノ御代ニ、京師ノ工人門入ナルモノ、支那ノ法ヲ傳ヘテ堆朱、堆黑ヲ發明ス、元龜天正中ニ至リテハ、紹鷗樣、利休樣、織部樣ト稱スル漆器ヲ出シ、又會津塗モ天正中既ニ世ニ出テタリ、『蒔畫ハ兵亂ノ際大ニ衰ヘタリト雖モ、天正中京師ニ五十嵐道甫ナル者アリ、蒔畫ヲ善クシ、良匠ノ名アリ、當時烏丸通ニ名工多ク住居シ、各々其ノ業ヲ競フ、時人之ヲ烏丸物ト稱ス、又朱雀ニ釋迦、提婆

蒔畫

其他名匠ノ二名匠アリ、其ノ造ル所、精妙ヲ極ムルモノアリ

織物

織物ハ應仁ノ亂後、特ニ衰微シ、絹帛ノ織工等ハ京師ニ住スルヿ能ハズ、白雲村ニ逃レテ纔カニ其ノ業ヲ保ツノミ、是ヨリ先キ正平中、大内弘世京師ノ織工ヲ山口ニ召シ、羅及ヒ紗、綾等ヲ織ラシメタルヿアリシト雖モ、未タ幾クナラサルニ、兵亂ノタメ盡ク絶滅セリ、天正中支那ノ織工來ルモノ多ク、且ツ豐臣秀吉織物業ヲ奬勵セシヲ以テ、頗ブル精好ノ物ヲ出スニ至レリ、即チ明樣ノ好絹、裱絹、紗、紋紗、金紋紗、錦等アリ、之ト同時ニ京師西陣ノ織物業開ケ、唐織錦ノ如キ精巧ノ物ヲ織リ、綾織業ヲモ再興シ、又堺ノ工人ハ始メテ金襴及ヒ緞子、縮緬ヲ織出シ、京師ノ工人ハ始メテ繻子ヲ織出セリ、是ニ於テ織物業進歩ノ基大ニ立ツ

始メテ金襴緞子縮緬繻子ヲ織リ

十七

此時代ニハ京大工、奈良大工、伊豆大工、玉繩大工相模鎌倉大工等アリ、奈良安土

大工ノ藤朝、京大工ノ亦三郎父子最モ名匠ト稱セラル、天正中信長、安土城ヲ築キ、七層ノ天守樓ヲ建ツ、高サ臺跌十二間餘、樓九丈九尺、本邦ニ於テ樓ノ高峻ナル者ノ嚆矢タリ、秀吉モ亦京師ニ聚樂第ヲ造ル、其ノ結構

聚落

宏麗ニシテ、遠ク昔日ニ過グ、マタ大ニ土木ヲ起シテ大坂城ヲ築ク、其ノ

大坂

宏大ナルヿ天下ニ冠タリ、當時奈良、京師、大坂、堺等ニ名匠アリ『安土城中、南北廿間、東西十七間ノ石倉アリ、本邦第一ノ大石倉ナリ

石倉

永祿十一年耶蘇宗ノ僧、京師四條ニ永祿寺ヲ建ツ、建築ノ法、皆南蠻ノ制ヲ模ストイフ』天正十四年秀吉方廣寺ヲ立テ、釋迦ノ大像ヲ安置ス、堂ノ

方廣寺

高サ二十丈、像ノ高サ十六丈、本邦佛殿ノ最モ大ナルモノハ、東大寺及ヒ此ノ寺ナリ』秀吉マタ大坂ノ天滿橋（長サ百十間）天神橋（長サ百二十間）難波橋（長サ百二十八間）及ヒ京師ノ三條橋（長サ六十一間半其ノ柱六十三本總テ石造ナリ本邦ニテ橋ニ石柱ヲ用ユルヿ是ヨリ始マル）五條橋（長サ七十六間亦石柱）淀ノ大橋（長サ百卅八間）伏見ノ豐後橋（長サ百三間）等ヲ造ル

橋

船舶

船舶ノ巨大ナルモノモ、此ノ時代ニ造ラレタリ、義滿使ヲ明ニ遣ハスニ方リ、命シテ大船ヲ造ラシム、是ニ於テ大船ノ製作復タ起ル、下リテ應永中ニ至リ、諸國ノ商人等巨船ヲ造リテ盛ニ貿易ニ從事ス

駕籠ノ嚆矢

義滿好ミテ肩輿ニ乘ル、其ノ制、輿ニシテ、蓋上ニ棒アリ、人ヲシテ之ヲ前後ヨリ肩ニ擔ハシム、稱シテ加吾（カゴ）トイフ、是レ駕籠ノ始メナリ

刀劍

刀劍鍛造ノ業ハ、前代隆盛ノ後ヲ承ケテ衰ヘズ、當時備後ノ三原ニ正家アリ、但馬法城寺村ニ國光アリ、伊勢桑名ノ千子村ニ村正アリ、千子村正ト稱ス、其ノ刀、鋒芒鋭利ヲ極ム、又京師ニハ埋忠重吉アリ、美濃ノ關ニ三品吉道アリ、皆名刀ヲ鍛フ』足利氏ノ時代ニハ、長劍巨刀多ク、五六尺ヨリ甚ダシキハ七尺三寸ニ至ル、織田氏ノ頃之ヲ縮メテ三四尺トス、『當時マタ刀劍ノ吉凶鋭利ヲ相スルノ風起リ、乃チ、宇都宮三河岡崎正宗、及ヒ貞宗、秋廣、妙本阿彌等アリ

革工

革工モ兵亂ノ世ニ至リテ彌ヨ行ハレ、此ノ時代ニハ正平革（肥後熊本）錦革（一名御革）播摩滑革、菖蒲革等アリ、又革足袋、毛皮草履等モ製出セラレ、武人ハ侍以上、革足袋ヲ着ルヲ以テ禮トナスニ至ル

商業

義滿明ト通ズルニ及ビ、彼ノ國トノ貿易盛ニシテ、商人ノ往復尠カラズ、後マタ、南蠻人トノ貿易モアリテ、鐵砲ノ如キモ當時既ニ南蠻人ヨリ之ヲ傳ヘタリ、南蠻人ハ即チ歐州人（特ニ西班牙葡萄牙人）ノ南洋ヨリ來レルモノナリ、元龜元年長崎ノ地頭大村理專、南蠻人ノ請ニヨリ、長崎ヲ開キテ貿易場トス、始メ南蠻人多ク薩摩大隅ノ海邊ニ來リテ貿易ス、是ニ至リテ進ンデ長崎ニ入ル、當時外國貿易ノ盛ナリシヿ想フベシ』

内地ノ商業

内國ニ於テハ和泉ノ堺ニ巨商豪估多ク、商業頗ル盛ナリ、當時商店ハ店棚ト稱ス、京師ノ

如キハ呉服商、雜具店、庇ヲ聯子テ相接ス、其ノ店ニ在ルモノ男子ハ烏帽子ヲ着ケ、袴ヲ穿チ（當時ノ風俗モト然リ）女子ハ垂髮ヲナセリ（是レ又當時ノ風俗ナリ）又婦人頭上ニ貨物ヲ乘セテ市中ヲ行商スルモノアリ、蓋シ中古ノ末、行商ハ大抵婦人ノ營ム所ナリシガ、足利時代ヨリハ男子モ亦之ヲ爲スニ至レリ、但シ諸國ヲ巡リテ行商スルガ如キハ、男子ノミ之ヲ爲セリトイフ

第九篇

近世史（第三）

第三期　尚武時代

第一章　群雄割據ノ概勢

尚武時代日本人種ノ氣象

應仁以後、將軍ノ威令行ハレズ、天下ノ武人等、各々國郡ニ割據シテ相戰フ、之ヲ尚武時代トス、此ノ時代ハ日本人種ガ特ニ英武剛邁ノ氣象ヲ發揮セシ時代ナリ、其ノ心膽ノ義烈ニシテ且ツ堅剛金鐵ノ如クナル、獨立進取ノ雄氣壯ンニシテ權勢ヲ恐レス、一死ヲ吝マズ、徒手一世ヲ經紀シテ延テ外國ヲ耽視セル、剛毅質素ニシテ實力ヲ尚ビ、虛飾ヲ憎ミ、又然諾ヲ重ンジテ不義ヲ卑メタルガ如キ、古今獨歩ト稱スベシ、去レバ一城一國ノ主タルモノハ、皆勇武凡俗ニ超出セルモノニシテ、大抵天下ヲ取ル